
正義の反対はまた別の正義？

せぶんすたあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の反対はまた別の正義？

【著者名】

N4763M

【作者名】 せふんすたあ

【あらすじ】

ダメーテーが妄想の果てにまじで転生？チート能力もらって暴れまくる！でもまあ、現実そんなに甘くはないってことを思い知るんだけど・・・。ネギまのオリ主一次創作です。むしゃくしゃしてやつたのではつきり言つて自己満です。それでも楽しめたらなーと思ひます。

第零話 ハンマー……ヒヤニタリヒナにか（前書き）

処女作です。

突発的に書いたから面白くはないかもです。
どうか暖かい目で見てやってください。

第零話 ハンマー……ヒマハリにか

俺の名前は一 悠斗。

今年二十歳になる… 一ートだ。自分で言つのもアレだがな。

なんでこうなつたかは、正直言つてわからない。
強いて言つなら流され易いこの性格だろうか？

乙と言えない日本人を地でいつてるからな。

高校も流されるままに入つて卒業まで大した思い出もなく、大学入試は失敗。

親が公務員だからと公務員専門学校に行くも、途中で投げ出す。
どれもこれも自ら悩んで決めたとは言い難い。
だから勉強も続かない… のだと思つ。いや、そう思いたいだけかも
な。

今は専ら家でネット小説や動画を楽しんだり、ゲームしたりの毎日だ。

楽しいには楽しいが、ずっとやつてれば飽きも来る。
ふとした時に何時も独り言のように呟いては自嘲する。

「はあ… 一次創作みたいにアニメや漫画の世界にいきたい…。」

そんなこと現実では有り得ないのは理解つてる。

理解つているが、こうも変化のない毎日をおくると酷く心が病んで来る。

それが、空想や妄想の世界への介入など馬鹿げたことを望む原因となっているのは明白だ。

ああ、変な事考えてたから頭が痛いな。
頭痛が痛いなんて言いそうなくらいだ。

まだ昼間だが、寝ちまうか。

そんな事を考えながら、意識は徐々に徐々に闇の中へと引きずり込まれる。

ここから俺の人生は狂ハジマつていいく。

「んん、よく寝……た?」

目を開けると、そこには深い暗闇。

夜かとも思ったが、何も見えなくなる程暗くなる訳がないと、この考え方を否定。

床?の感触は妙な感じだ。

そこにあって、それでいてそこではないような感覚。

足で立つてみると確信できるが、足裏には何も触れていないような。ここは自分の部屋? - - - - - 恐らくノ。部屋なら布団の感触がないと変だし。

なら地下? - - - - - これも違つ。地下なら床の感覚に説明がつかない。

・・・夢? - - - - - ありえそつだ・・・。とりあえず保留。

死後の世界とか? - - - - - リアルに未練はないが・・・。
これも保留。

幾つかの自問自答をしていくと、不意にパソコンの起動音のような音が耳に入ってくる。

音の方に目を向けると、使い慣れたパソコンが置いてあった。

「ちよ・・・なんで俺のパソコンがあんのよ。」

考えても判る訳がないのでとりあえずディスプレイを見つめる。しばらくして、黒い画面のまま固まった。

「おーおー、起動すらまともにしないのかよ・・・っ！」

固まつたままのパソコンに内心舌打ちをした俺は、その後に目を見開いた。

流れるように文字が打ち込まれているのを見て。

『よつこやーあなたは選ばれし者です。

ここは、あなたの願いが叶う部屋。

あなたの今最も叶えたい願いがある条件と引き換えに叶います。

条件は願いの大きさや価値によつて変わりますが、基本的には極

簡単なものです。

そしてあなたの願いは異世界に行くこと。

条件は元の世界には一度と帰れなくなることです。

では行きたい世界の名前と欲しい能力を一つ入力してください。』

うん。言いたいことは色々ある。

あるが、とりあえずは後回しだな。

行くこと確定みたいだが、さして問題はない。

そう簡単に叶う願いでもないから大して期待もしない。

だが、もし・・・もし本当に叶うなら。

これは願つても無いチャンスではある。

ほんの少しだけ期待してみるか。

行きたい世界・・・ファンタジーの世界が一番興味がある。

f a t eは、シリアスすぎてなんかなあ。

りりなのは介入時期を決められないと入りずらい。

フェアリー テイル・・・どう介入していいかわからん。

G Sは横島がいるから論外。

セキレイは俺の能力関係ないから除外。

ゼロ魔は政治が絡むしなあ。

ここは手堅くネギまで行こうか。

個人的に原作破壊したい作品第一位だし。

後は能力だが、これはもう決まってる。

伊達に妄想してないぜ。

自慢にもならんがな。

「これで完了つと。」

最後に enter キーを押して、すべての入力を終える。
ここまでくれば期待もかなり膨らんでいた。
これで何も無ければ・・・。

『それでは今からあなたの願いを叶えます。

Good luck!』

その文字を認識した直後、俺はまた意識を失った。

その頃、裕也がいた世界ではある男性が原因不明の死を遂げたことがニュースになっていたのを本人は知る由も無い。

第零話 テンプレ・・・とは言ひやうにか（後書き）

無事プロローグを書き終えました。

率直な感想などありましたら、今後の精進のため気軽に書き込んでいただけたら幸いです。

稚拙な文ですがこれからよろしくお願ひします。

第壱話 不幸？いやある意味幸運（前書き）

やつと本編です開始です。

主人公の能力は話の中で説明入れると思います。
はつきりいつてチートもいいとこですが。

誤字脱字などあればご指摘いただければ嬉しいです。
ゆっくりでもいいから続けたいなあ。

第壱話 不幸？いやある意味幸運

やあ、みんな。

俺は夢かどうか判断しづらいことを体験した悠斗だ。

俺としては別に夢でもよかつたんだがなあ。

今の状況を一言で表すなら、それは・・・

「おひあひつ（転生かよ）。」

第壱話 不幸？いやある意味幸運

マジで漫画の世界に来れるとはね・・・。

正直予想外です、はい。

予想外と言えば田の前の人たちもだけどね。

少しきつそうな目をした特徴的な眉毛の綺麗な女性と

赤げの髪を持ち、子供っぽい笑顔が似合つイケメン男性。

『災厄の魔女』として知られるアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

そしてこの物語の主人公の父親であり、『サウザントマスター』と
謳われる紅き翼のリーダー

英雄ナギ・スプリングフィールド。

どう見てもネギの両親です本当にありがとうございました。

なんか感動。

あの非現実世界の人物が実際を現実として見ることができるなんて。

いや、最初は「え、俺ネギのポジション?」とか思つたんだよ?

けど・・・よく見たらお父様が赤子抱いてんのよ(ちなみに俺はお母様に抱かれている)。

二次小説の中にもいくつかあつたけど

どうやらネギの双子の兄弟設定らしい。

ん?俺がネギかもしれないって?

ハハ、んなの認めるか。

主人公に憑依。転生なんてやだよ。

「よし、お前の名前はネギだ！」

「ならそなたの名前はアリアじゃ。」

お父様が自分で抱いている赤子に向かってネギと名づける。

アリームではよかつた。

アリームでは。

でもお母様。

私に微笑みながら名前をつけるのはいいのです。

笑顔もとても綺麗だと思います。

けど、けど・・・

それは女の子につけられた前でせん。

え、おれ女の子？

結論からいってもそんなことはなかつたです。

ちゃんとこいつこましめたとも。

男の象徴^{シンボル}といえる物が。

T S（性転換）物かと思つてかなり焦つてしまつたが、正直双子の兄弟設定でお腹いっぱいだからね。

さすがにT Sはね・・・。

でもまあ、両親がある二人ならある意味幸運かな？

魔力や才能とかやっぱそうだし。

いくら能力もらつても、不安は残るしなあ・・・。

貰つた能力がどの範囲まで使えるのかわからないのもある。

大して使えなかつたら・・・泣ける。

まあそれは追々、かな？

ちなみに今は『あの』村に預けられると」。

そり、悪魔の襲撃がある村ですな。

田の前にいるのはスタン爺さんと思われる人物。

「それじゃあ、爺さん。」の一人を頼む。」

「・・・この子達には親が必要じゃ。なぜそれがわからん。」

「それでも、それでも俺はこの一人とは一緒にいられないんだ。

だから・・・頼む。」

顔を歪めて真摯にお願いするお父様。

正直この姿を見て、胸が熱くなつた。

今まで『子供の面倒もきちんと見る』ことができない駄目な親』つて

そんなイメージだつた。

けど、違う。

この人はそんな人間じゃがない。

心の中では誰よりも俺達の傍にいたい。

一緒に生きたい。

そう思つてゐるはすだ。

人の顔色ばかり伺つてきた前世の俺だからわかる。

このお父様の表情は、悔しさと悲しみ。

たぶん、俺達二人の面倒を見ることができない自分の状況に対する悔しさ。

そしてなにより、こうすることしかできない悲しさ。

そんな感情が渦巻いてるって想像できる。

俺は初めて、父親つてものを尊敬したかもしない。

「わかった。この子達二人のことは何があつても守ると誓つ。

だから・・・必ず帰つて來い。

それがお前とワシ、スタンの誓いじゃ

「ハハ、変わつてねえな。

爺さんだけはいつも俺血筋を見ててくれたよな。

・・・わかった。

全てが終わつたら必ず、帰つてくれる。

それじゃあまたな爺さん。」

「ああ。」

そう言ひて、お父様は去つた。

俺達一人はスタン爺さんに抱かれて

スタン爺さんはお父様が去つていった方を見つめている。

「馬鹿者が・・・。」

そう呟いた爺さんの表情は、色々な感情が混じり合っていて

俺には読むことができなかつた。

ただ、爺さんの呟いた言葉だけは

やけに耳に、心に響くものがあつた。

第壱話 不幸？いやある意味幸運（後書き）

第一話終了です。

所々勝手な想像がありますが、大目に見てやってください。
次は村での生活から悪魔襲撃までになると思います。
能力も次に出すかな。

でわ、またつぎの話で。

第弐話 めでか！」めでたす・・・やつやめた感が否めない（前編）

今回少し長めです。

能力解禁の回。

作者自体がやりすぎたかな、とか思つてたりなかつたり。

悪魔襲撃まではいけなかつた。orz

皆さんの感想が怖いかも・・・。

第弐話 めでかじりめでたす・・・やつすめた感が否めない

新しい人生を歩みだした、悠斗改めアリアだ。

いやあこの村はいいね。

空氣が清んでて、村人は優しく明るい。

もうずっとここに住んでいたいよ。

・・・現実逃避は止めにしよう。

わざわざ言つたことは事実だし

村が襲撃されるのはどうにかしたい。

けども

俺、正確な襲撃の日なんて知らねえよ・・・

第弐話 おやかにじまどとは・・・やつすきた感が否めない

この村に来て二年が経つた。

俺とネギは今のところ健康に育っている。

これまでにも色々あつたさ。

一番はあれだな、おむ・・・

うん、忘れよ。ひ。

あれは羞恥プレイにも程がある。

教えてヒントをだすなら

転生者が一度は通る道だな。

「ネギー！アリアー！遊びに行くわよーーーーー！」

「あ、待つてよアーニャ！」

「そんなに急ぐと転ぶよ。アーニャ、ネギ。」

気がつけば三人仲良くいることが多くなつてゐる俺達。

ネギ、アーニャは漫画のまんま。

俺は背中に届くぐらいの髪を一つに結び

ネギよつ頭 一つ壱ご飯。

はつきりいってお母様にそつくりな容姿だね。

一応体も鍛えてるけど、本当に筋肉ついてんのかつてくらい細い。

女と間違えられることが多々あるのが悲しい現実だ。

だからと言つて髪を切るつとしたらみんなが『もったいない!』とかいつて

切らしてくれない。

女に間違えられるのは勘弁願いたいよ・・・。

最近は三人の位置関係も大体決まってきた。

アーニャ親分。

ネギはアーニャの子分。

そして俺は・・・見張り?

見張つてるのは親分と子分の行動だけど。

まあそんな感じじさ。

「今日はどうするの?アーニャ、兄さん。」

「んーそうねえ・・・アリアは何かある?」

「特にはないよからなんにでもつけあつよ。

けどネギ、たまには自分の意見も言わなきや。

こつもアーニャの意見ばかり聞いてぢや

大事なときに何も決めることができないよ。」

「うう・・・兄さんの話難しくてわからないよ・・・。」

「ほんとよねー！ネギとは大違い！

とこつかほんとに年下なのか

ショッちゅううギモンに思つわよ？」

あへへ。

この子は本当に鋭い時があるなあ。

そりゃあ前世で二十歳までの記憶もありますから。

君達は親戚の子供感覚で見てるからね。

子供好きだからひつに世話を焼いてしまつ俺がいる。

・・・決して、けつこして、口汚でもシバタでもないぞ。

そして今の会話からわかる通り、ネギの思考誘導中です。

光源氏計画みたいなものだ。

けど、効果があるのか・・・。

あつたら僕偉ぐらに考えていろが。

あんな驕り高ぶつた正義の狂信者にはなつて欲しくない。

「まだ難しかつたかな。

まあ『そんなこと言われたな』ぐらいに覚えていればいいよ。

ネギは頭いいからね。」

「うん、わかつたよ！」

「……。」
「……。」

「そうね、ほんとに三歳には思えないわ！」

まったく、としつゞのこげんつてものが・・・ブツブツ。

「ハハ、まあ俺はいいんだよ。

一人ともその年にしてみれば十分すぎるさ。」

こつちは前世の知識があるのに、会話ができるってこと自体がおかしいだろ。

少しあわかるよつて話してゐつもりだけぢや。

結局、アーニヤの提案により

村の外にある湖に行くことになった。

俺は専ら監視しながら本を読んでるけど。

今日もいつもの如く、童話（といつても原典に近い）に見せかけた魔導書を読んでいる。

あ、そうそう。

最近は能力について大分理解ってきた。

俺が欲した能力、それは『あらゆる能力、物質を創造する能力』だ。定義が曖昧すぎたのが少し不安だったが、色々試してみた結果はつきり言つてチートすぎる事が判明。

まず最初に実験したのが、インデックス禁書目録の能力

『アクセラレータ一方通行』。

これができるたら死なない確立が大幅に変わる。

前世では平穏な世界にいた俺としては、第一に死なないことを考えなければならない。

敵の攻撃は受けたくないし、どんな攻撃がいつ襲つてくるのか

そんなのわかる訳がない。

悩んだ末、『一方通行』の能力の一端である

反射があれば・・・と思ったのが切欠。

結論から言つと、実験は成功。

一方通行の能力を身につけた瞬間に、能力の使い方も頭に流れ込んできた。

これは思わぬ副産物だといえる。

ただ超能力は、よくわかんないが魔力とも氣とも違う力を使うらしい。

能力が発動した時（一方通行ならベクトルを変化させた瞬間）に減り、もちろん空になれば使えない。

・・・ただ半口は使い続けられたけどね。

で、今日までに身につけた他の能力は

フェアリー・テイルのエルザとグレイが使う魔法

『換装』と『アイスマスク』。

禁書目録からは黒子の

『瞬間移動』。

Gの横島が使う超稀少能力

『文珠』

あとは、みんなも知ってる真祖の吸血幼女エヴァ様が使う

『マギア ハレバア 閻の魔法』。

これはちと改良してるのでね。

物質はもつと時間があるときしかいつて思つてる。

まあでも、一応悪魔対策はばっちりだ。

ん？ そんなに必要ないだろつて？

備えあれば憂いなし、だ。

なにせ初めての戦闘だからな。

いつでもさやがれ、悪魔共。

俺の糧にじてやるよ。

第三話 もののけ姫（後編）

はい、もつなんか色々いじめんなやー。
感想はお好きに書いてください。

いつなつや やけだー おれは血運をやめるー

第参話 悪魔襲来！RPGで使うスライム狩みたいなもん（前書き）

悪魔襲撃編です。

初めての戦闘なので上手く書けていないと思います。
ご指摘いただければ嬉しくて小躍りします。

第参話 悪魔襲来！RPGで「うスライム狩みたいなもん

俺は今村に向かつて全力で翔けている。

ついに始まってしまったのだ。

悪魔襲撃が。

『一方通行』で移動速度を上げながら

景色が線に見える程の速度で飛ぶように駆け抜ける。

アーニャやネギ、お世話になつたひとだけでも必ず助ける・・・！

その日は朝から嫌な天氣だった。

空一面を覆つ雨雲。

湿氣でじめじめした空氣。

けど降りそうで降らない雨。

何もかもが嫌になるよつとそんな天氣。

「ネギー！アリアー！外にいくわよー！」

「わかったー！ほら、兄さんもー！」

だからだらう。

完璧に油断していた。

心の中で「まだ大丈夫なはず」と決め付けた。

「んー・・・今日は天氣も悪いし家にいよう。

急に降つてきたり大変だらうへ。

服を汚したらきっと怒られちゃうよ。」

「えー!?

それじゃつまんないじゃないのよ!」

「ならアーニャは怒られたいの?」

アーニャの両親、特におばさんは怒るとかなり恐いのに・・・。

「うう・・・し、仕方ないわねー」

「うさ。アーニャは物分りがよくて助かるよ。」

そしてなにより

俺は彼女達を理解してあげれてなかつた・・・。

魔導書に読みいつてしまい、氣づくとアーニャとネギの姿が見当たらない。

外を見れば雨がポツポツと降り出してきてる。

俺はため息を一つ吐くとあこづらを探しに行くために腰を持ち上げ

る。

ふと頭に過ぎよつたことがあつたが、すぐさま否定し
外へと歩みを進めるのだった。

あの時、皿をはなさなければ

外に出たのにすぐ気づいて追いかければ

頭に過ぎつたことを警戒していれば

また違つた結果があつたのかもしれない。

以前来た近くの湖まで着いた時、村の方から轟音が聞こえ

目を向けると煙が上つてえいるのが見える。

俺はすぐに理解した。

「つー悪魔襲撃か！」

『一方通行』の力で足の裏にかける力を進行方向に全て向け

今もてる全力で村に引き返す。

『瞬間移動』は使えない。

あれは想像した場所に移動するので探索には向いてない。

ネギとアーニャがどこにいるのかわからない以上

虱潰しに探ししていくしか方法が考え付かなかつた。

原作では助かつていたことを思い出したが、原作とは違い『俺』という存在がここにいる。

もしこのまま放置していたら、あいつら一人が助からぬ可能性もあるかもしねり。

それだけは、なんとしてでも避けたい。

俺ら一人の面倒を見てくれていたネカネさんも・・・。

そんな俺の視界に、見たこともない異形の者共が映る。

あれが悪魔。

正しく認識した瞬間に『換装』の魔法で天輪の鎧を引き出す。

全身が光に包まれ、光が収まると

金色の鎧を身に纏い周りには剣が何本も舞つていて姿に変化する。
換装の光によつて敵の一體がこちらに気つき、飛びかかろうとしてくる。

足が竦み、全身が震えるが・・・それを気合で押さえつける。

殺^やられる前に、殺^やるしかない！

『瞬間移動』で相手の真横に移動し、舞つていてる剣の中から一本掴み腕を振り上げ

ベクトル変化を加えて剣速を上げながら腕を振り下ろし、一體の悪魔を切りつける。

そこから舞つてている剣を操作し、追撃をきます。

「天輪・繚乱の剣！」

すれ違ひ様に流れるよつに連激を叩き込むと

相手の腕が飛び、足が胴体と離れ

胸に大きな傷が平行して一本ついていた。

相手は断末魔をあげ、消えていくが気にしている余裕などない。

一瞬でも気を抜けば・・・死ぬ。

他の悪魔達にも今まで氣づかれててしまった。

かなりの数が一斉に飛び掛つてくる。

正直泣きたいほどに怖い。

頭のてつぺんからつま先まで死への恐怖に震えている。

足も上手く動きやうにない。

このままなら死ぬのは一目瞭然。

なら考えろ・・・考えろ！

思考を止めるな！生き残る術を探し出せ！

這いつばってでもいい、無様な姿を晒してでも！…

つーそーか！

足は上手く動かないけど

俺には物理法則を捻じ曲げる『一方通行』がある！
かう

「邪魔を・・・するなああああ！」

サークル ソード
循環の剣ー！」

数本の剣を俺を中心に円状に高速回転させながら、足裏のベクトルを地面と水平に向け

莫大な推進力で悪魔の群れに突っ込み、次々に切り刻んでいく。

すれ違う度に悲鳴が聞こえ、霧散していくのを感じる。

それでも無我夢中で敵に向かつて突き進む。

雄叫びをあげながら

視界に映る敵を全て消し去るまでは止まらない。

止めることなんて、できなかつた。

何秒経つたかわからない。

何分経つたかわからない。

そして、ふと気がつくと周囲には何もいなくなっていた。

「今までどりあえず」の辺の敵は一掃したか・・・。」

初戦闘がいつたん終了となり、興奮した心が幾分落ち着いてきた。

初めての戦場は思った以上に辛いものだった。

冷静さを全く保っていられないし体力の消耗も激しいときた。

経験つてものが如何に大事か、身体で理解した。

けど、これで終わりではない。

「とつあえず、あいつらを探さなきや。」

奮える心を無理やり押さえつけ

震える体を無理やり動かし

全速力で探し始める。

立ちふさがる悪魔てきをすべて切り伏せながら・・・。

第参話 悪魔襲来！RPGで「うスライム狩みたいなもん（後書き）

戦闘描写って難しい。

つい説明口調になつてしまふ気がする。

今回は、平穏に暮らしてきた人間の初の実戦。

その緊張感が伝われば・・・と思いました。

上手く伝わつたらうれしいなあ。

でわまた次回、よろしくお願いします。

第肆話 なんといつ嘘ませ犬（前書き）

悪魔襲来編の中盤まで。

今回長め。

尚、この次まではまだふるひーぐのよつなものですが。
だからあまり深くつっこまないでくださいと・・・つづけられたら
対応や改変はすると思いますが。

つてかネギまつて語られてない部分がありすぎて脳内補完するのが
めんどうだったり。orz

第肆話 なんといつ嘘ませ犬

「ネギ！アーニャー！」

俺は声を張り上げてあいつらを探す。
だが中々見つからない。

それに、悪魔の数があすぎでキリがない。

焦りを押さえつけられないまま、とにかく突き進む。

くつ、急げ！

第肆話 なんといつ噺ませ犬

あれから、冷静になつて考えて見ると

ある事実に気づいた。

「俺、『一方通行』のおかげでまともなダメージ食らわないんだつた・・・。」

物理攻撃しかしてこない下級悪魔なら、攻撃の全てを反射できるだ

う。

俺の理解を超える攻撃があるならわからないけど

下級にそんなのあるわけがない。

そもそも、そんなのあつたら『下級』なんてつかないだろ？

あれだ、ドリームのスライム。

そんなレベルの敵だし。

「なんか・・・一気に落ち着いたよ。

バカみたいじゃないか、俺。」

けれどこれが戦場の空気なんだろう。

独特の雰囲気が、冷静に思考する力を尽く奪う。

まともに息をするのさえ許されない。

ずっと呼吸をしてなよつておひきをへる。

その原因の根底にあるのは

死への恐怖。

「じひにか、慣れるよつてしないつと・・・。

今後の第一目標にしてよつ。

反省はいじで一先ず終わり。

全てを終わらせてから、反省も後悔もすればいい。

今はしなきやならないことがある。

ネギヒマーニヤ・・・無事でいろよーーー

s i d e

アーニヤ

今日は天氣が悪くて氣分も最悪！

おまけに、アリアつたら外に出たくないって言ひ出すし。

ま、まあ確かにウチの母さんは怖いけど・・・。

けどそんなのこひるむアーニヤ様じやないわ！

「ネギ、ネギ。」

「どうしたのアーニャ。小声で話して。」

「しつ！小声で話しなさいこのバカネギ！」

アリアに内緒で外に出るわよ。」

「え、えええ・・・ムガツ。」

「バ、バカ！大声出すんじゃないわよ！」

私は小声で怒鳴り？ながら、ネギの口をふさぐ。

ちらりと横田でアリアの方を見るけどバレてはこなさそうね。

私はほつと胸をなでる。

「バレたらどうするのよー全く……。」

「う、うめん……。でも、ここなの?」

「ちよつとだけよ。すぐに戻ればいいじゃない。」

「へ、うん……。」

まい出発よー

やつ、すぐ戻るつもりだった。

そしていつも通りにしかられて

またいっぱい笑って

毎日を楽しく過ごす。

そんな幸せな生活が待ってる。

けど、そんな日常は、簡単に崩れてしまつ。

「なによ・・・これ。」

村の様子が変だと気づき

急いで帰ってきた私の田に映ったのは、いくつもの石像。

よく見ると、どれもこれも見たことのある顔だった。

いつも畠仕事をしているおじさんおばさん。

孫のようにかわいがってくれるおばあちゃん。

いつもしかられてばかりだけど、本当は優しいおじいさん。

「どうなってんのよ・・・何で口」・・・?」

そこで気づいた。

私の一番大切な人たちがない。

私の・・・お父さんとお母さんが。

「ア、アーニャー。」

何も聞えられなこまま、走つていた。

ネギの声も聞こえなこまもに。

今までで一番じやないかつてへうに速く走つて
よつやく、自分の家にたどり着く。

息を整えもせずにドアを開いて見つけたのは、お父さんとお母さん。

石になりかけの・・・お父さんとお母さん。

私に気づいても、動くことのできない

お父さんとお母さんだった。

「お父さん…お母さん…」

懶子と言っていた。

言ふ」としかできなかつた。

何も言えられなかつた。

いや、たぶん考えたくなかつたんだ。

「アーリヤ…逃げなさい…。

真剣な顔を見せるお父さん。

「私達なら・・・大丈夫だから・・・ね?」

微笑みを浮かべるお母さん。

どう見ても、大丈夫なわけがない。

子供の私でもわかる。

人が石になるなんて・・・大丈夫なわけ、ない。

私は声を出そうとするけど

なぜか、なぜか声にならない。

自分の体じゃないみたいに『ひつ』とをきかない。

その間に、お父さんとお母さんの石の部分は広がっていく。

もつちぐ

村の人たちと同じよくなつてしまつ。

それでも声は、出でくれない。

「アーニヤ・・・私達は大丈夫・・・だから。」

「アーニヤが無事なら・・・それでいい・・・だから。」

「「幸せに・・・なりなさい・・・。」「

セント、お父さんとお母さん

何もしゃべらなくなつた。

「お、といだ・・・おかあ・・・せんへ。」

私の皿から、じゅくがあふれてくる。

それはまつペを流れて

あいかうぽつぽつとたれていぐ。

次々と上まることがあふれてくる。

「おひや、せん・・・・・・おかあ、せん・・・・・・」

本当に抱きつきたかった。

本当は抱きつきたかった。

抱きついて、目からあふれるナリダが止まるまで

泣いていたかった。

けど、今抱きついたらいけない。

少しでも触れたら、壊れてしまいそうで

くずれてしまいそうで

それが怖くて

だから私は、その場に立ち渴べしながら

ただ泣くことしかできないのだ。

何分？何十分？何時間？

時間の感覚がなくなっていた。

ふと聞こえた、ドアが開く音でようやく意識が戻ってくる。

振り返るとそこには、今まで見たこともないような人の形をした何かがいた。

なんとなくわかつた。

コレが・・・犯人だ。

お父さんとお母さん

村の人たちを石にした、犯人。

怒りが・・・憎しみが・・・

私の中であるで台風のように渦巻くのがわかる。

こいつが・・・こいつが、コイツが！！

私から皆を奪つたんだ！！

「ふむ、人の気配をたどつてみればまだ生き残りがいたのか。

お嬢さん。

すまないが、監と回り歩いてもいいよ。」

けど、私は、わかつてしまつた。

これはヒトじゃない。

ヒトの形をしたもつと別の・・・やう

化け物。

田を見ただけで、理解させられた。

ああ・・・私・・・死ぬんだ。

怒りや憎しみ以上の感情が私を支配する。

「大丈夫だ。痛みはないよ。

すぐに終わらせてあげよう。」

嫌だ、やめて、来ないで。

そう声に出したつもりだが、思いとは裏腹に口は開かない。

怖い・・・恐い、怖い！

まだ、死にたくない！

誰か助けて・・・

急に頭に浮かんできたのは

一つ年下だけじつかりして

女の子みたいな顔だけど

それでも頼りになつて

いつも一緒にいた

アリアの顔だつた。

なんで浮かんできたのかはわからない。

だけど、だけど・・・

もう考へている暇なんかなかつた。

私は目を精一杯とじる。

「たす、けて・・・お願ひ・・・。

お願ひだから・・・。」

「命乞いかね。まあ無理もない。

だが、それも無理な相談だ。

そろそろ・・・

「お願いだから、たすけて・・・たすけてええ！アリアあああああ
！！！」

私は、大きな声をだした

今まで出した」とのないほどの声で助けを呼んだ

〔面白くねえのない声が・・・それでも

あいつへと並じて。

「助けを呼んでも誰も来なこさ。

この辺の人達は皆、石になつた。

今更誰が来ると言つのかね？」

「俺だよ、阿呆。」

いつも聞きなれた優しい声

怒っているのか、少し低いが

それでも聞き間違えることのない声。

目を開けると、そこにはアリアがいた。

化け物の後ろから剣を突き刺し

とても怒った顔で相手をにらみ

けれど、誰よりも頼りになる

私には、私達にはやせっこ・・・やせっこ

アリアが立っていた。

アーニャ side end .

第肆話 なんといつ嘔ませ犬（後書き）

初めてのアーニャ視点。

ネギ視点より先に出すとはね・・・。

女子視点難しいなあ。

上手く書く方法ないものか。

感想、お待ちしております。

第五話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してゐる件（前書き）

悪魔編完結のお話。

次の話からやつと原作に入れる気がする。

ここまでで、ひとまず主人公の能力をまとめよつと思ひます。

次は主人公の設定資料書きましょうか。

第五話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してゐる件

「とつあえず、消えとけ。」

俺は悪魔から剣を引き抜く。

すると、煙のみになつて散つていぐ。

でも死んだわけじやあないんだよな。

確か魔界?に帰るだけ。

つか、今のやつがつかで見たことある『がするんだが・・・。

第五話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してゐ件

やはり、原作知識はあてにならん。

参考にしかなんねえよそんなの。

危うくアーニャ死ぬとこだつたじやねえか・・・。

「アーニャ、無事か?」

ちなみに、今は俺にしがみつきながら泣いている。

さすがに四歳にはきついよなあ・・・。

村は崩壊寸前だし、村人はみんな石にされ

そしてなにより、

「おじさん、おばさん・・・。」

親まで石化してるんだもんな。

ト出したら、田の前で・・・とかあつたつだじ。

あー、完璧俺のせいだよな。

原作はこの辺あんまり詳しくないけど

少なくともこの世界では助けられたかもしねない。

IEFの話しても仕方ないんだけど。

それでも、助けたかったなあ・・・。

悔いばつか残つてんなあ、おい。

「アーニヤ、じめん。」

この言葉に反応したのか、アーニャは顔を上げる。

わかってる。

わかつては、こるさ。

「こじでの謝罪なんて何の意味も持たないって事くらい。

ただの自己満足でしかないって事くらい。

それでも、謝らなきや気がすまなかつた。

「おじさんとおばさん、助けられなくて・・・」めん。

考えりやあわかる」とい。

前世も含めて、今まで平穏な暮らしを送ってきた人間が

他力本願で生きてきた人俺が

他人を簡単に救うことなんぞできるはずもない。

それが自然であり、必然もある。

俺は天才でも神でもない。

チート能力があつても、所詮は一般人だつたつて話だ。

なら俺のできることは、たつたひとつだけ。

自分の手の届く範囲の他人

所謂大切な人だけでも、守りきる。

まずはその力を身につけ

必要ならば一の為に九を切り捨て

その一に手を出す者には、等しく死を与える。
てき

敵に情けをかけてやれるほど俺は強くも

優しくもない・・・からな。

「アリア、ありがとう・・・。」

俺は一瞬、思考回路がショートした。

ありがとう。

誰が、誰に言ったんだ？

アーニャが、俺に？

なんで？

頭の中に疑問が次々浮かび上がる。

正直頭がいてえ。

意味が全く理解できない。

「なんで、だよ。」

「だつて、アリアは私を助けてくれたじゃない。」

お父さんとお母さんは無理だったけど

私は助かった。

それこそ・・・お父さんとお母さんは、まだ助かるかもしねない。

今は無理でも、いつか必ず助けてみせる。

そんなにあらぬのこアーニャちやんじやないわー！」

辛そうに、それでも笑顔を浮かべて言い切るアーニャが眩しかった。

「あ、そつか、そつだよな。

まだ死んではないじやないか。

何諦めてんだよ。

最後まで足搔いて足搔いて

。足搔きぬけりば。

好きな漫画にもあつたじやねえか。

「諦めたら、そこで試合終了ですよ。」って言葉がな。

今まで、諦めてばっかだったけど

一度くらい死ぬ気で頑張ってみよっか。

前世で貯めてきた分、今世で使い切つちまつか。

「アリーハ…どうして泣こむのよ…？」

「ハハ、なんでもないよ。

「ありがとうアーハヤ。」

「変なアリーハ…。」ハサウエお礼言つてゐる。

これで合つてゐるんだよ。

気づかせてくれて、ありがとう

だからな。

この日の涙は、一生忘れないと思つ。

俺の決意の証であり

責任の印でもあり

そして何より・・・

初めて、暖かい気持ちになれた涙だったからな。

僕は、たまに思うことがある。

僕と兄さんのお父さん、お母さんはなんていなかつた。

周りの人たちに聞くと『死んでしまつた』らしい。

でも僕には死ぬつてことがよくわからなかつた。

死つてなんだらつ、死つて・・・なに?

お父さんの話はよく聞く。

『ピンチになつたら現れる正義の味方』なんだつて。

正義の味方・・・うん、かつこいい。

僕たちのお父さんはかっこいい正義の味方なんだ！

僕は、たまに思うことがある。

お父さんが正義の味方なら、僕が・・・僕の村が

お父さんはピンチになつたら助けに来てくれるんじや？

だって、そう言つてた。

お父さんはピンチになつたら、来るてくれるんだ！って

そんなこと、思つてしまつたから。

だからこんなことになっちゃったんだ・・・。

村に帰つてきた僕たちは

多くの村の人たちに出迎えられた。

ただ、動いてる人は一人も居ない。

みんなみんな、灰色で

まるで石みたいだった。

僕はぼーっとしていた。

今、なにが起きているのかわからない。

わからないけど、もしかしたら

ピンチになつてしまつたんじゃなにだらうか？

でもお父さんには覚えるかも、とは全く思わなかつた。

それよりも、なんていつになつてしまつたのか。

村の人たちはどうしてしまつたのだろうか。

なんで動かないのだらう。

本当に石になつちゃつたの？

お姉ちゃんとスタンおじいちゃんが来て僕の手を引いて村から出る。

なんだか急いでるみたいだ。

なんで急いで村から出るんだらう。

途中で変な男の人が現れる。

スタンおじいちゃんが話しているけど、耳に入つてこない。

今度はお姉ちゃんと一人で走る。

スタンおじいちゃんはあの人とお話をあるのかな？

周りにいる変な人たちは、だれ？

ああ、そうか。

僕は、僕の村は今ピンチなんだ。

だから村から逃げてきたんだ。

僕があんなこと思つてしまつたから

ピンチになつてゐんだ。

これは、僕のせいなんだね。

僕のせいなら、僕が責任とらなきゃいけないよね。

今一緒にいるお姉ちゃんだけでも

僕が守らなきや。

「お姉ちゃんは、もうがまぐるー。」

ピンチってよくわからないけど、怖い！

怖いけど、責任とらなきゃいけないから。

お姉ちゃんは守る。

お姉ちゃんの前で手をひらげて庇つよつて立つ。

大きな声を出して、震える足を我慢する。

あまつの布をひ田て田をつぶつてしまつ。

けど、なにも起きない。

僕はびしきなつてしまつたんだろ？

石になつてしまつたのかな？

痛くはないけど……田が開かなーや。

ふと、頭の上になにか暖かいものがのつてゐる。へりづべ。
そーっと田を開けようとする。

今度はきちんと開いてくれた。

すると田の前には、僕とおんなじ色の髪の毛をした

男の人が笑顔で立っていた。

何か話しているけど、やっぱり聞こえない。

なんとなく懐かしい感じがした。

持っていた杖を僕に渡すと、「強くなれよー」と言って背を向けて走り出す。

今度はちゃんと聞こえた。

僕は、大きな声でお父さんを呼びながら決意した。

たったひとつ聞こえた、お父さんの言葉の通りに

お父さんみたいな強い人になることを。

ネギ
s.i.s
e n d

悪魔襲撃は終わった。

結局、生存者は四人。

それ以外は皆石になってしまった。

救助隊がきて、あれから氣絶してしまったアーニャを預け
そこでネギとネカネさんと合流。

お互いの無事を祝つた。

無事お父様との再会も果たした。

・・・ネギがね。

自分の背より大きい杖を持っていたので会えたんだろう。

不満なんてないさ。

アーニャを助けられたから。

でも、もし俺のこと忘れてたんなら・・・ねえ。

ふふふ。

再開が楽しみだ。

悔いは数えきれないくらい残ったけど、いつかまたやあなんだがいい経験になつた。

しなきゃいけないこともわかつたし。

これから原作開始までは特に何もないから、準備だけはしておこう。

慣れない努力、してみようじゃないか。

どこまでいくかわかんないけど。

いけるところまで駆け上がつてやるよ。

魔法学校卒業までの約6年間、能力をつかってみせる。

待つてろよ？ 麻帆良！！

第五話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してゐる件（後書き）

悪魔編終了！

自分の中では「いままでがプロローグ。

よつやく次から原作開始です。
よかつたら見てせてください。

主人公設定（前書き）

主人公の細かな設定。

飛ばしても別に問題はありません。

W i k i が大分役に立つた・・・

わからないところや疑問などあつたら感想めでお願いします。

主人公設定

括弧の中は前世のもの

主人公の名前

アリア・スプリングフィールド（— 悠斗）

年齢

現時点で三歳（享年二十歳）

原作開始時期で九歳

身長

現時点は省略（182cm）

原作開始時期で160cm

体重

現時点は省略（68kg）

原作開始時で54kg

小さいころからアリカそつくりの容姿。

成長すればするほど似ていつている。

よりて女の子に體違えられる」とか「かまへ

ても間違えられたら田のノベリが消える

い、せいで届く長い髪を後ろでひとつに束ね（ホーリーではない）

本人は切りたいのだが、周りから「もうたいない」と言われ中々切らせてもらえない。

ちなみに、いつもネカネが髪を整えている。

口調は基本丁寧だが、本人がそう思っているだけで所々おかしい点もみられる。

沸点は高い方。その分キレたら中々止まらない上、地の性格が出て毒舌になる。

ほつとけない性格ではあるが、自分の器を理解しており身に余る行

動はしない。

(自分の人間性を下方修正しきておるため、行動に移せないこと
もしばしば)

どこか合理的で諦めるのが早い。けど自分の決めたことは最後まで
貫き通す。

九の人々を切り捨てても一の人々を救う決意をする。

本人曰く「十を救うのはネギの役目」。

たまに天然つぶりを発揮。

鈍感なときもあれば鋭い時もある。

恋愛に関して言えば、自分がそういう感情を向けられるはずが無い
と決め付ける節があり

その可能性を真っ先に否定する。

前世で色々（ここでは割愛）あつたせいで精神面がかなり歪んで育
つている。

人の表情を読めるようになったのはこのせい。

ネガティブ七割ポジティブ三割の思考回路。

実は前世で一 悠斗は死んでおるのだが、本人は全く知らないし今
後も気づかない。

死因は一切不明。

始動キーは『アマリス・クラリス・ヘルダリア』で由来は花。

本人は普通だと思い込んでいたが魔法に関して言えば実は天才。

前世から集中力は人以上にあったことも原因の一つ。

集中しだすと自分の世界に入り周りで何があつても気づかない。

王家の魔力を受け継ぎ、魔力の運用だけで言えば既に魔法界トップクラス。

ネギよりも少ないが、それでも膨大な魔力を併せ持つ。

得意属性はネギと真逆で、闇・氷・影。

ナギとアリカに関しては、責任放棄しての黙認として認識。

理由は簡単。

「責任も果たせないならこどもなんてつくんな。」だと。

でも別に嫌ってるわけではない。

この分は利子をつけて返してもらつつもり。

主にネギのために。

あの強さには個人的に憧れていたりもする。

能力

あらゆる能力、物質を創造するというある意味神に近いチートスキル。

ただ、もちろん限界はあるので劣化版と言つたところ。

想像力は必要で、すでにイメージがあるものが簡単。

アニメやゲーム、漫画の知識が多いアリアにはかなり万能的。

本人自体まだまだ把握しきれてないが。

今はチートスキル持ちの一般人程度。スキル持つてるとかで一般人とは言えないんだけどね。

今身につけている能力

超能力

禁書目録の能力。

使い方は理解しているが、原理は全くわかつてない。

ただこの世界では魔力・気とは違う力を使うようで、主に脳を酷使する。

頭痛さえ我慢すれば半日は使用し続けられるらしい。

脳を使う理由は、頭で計算や状況判断でないと大惨事に至るから（自爆とか）。

アリアが一番頼りにしてる能力もある。

『一方通行』

すべての力のベクトルを変化することができる、これだけでチートな能力。

だが計算が面倒だったり。

デフォルトで反射に設定しているので不意打ちには無敵。

原作のような無効化能力の持ち主でない限り攻撃を当てることがすら不可能だと思われる。

ただ、ひょっとするとベクトル変化できないものもあるかもしれないで過信は禁物。

アリアが最も使う能力である。

『テレポート瞬間移動』

頭で想像したところにテレポートできる素敵能力。

戦闘でも役に立つ。

だが、かなり正確な情報がないと発動しない。

目に見える範囲なら成功率は99%以上。

集中力がものを言つ力。

距離によつて力の消費量が変わる。

フェアリー テイルの魔法

独特な魔法が多い。

そんな中でも遠距離から攻撃できるものを選んでいる（恐いから）。

使用には魔力が必要。

『換装』

エルザの使用する魔法。

正確には『ザ・ナイト』と言つ。

『換装』により自身の装備品（武器と衣服）を一瞬で変化させる魔法で武器のバリエーションは「剣」「槍」「斧」などがあり

衣服、鎧は100種類以上も所有している。

魔法空間に入れて持ち運び、そこから取り出して換装する。

・天輪の鎧

同時にいくつもの武器を操ることができる鎧。鎧の周りに剣が舞っている。

天輪・縹乱の剣

すれ違い様に、無数の剣で相手を連續で切り裂く。

循環の剣

数本の剣を円状に高速回転させ、相手を複数巻き込む。

乱戦用。

・黒羽の鎧

一時的に攻撃力（筋力）を大幅に引き上げる鎧。跳躍力も上昇する。

実は、アザインが少し違つてるのであつたり。

『^{アイス}_{メイク}氷の造形魔法』

グレイの使う魔法で氷を様々な形に造形して攻撃する。

頭で想像したものを作り出せ、両手で動きをつけることにより氷を動かす。

（大槌なら右の拳を上を向けた左の掌に打ち下ろす。なるほど、のジェスチャーの激しい感じ。）

・ 盾 ^{シールド}

・ 突撃槍 ^{ランス}

八方に広がる花のような形状の盾。広範囲を護ることができる。

手先から無数の氷の槍を造り出し敵を貫く。

・ 床 ^{フロア}

辺り一面の足場を凍らせる。

・大槌兵

巨大な氷のハンマーを作り上げて落下させる。

・牢獄

相手を氷の檻で閉じ込める。

・戦斧

氷の斧を作り上げる。

・城壁

氷の壁を創り出す。

・氷欠泉

地面から大量の氷を間欠泉のように噴き出させる。

・冰雪砲

アイスキヤノン

巨大な大砲を造形し、攻撃する。

『文珠』

GSから横島の持つ超稀少能力。

靈力をビー玉程度の大きさに凝縮したもので、漢字一文字の念を込めることで様々な効果を起こす事ができる（例：「爆」「防」等）。

「力の方向を完全にコントロールする能力」である。

攻撃、防御、治癒、攪乱とその能力は多岐にわたる。要するに万能。

一度作り出した文殊はアリア本人以外にも使用できる。

使わなければ消滅せず残るのでストックすることも可能。

複数の文殊を組み合わせることでより強力な効果を生み出すこともできるが、そのコントロールには超人的靈力が必要となり、誰でもたやすく出来るものではない。

アリアはまだ一つしか使用できない。要修行。

効果は必ずしも本人の意図に沿つものではなかつたり、対象の状態が不適当だと能力は發揮されない（限界があるということ）など、

制限や問題点もある。

また持続時間と持続能力にも限界がある（防御に使った場合には一定以上のダメージを受けると壊れる）。

作成するのに時間が掛かる為連續使用をするとストックがなくなる（現在、一日に一個から二個。修行で使っているためストックなし）。

『闇の魔法』

エヴァンジーリン・A・K・マクダウェルが開発した、究極技法「咸卦法」に匹敵するとまで言われる技能。

魔法を圧縮・掌握し、自らの思いのままに操る。

また、術式武装として魔法を肉体に固定し、身体能力なども底上げできる。

感覚としては、身に纏ついたような感じらしい。

アリアはこれを自分が使いやすいように独自に改良した。

そして敵の力を自分のものとする究極闘法をも完成させる。

(エヴァンジエリンも完成形を思い浮かべながらも、技術的問題と使用対効果の関係で開発を断念した)。

切欠は敵の攻撃を受けたくない一心による。

発想としては、「あれ、敵の魔法を吸収できたら最強じゃね?」となんとも阿呆。

でもそれを実現するあたり、実は天才でもある(本人は能力のおかげだと思っており気づいてない)。

しかも、まだ試したことがないので本人は完成したことに気づけていない。

ここまでくれば正直闇の魔法であるかどうかすら疑わしい。

根本は同じだが全くの別物といつても変わりはない。

名前も独自でつけるつもり。

使用にあたり、闇が侵食するのだが

本人が大きな闇を抱えていることもあり、上手くコントロールできている。

だが、この先どうなるかはわからない。

物質の創造

能力開発ばかり行っていたため、まだ全然試せていない能力。

開発できた力を考えると、こちらも相当なものが作れると予想される。

なんにしても、想像力は必要。

必然的に「コピー」が一番楽になつてくる。

これから次第。

主人公設定（後書き）

前世の話は番外編でいつか書くつもり。
いつになるかわかりませんが・・・。

やっと原作をはじめられるぞー！

第陸話 原作開始一ヶ月特に何も考えてはいない。（前書き）

卒業までの~~お話。~~
主に修行内容とか。

第陸話 原作開始一ヶ月特に何も考えてはいない。

なんで？

気づいたらまた横で寝てるんだよよなー。

あ、そうそう。今アーニャも一緒に住んでいるんだけどさ・・・

俺も自由に修行した。

ネギは魔法にのめりこんでいつたし

メルディアナ魔法学校にも入学した。

村は移動しなきゃならなかつたし

あれからうとこつもの、変わったことがいくつもある。

第陸話 原作開始！けど特に何も考えてはいない。

悪魔たちの襲撃のあと、まず俺が行つたのは『物質創造』。
どの範囲まで創れるのか、の実験だ。

マジックアイテムなど創れるのなら、ヒガアの別荘なんか欲しいじゃん?

後は魔力封印の装飾品とか。

封印の方は、学校で鬱陶しい正義共が寄つてこないようじだね。

じつは割と簡単に創れた。

だけど別荘が問題だつたのよ。

外觀や「ハーチュア」やらは能力ですぐにできた。

問題は、時間の設定の方。

能力で創るにはかなり無理があつたんだよね。

時間の概念とかイメージできるかよ。

仕方ないから試行錯誤しながら自分で作つたさ。

それだけで三年かかつたけど。

ま、まあでも、これからは一時間で一十四時間分の修行できるしね。

結果おーらい・・・だよな、うん。

別荘の凄さ（造るのの難しさ）に泣きわうになつたけど、なんとか頑張つた。

今は専らその中で修行している。

最初は独学で色々やつてたんだけど・・・うん無理。

何かいい案ないかなーって探してたら、ピキンとひらめいた。

あれ、フェイト・アーウェルンクスって人工生命体だよね？

どうにか創れないかなーとか駄目元でやってみました。

一発でできただけど。いや、まじで？

てか本当に人工生命体だったんだーとか、なんとなく思つていると

「アリカ姫！？」とか言いながら攻撃してきた。

記憶もぢやんとあるみたい。

少しむかついたから、返り討ちにしてやつたけビ。

女と間違えられたからじやあ・・・きっとないよ？

ふふふ。

んで拘束しながら話をするど、ぢゅうじゅう人形同士つながつてゐらし
い。

こつちの話を軽くすると、『正直敵対したくないね・・・こつち側
に来ないかい?』と宗教勧誘された。

別に嫌いじやあないから保留しといた。

あつちも掲げる正義があるつてだけだし。

「戦闘技術教えて」つて素直に言つたら馬鹿を見るよつた田で見ら
れたのは印象的だった。

それ以上強くなつてぢゅうすんの、みたいな目。

理由を説明するとなんか考えながら了承。

・・・交換条件出してきただな。

無理なやつじゃなればいいがね。

教えてもらつたのは、主に近接と戦術。

それに、命のやりとりの経験。

近接は拳法を主に、体の動かし方を学んだ。

気の使い方も教えてくれた。

意外と丁寧でびっくりだよほんとこ。

とにかく近くで見て気づいたけどファイトまじでつええ。

動きに無駄がないし、隙もない。

能力がなきゃ瞬殺されるわ。

戦術は、とにかく模擬戦。

組み手に近いけどより実践的だ。

魔法、能力なしの真剣勝負。

これはきつかった。

何度氣絶したかわからんねえよ。

フェイトも心なしか顔に笑みが・・・。

え、なんで笑ってんすか。

まさか最初のアレ根に持つてたり？

いやいやいや、まじ勘弁願いたいよ・・・。

後で聞くと違つたらしい。

思つてた以上に楽しかったんだつて。

教えるのとか俺との戦闘とか。

なんか、フェイトのイメージがここへきて完全崩壊だよ。

ここに、異端者と人工生命体の友情が芽生えた事を追記しておこう。

別荘にいるときに、今身につけてる能力の修行も行った。

あんまり芳しくはないが。

『一方通行』が便利すぎるけどね。

『文珠』がまだ使えないってのがなあ。

今現在、二文字が最高だし。

剣、誰で殴おう？

そして、今はメルティアアナ魔法学校の卒業式。

ネギと同じく一年の飛び級で、アーニャが一年の飛び級。

みんな同時に卒業できてよかったです。

俺はたぶん学園長が無理やりねじ込んだんだと思ひながら。

ん？ 理由？

だって魔力封印して通つたし、周りから落ちこぼれって言われてたから。

通つたつて言つても年に数回しか行つてないけどね。

ナルトの影分身つかつてほとんど行かせました。

くだりん授業なんざに時間を割く余裕なかつたし。

けどや、落ちこぼれって呼ばれるよくなつてから毎日

アーニャがベッドに潜り込んでくるよつになつた。

襲撃以来、俺の前でだけ甘えるよつになつてはいたんだが・・・

初めて潜り込まれた時は焦つた。

視界がピンクに染まつて身動きとれないんだから。

ちなみにピンクはアーニャのパジャマの色だ。

いやや、たまに寝ながら泣いてる時もあるんだよ。

それ見たらあまり拒否はできなくてなー。

甘いのかもしれんがね。

話が逸れまくつたけど、成績はよかつたよ？

実践以外はネギよついいし。

スタンスとしては、タカミチみたいな感じ。

だから、たぶん麻帆良で教師・・・主にネギのサポートになるんじやないかな。

学園長が一人まとめると思つ。タカミチに任せられるし。

けどなあ。漫画読んでも思つたけど、立派な魔法使にはひびこ。

見てて反吐がでる。

傲慢そのものだし。

ネギが染まつてないか心配。

この六年間は接点なかつたし。

お互いに元気もつてたからね。

俺は別荘だけだ。

おかげで実年齢が二十歳突破。

強力な認識阻害魔法がかかるマジックアイテムが必須になつた。

風呂のときも外せないし。

身長が一七五cmまでのびました。

なんかこれまずくね？

いざればれるフラグがビンビンに立つてるし。

『日本で教師をする』こと

うふ予想通りだね。

れにて、麻帆良でせひ今まで騙し通せるかな？

あ、原作どうするか全く考えてないや。

第陸話 原作開始一ヶ月特に何も考えてはいない。（後書き）

次はいよいよ麻帆良へ。

サブヒロインはもしかしたらアンケートとるかもしれません。
そのときは、よかつたら皆さんのお意見をお聞かせください。

でわまた次話で。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？（前書き）

エヴァ 編早く書きたいなー。

といつわけで、どうだ。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？

やつてきました麻帆良学園都市。

原作キャラに会えるから俺としては楽しみ。

・・・エヴァ様の反応が怖い。

ネギは初っ端からやらかすんだろうなーとか考えてたんだけど・・・

あれ？何、この状況。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？

今日は麻帆良に出発する日。

これまでにしたことと言えば、

フェイトに色々な技術習つたり

力を使いこなす為の修行したり

体鍛えたり

魔法や薬の研究したり

上位古代語呪文を暗記したり

挙げたらきつがないっす。

薬に関して言えば、自分で色々調合できるようになると便利だから。

あとフロイトさんは様々な技術を持つてます。

流石としか言ひようがありません。

拳法なんてかなりの数使いこなせるし、主に中国拳法だけど。

少林拳・太極拳・翻子拳・八極拳・蝠螂拳・鷹爪拳

どつから取り入れてんですかあなたは。

どうでもいいけど、ナルトの田向が使う八卦掌って中国拳法からきてるっぽいね。

ええ、教わりましたとも。

型がものすごく似てたから聞いてみたら「八卦掌だけど、知ってるのかい?」だつて。

「拳つて名前だけじゃなかつたんだね、中国拳法。

おかげで大分体の動かし方がわかつてきた。

最初はほんつとに瞬殺されてたけど、今じゃ何時間かは持つ。

勝てはしないけどね。

どのくらい強くなつたかは全然わからないのが難点ではある。

フェイトとしか戦つてないから当たり前だけど。

タカミチにはまだ勝てないかな？あくまで素の戦闘力での話だけど。

感卦法はまだ使えないし。

一度試したら暴発してさあ・・・

なにあれ怖くね？

やつてよかつた魔法薬の研究。

治癒より役に立つよ。

お金を除けば、ね。

そつそつお金だけど、創造したものに魔法効果を実験としてつけて

適当な闇市に流して工面しました。

雀の涙程度の値段の物から、車が買えるような値がついた物まで
つてびっくり。

いやあ嬉しい誤算だね。

なんでも試してみるものだ。

ネギは相変わらず引きこもっていました。

日本で教師つてわかつた時から今度は日本語の勉強をね。

それでも凄いんだけどねえ。

三週間つてなにさ?

日本語難しいんだよ??

俺はイギリスと日本が半々くらいだから大丈夫だけど

アーニャとネカネさんを誤魔化すのに苦労した。

「本場で学ぶのが一番」とか言つたら何とか納得してくれたみたい。

おかげで日本語の本に見せかけて、魔導書とか読む羽田に。

つてかネギとともに顔合わすの久々だねえ。卑屈になつてないかな?

ただいま日本に向けて空の旅としゃれ込んでいます。

見送りのネカネさんとアーニャの顔ときたら、なんかもうね。

ネカネさんは心配で今にも倒れそうな

アーニャは・・・泣きわづな。

やめて、そんなんめで見ないでよまじで。

「行くのやめようかな?」なんて考へてしまつた俺は悪くなござる。

それも無理なんだけど・・・せっぱり心配ではあるよ。

「やあ」と手紙をなめながら。

「ナビ、久しぶりに一人っきりになつたからせつぱんまづいわ。

ネギがわつからから口を開けてしまうは、閉じるを繰り返してゐる。

今まで放置してたからなあ。

正直すまんかったと思つてゐる。

だから普通に話しかけてもいいんだよ？

「ネギ、これから不安だううナビ・・・一人で頑張るわ。

俺にはサポートしかできないけどね。」

「のままの空氣は耐えられないで話しかける。

「うー！頼りにしてくれる兄さんー！」

やまこ、本当にあなた、ネギ。

こんなにこ子に育つちゃって……。

罪悪感がメーター振り切ります。

こんな俺をまだ兄と呼ぶこの子の純粹さが眩しいです。

「俺なんか頼りにならないぞ。

魔法もつかえない知識だけの頭でつかちだからね。

だから、こっちが頼りにしてるよ、ネギ?」

ネギが一瞬泣きそうな顔をする。

やばいやばいやばい。

罪悪感がああああ。

「うん! まかせてよ。」

「こよこよじゅのい。」

「ええ、どれだけ成長してゐるか楽しみです。」

「こよこよじゅのい。」

そこでは麻帆良学園女子中等部内にある学園長室。

そこでは会話をしているのは、麻帆良の重鎮近衛 近右衛門と

魔法界では超有名人のタカミチ・ト・高畠の一人だ。

タカミチは、ナギの息子である一人とは面識があり、来日を楽しみにしていた。

「ナビの、・・・」の資料は本物かね?」

「ええ。ネギ君はとても優秀ですよ。

ナギさんの素質を確実に引き継いでいます。」

「それもなんじゃが・・・兄の方もじや。」

途端にタカミチは顔を顰める。

過去に会つた時のアリアの反応を思い出していた。

「なんとも言えませんね。

魔法を使つといろなんて見る機会がありませんから。

ただ・・・彼もまた、天才であることは確かです。」

ナギとは違う、アリカ姫とそつくりな顔にビックリした丁寧な対応。

いや、丁寧すぎる対応に最初気圧された事があった。

まだ年端もいかない子どもに、だ。

それからとこいつもタカミチはどうなく監視していたのを覚えて
いる。

けど何もわからなかつた。

彼の考え方や彼については何もかも。

「成績は魔法を除けば全部、ネギ君よつ上じやからのつ。」

「ええ。話によると、僕と同じ体質らしいですが・・・。

「ればっかりは見てみないとわかりませんね。」

「ただ、僕と同じなり・・・。」

「つむ。 ものとさせね頼むだい。

「そのままにしておくのは勿体無れやがる能力じや。 や。

それぞれの思惑が交錯して、夜は更けていく。

日本に、麻帆良に着くまで色々な話をした。

まるで今までの分を取り戻すかのよつと、ネギの話は止まらない。
それを微笑ましく見ながらも、本国や正義馬鹿の魔法使いにならな
いよつと

思考を誘導しながら、俺も話をする。

Hヴァー様の話も使わせてもひりこました。

勝手に話しげじめとよー。

けど効果は抜群だったみたいで、深く考え込んでいた。

うそ考へる」とさっこことだ。

「すぐにはわからないかもしれない。

けど、こつだつて思考するのを放棄しては駄目なんだ。

ちゃんと自分で考えて、そして行動に移す。

流れれたり、深く考へずに行動するのはよくないことだよ。

自分でやったことには責任を持たなきゃいけない。

それなら、納得のいくまで考えてからでも遅くはないだろ？

考えるつてことはそれだけ大切なことなんだ。」

「んー・・・。相変わらず兄さんの話は難しいなあ。」

「今はわからなくてもいいよ。

ただ、迷ったときは思い出していいから?

わざと悪いことにはならないから。」

「うん、わかったー！考えて行動するかあ・・・。」

自分の世界に入るネギ。

これで茶々丸を襲う」とはないだろ？

その原因であるカモはござりますかな。

なんだかんだ言つて、あいつも必要なんだよな。

んー、現物を見て判断・・・が一番かな？

バスの中ではネギのくしゃみににより、かなり日の保養ができた。

拳骨はしどいたけどね。

暴走をせるのはまずいっしょ。

けじや、黒とか赤、紫はまだ早いんじゃない？

何がとは言わないが。

「迎えがいないね・・・兄さん。」

「いないね・・・ネギ。」

道わからんつつの。

まあこの女の子達についていけばいいんだけど。

仕方ない。

「流石に一人そろつて遅刻はまずいかな。

ネギ、先に行つて連絡頼むよ。

「この女の子達についていけば大丈夫だから。」

「え? ぼ、僕?」

况をさせまいとするの？』

「身体強化できるネギの方がが速いからね。

俺は後から追うよ。」

「へ、うー・・・すべて来てよ・・・?』

不安げなネギの表情がかわいいです。

実際は俺のほうが速いけど、俺は『落ちこぼれ』だからねー。

いや、本当に面倒です。

けど立派な魔法使い（笑）に田をつナラれるよりかは・・・ねえ？

守る対象が増えるのも考え方なのよ。

今考えてるのはネカネさんとマーニャだけ。

ネギ？いやいや必要ないでしょ。

あの子は自分で頑張るわ。

そのお膳立てへりこはせりせてもひひなさ。

だから、A組の生徒達とは近ず^{アガフ}、遠ず^{アガフ}

やつてこいひと思こます。

あ、エヴァ様は別。

あの人は守る必要ないし、あの知識は欲しいし。

できれば協力関係を結びたいところです。

わ、ゆつくり周りを見ながら歩きますか。

「ヒツヒツのガキイ-----! 取り消しなよこよこひが
ー!」

「あわわわ・・・ほ、本当ですよー。」

「本物のヒョウひよじやないわよつつーー。」

・・・ああ、忘れてた。

やつこえぜいんなんあつたなー。

今じゃ話の大筋しか覚えてないや。

一応、メモは残してあるけど。

「はーー・・・なにやつてんだか。」

「(イ)めんなー。あの子の知り合いなん?」

「あ、どうも初めてまして。

あの子の兄であるアリア・スプリングフィールドとこります。」

「ほえー やつぱり外人さんなん?

「ひまわりのか語つたよ。よろしくなー?」

生じのかきたー。

いやーかわいいね。

このおつとつした雰囲気がなんとも。

嫁にはいらなにナビ、うふ。

とにかくよろしくお願ひしますと。

後は、こいつの方だなあ。

「あのー、すいません。

」の子が何かしましたか?」

「何かしたなんでもんじゃ……って、え？」

それから起じたことは、俺には全く理解できなかった。

いや俺は悪くない。

誰がこんなこと予想できんだよ。

誰にもできないだろ、これ。

「あやーー」とか「な、なにしてるんですかー?」とか聞こえるが

今はそんなことみつ、だ。

なんで、アスナに抱きつかれてんのさ。

side

アスナ

今日は朝から気分がよかつた。

すつきり起きたし体調もバツチリ！

さあ、楽しい一日が始まる！

・・・ハズだつたんだけど。

登校中にいきなり「失恋の相がでますよ」とか言われて

キレた私は悪くないわよね？

そりやあ、高畠先生との恋が叶うはずもないなんてわかってる。

けど、他人に言われんのはムカつくわ！

しかも私のだいっつ嫌いなチビ餓鬼によ！？

絶対許さないんだから！－！

「あのー、すいません。

この子が何かしましたか？」

何かしたなんてもんじゃないわ！

そう言おうとして、話かけたの方を向くと言葉に詰まった。

そこにいたのは、私と同じくらいの身長の外人さん。

私には外人さんの知り合いなんていない。いないはず。

だけど、どこか懐かしくて、何故か悲しくて。

気づいたときにはもう、私はその人を抱きしめていた。

アスナ side end

「あ、あのー。どうかしました?」

一瞬固まつた俺を許してくれ。

決して、柔らかいとかいいにおいとか

ましてやもうちょっとだけ、なんて思ってないからな?

ほんとだよ?..

すこません、ほんとはちょっとだけ思いました。

「あ・・・あ、あああ、あのー。」

「なんでしょう・・・との前に。」

「これ、使ってください。」

「へ? ?」

「涙、拭いてください。」

「これでは俺が泣かせてしまったみたいだ。」

「うん、なんとなく、理解した。」

「そう言えば俺つて益々アリカお母様に似てきてるんだった。」

「だから少し思い出しけた・・・ってのが真相かな? ?」

「本人も無意識だったみたいだし。」

泣いてるつひ」と、懐かしかったのかな?

「ハンカチ、あらがとうございます。

えつと、あなたは?」

「俺はその子の兄で……。」

「おーーー・ネギーーん・アリアーーん・

タカラミチ空氣読め。

いや、でもちよつじよかつたと聞えよかつたのか?

「あ、タカミチ！」

パタパタと高畠に駆けてくネギ。なんか犬みたいだ。

尻尾が見えるぞ。

「えと、ちょっといい、ですか？」

「はい？ ああ、先ほどは弟が失礼しました。

弟はネギ、私はアリアと言ひます。

よろしくお願ひしますね。」

「あ、えっと私は、神楽坂明日菜・・・です。

さつあは！」めんなさい。

あと、ハンカチ、ありがとうございました。」

「ああ、いいですよそんなこと。

女性の涙は苦手なもので・・・ね。」

これは本音。

武器にする人もいるのが信じられない。

見分けづくから俺には通用しないけどねー。

「それで、あの、どうしてここに？」

「こ、女子中等部ですよ？」

「彼等は良いんだよアスナ君…久しぶり、アリア君

「た、高畠先生…」

んーやっぱり好きなのね、タカミチのこと。

勿体無いなあ。

アスナなら男がほつとかないのに。

「お久しぶりです、高畠さん。

学園長室までお願いできますか？」

「ああ、このままじゃ遅刻してしまうからね。

アスナ君たちもついてきてね。」

よつじいざゆかん、大妖怪ぬらりひょんの根城へ！！

あの後頭部を早く揉みたいぜ。

あ、俺ってなんの教科なんだろ？

英語・・・の補佐かな？

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？（後書き）

補足として、アリアの身長は165程度です。

九歳でそれはねーよとかの突つ込みは・・・できる限りなしのほうで。

突つ込むなよ！いいか、絶対突つ込むなよ！

認識阻害のかかるネックレス以外には

魔法封印

幻術

のかかるマジックアイテムを身に着けています。

幻術は、九歳のときの姿に設定中。

ほかに何かあれば感想へどうぞ。

第捌話 初対面、2-Aの乙女たち……見た目から明るい普通じゃねえ。

昨日投稿するつもりが気づいたら日にち変わってたところ。

ちかれた。

第捌話 初対面、2・Aの乙女たち……見た目から明りかに普通じゃねえ

俺は2・Aの教室を見渡す。

実はちょっとした夢でもあつたんだ。

教職についてことがね。

だからなんか感慨深いものがある。

しかも漫画のキャラ達の副担任だなんて……。

けど、一目見て思った。

ここから本題に中学生か？

第捌話 初対面、2・Aの乙女たち！・・・見た目から明らかに普通じやねえ。

「ふむ、よくぞきたな。ネギ・スプリングフィールド君

アリア・スプリングフィールド君。

まずは卒業証書などを見せてくれんかのう。」

やつてきました学園長室。

中で待つていたのは・・・。

いや、人間ではないでしょ?」これは

ぬらりひょんとか仙人とか、そう言われたほうが納得できるって。

「ええと、あなたは日本の妖怪か何かでしょ?」

学園のトップに入外を置くなんて・・・。」

「ちよ、咒さん！？」

「ふおー？ わしはれつきとした人間じゃよー？」

だつて信じらんねーもん。

脳みそどうなつてんの？

まさか、魔法でなんかしてるとか設定が実はあつたり？

ネギの顔は相変わらず面白いです。

なんか、「思つても言つてはダメです！」みたいな顔。

タカミチは苦笑してるだけだし。

その顔は同意してると同じだ。

「ま、まあこいじやう！」

「ここでの修行はとても厳しい。」

それでもやるかね?」

「はい……」

「勿論です。」

「あいわかった。」

せここっぽいがんばるんじゅう。

それと、アリア君はちと残るつてくれんかの?」

ネギが退室して部屋には学園長とタカラミチ

そして俺だけが残る。

最後までアスナがつるさかつたが気にしないでおいで。」

気持ちちはわかるんだけどね。

問題は、残された理由だ。

恐らくは魔法についてのことだと想つんだが・・・。

実年齢とかばれてないよな？

「・・・なんで残されたかわかるかな？」

「魔法のことについて、と予想していますが。」

「まあそのとおりだよ。」

それで、魔法が使えないところのは?」

よかつた。

たぶんまだばれてはいないようだ。

けど氣を抜かず^{トキ}通し通せると「いやまだ通し通れなこと。

にしても、タカミチがここにいるつてことは

俺が呪文詠唱できな^シに体質なら修行をつかるつもりか?

んーどうじつか・・・。

感卦法は欲しいが、居合^{ハマ}はいらねんだよな。

とつあえずは、保留かな?

エヴァに教えてもらひえるかもしれんし。

「私自身よくわかつていません。

呪文詠唱ができるのか、それとも・・・。

「ふむ、リリースの高畠君も生まれつき呪文詠唱ができるない体質で
な?」

「ええ、存じています。

呪文詠唱できないながらも面合い拳と呼ばれる技を用いて

AA+の領域まで上り詰めた魔法世界の超有名人。

噂によれば、アルテマ・アーテ究極技法である感卦法まで使えるとか。」

「ほひ、よく調べているね。」

まあこのへりには普通に調べるでしょう。知つてたけど。

知らないこといろいろ踏み入れるんだから。

ねえ、この学園最強の魔法使いさん？

「君の情報は正しいぞ。」

なにかあれば、高畠くんをたよりなさい。」

「ええ、やつをせてもうります。

これからよろしくお願ひしますね。

それでは、あまり遅くなつてはいけないのドンの邊で失礼します。

」

やつをせからせぬじやが。

学園長は愉快犯だと思つた。

だから警戒は怠らなこでおいつ。

ネギの魔力を頼りに2・Aまで来ると、ネギがもみくちゃにされた。
いた。

あの顔もなんとも面白いが、このままじや話が進まない。

「はあ・・・仕方ないか。」

俺は扉の影に身を隠しながら、震脚を使って大きな音を出す。

「こんな」とで実力をばらすなんて真似はしない。

教室が静まったのを見計らって扉をノックする。

「失礼します。ネギ先生、説明お願いできますか?」

話しかけてからやつとネギが再起動する。

そんなんじゃあやつてけないぞ、ネギ。

強く生きるな・・・。

「あ、えっと、このクラスの新しい副担任です。

自己紹介お願いします、兄さん。」

「わかりました。

今日からこのクラスの副担任となりますアリア・スプリングフィールドです。

主に英語をネギ先生と一緒に教える形になります。

ネギ先生とは血のつながった兄弟ですので、弟ともいふべきお願いしますね、皆さん。」

シンと静まり返った教室内。

俺、何か間違つた？

そう思つて皆の顔を見ると、一人の眼鏡っ子が手をあげて質問して

へ。

朝倉か？

「あの、先生って……女性、ですか？」

「ふふ、ふふふ……。

先ほどネギ先生が『兄』と言つたはずですが……？」

髪切らうかなー、本^{まじ}氣で、真剣に。

じゃないと、いつか衝動で人を殴つてしまいそうですよ……ふふ。

小声で「あんなに綺麗なのに？」やう「うん、負けた……。」やら聞こえるのは氣のせいだ。

ああ、氣のせいだとも。

「でも、よく見るとかっこいい……。」は誰だ？

名乗り出たら餃をあげよ。

つてか髪は切らひ。うん、そりしそり。

「えと、なら兄といつことば、今何歳？」

「ネギ先生とは双子ですので同じですよ?」

数えで現在は九歳ですね。」

あ、また静まり返った。

これは・・・総員対ショックに備えて！

変に纏まつあるよなあ」のクラス。

その後はとにかく質問ばっかでした。

女性体験とか聞くなよ。

九歳に何を期待してるんだか。

メールアドレス教えてとかもあったなあ。

まだ携帯持つてないから買つたら教えてあげようか。

学園の経費を落とさせましょ。

必要だしね。

にしてもだ。

ここにひり、一部を除いて一般生徒だろ？

いくら魔法の素養があつたり、他の才能があつたとしても

一つのクラスにまとめるのはよくないんじゃないかな？

はつきり言つてこのクラスは異常すぎる。

魔力や体捌きを見たら大体わかる。

その辺が普通なのは、四葉、長谷川、村上、那波、早乙女、鳴滝姉妹、釘宮、

和泉、柿崎、椎名、雪広、葉加瀬、富崎、ザジぐらいか？

その中でも本当に普通なのは村上、那波、釘宮、和泉、柿崎、鳴滝姉妹、富崎、ザジか？

判断しづらいが（運動能力とかはね）。

四葉は料理屋やってるし長谷川はネットアイドルでハッカー。

早乙女は腐だしラブ臭かぎ分けるし。

雪広は社長令嬢、葉加瀬は天才で超一味。

まあほんとはみんな魔法になんて関わらない方がいいんだけどね。

けど、そんな中に俺ら英雄の血筋を投下するつてことは

パートナー候補つて意味もあるだろ。

ほとんど魔法を知らないのに、秘匿はどうしたんだつてまず言つた
い。

そして、学園長。

あんたは自分の生徒達の命をなんだと思ってるんだ？

魔法に関わること、しかもそれが英雄の息子だなんて

危険なことは魔法使いなら誰でもわかる。

それをこんな・・・外道だ。正しく外道。

タカミチ、あんたも同罪だ。

この辺に『立派な魔法使い』を毛嫌いする理由がある。

正直、反吐が出るなんてもんじゃない。

傲慢すぎる。神か何かと勘違いしてるのでお前らは。

放課後、住む部屋を聞いてないことに気づいた俺は学園長室まで訪

ねる。

全く、馬鹿だよなあ俺も。

「失礼します。」

「ふお~..どうかしたのかの?」

「いえ、私の住む家を聞いてなかつたもので。」

「おお、そうじゅつた!すまんのう、わざわざ来てもうひつて。」

ボケたのか?じじい。

まあ確認しない俺も悪いんだが。

「いえ、別にかまいませんよ。」

それで、ビニの住めば？

「ふおひふお。まあそいつ流てなさんな。

むうじや来るわい。」

「じじい、入るだ。」

・・・やつきたか。

恐らへ、監視の意味もあるんじゃないかな?」これは。

あの『闇の福音』が同居人なんてな。

いや、までよ?

これは逆にチャンスでもあるか・・・。

上手く協定を結べれば、だが。

「彼女が私の同居人ですか？」

「確か、エヴァンジエリンさんでしたよね。」

「そうじゅ。彼女のところに住んでもらえんかの？」

「まあ、元より選択肢なんてないわけですが。

わかりました。

「今日からお世話になります。」

「ふん。好きにじる。

まあ無料ただでは住ませてやらんがな。

着いて来い。」

「では、失礼します。」

さあて、交渉開始、かな？

あなたの好きにさせんよ、^{クンジジイ}学園長。

「まさかあの『闇の福音』と同音であるとなるとは……ね。」

「ほう。貴様、私を知っているのか?」

「六百年を生きる吸血鬼の真祖。

魔法世界では『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』などの通り名で恐れられている元六百万ドルの悪い魔法使いの筆頭。

立派な魔法使いの敵ですね。」

まずは、こいつが知っていることを示す。

そのくらいこはしないと興味すら持たれない可能性があるから。

「ううん、そんなもんか？」

「ほつ、なかなかの知識だ。」

「まあ、このぐらには。

あとは研究者でもあると噂にありましたかね。

その知識はず！」こものがあると。」

少しの嘘も混ぜて相手を持ち上げる。

これに乗つてくるかどうかで交渉のし易さが大幅に変わる。

「ハハハ！ そうかそうか。

中々話のわかる奴もいるもんだな。

私は研究者でもあるし知識はあるからなー。」

なんせ六百年分の知識があるからなー。」

「流石・・・大魔法使いは違いますね。」

私にとつて脅威そのものですよ。」

「そうだらうそうだらうー。」

もつと敬えー・崇め称えろー。」

乗ってきたのはいいんだが・・・。

エヴァンジエリンってこんなキャラだったの?

随分ぶつとんてるなあ。

立派な魔法使い目指してゐるなら崇めても称えても

敬つても駄目な氣がするし。

まあいいや。

交渉し易くなつたつてことで深く考へないでおけり。

「しかし、サウザント・マスターに負けてその力を封印された……らしいですね。」

こんな所で中学生をやつてるのには驚きましたが。

呪いでも掛けられたんですか?」

「……そうだ。あの惡々しいナギの奴め。

適當なことばっか言つて結局呪いを解きに来ないまま……。

聞けば十年前に死んでいるではないか!

大体、貴様らの父親だ!」

「まあ、大体知っています。」

「まあ、いい。

「うちには餌が自分から転がり込んできたんだからな。」

「フフフ、覚悟ついたよ。」

まあ、死なない程度なら血くらこあざますナゼ。

その前に、交渉を決定づける餌を撒こうか。

上手く食いつけ、H・ヴァンジョリン。

「それよつも、サウザンド・マスターの情報、いりませんか？」

「なにつー!?

奴は死んだだろーー！

いや、それよつも・・・お前何を考えている？

「やの辺はゆうへつと嫁で話しまじょい。

「今夜は付き合つても、もりえますよね？」

「・・・・・ちー！いいだろ？。

「ま、ちらん情報なり血を吸いつけてやるからなー！」

餌には食いついたな。

これで交渉はほぼ上手くいくだろ？。

てか入れ食い状態だし。

さてさて、これからどう立ち振舞おうかな。

その後、歓迎会に参加して、飯食べた。

いや、四葉さんの料理半端ないっす。

まじで今まで食べた中で一番上手かった。

騒がしかつたけど。

でも、このクラスなら退屈はしないな。

頑張つて教師しますかね！

・・・できるだけ巻き込まない方法で。

第五回 盟友は吸血幼女？だけど見た目に対して彼女はすぐかた（前書き）

間違いや気になる点がありましたら感想へお願ひします。

第五回 盟友は吸血幼女？だけど見た目に反して彼女はすこかつた

今の状況を整理しよう。

俺、エヴァハウスでソファーに腰掛けている。

茶々丸、こちらを黙つて見つめている。

時々「録画中」なんて聞こえるが無視だ無視。

エヴァさん・・・俺の膝の上で首に噛み付いている。

あれ、もっと他の方法でいいんじゃないの？

第笈話 盟友は吸血幼女？ だけど見た目に反して彼女はずいぶんかつた

「で、やつちの話はなんだ。」

「そう急かさなくてもいいじゃないですか。

その前に約束して欲しいことがあるんですが。」

只今、エヴァさんのログハウスで交渉中。

大分急かしてきます。

これはもう決まったも同然だな。

どれだけの条件をつけられるか、が勝負だ。

「ならやつせと言へ。

条件次第ではのんでやらん」ともない。」

「わづですか。それなら・・・

あ、結界お願いできますか?

監視とかついてそうなんで。」

「なぜそこまでつ・・・いや、わかつた。

それだけの価値があるつてことか。」

そういうことですねえ。

個人的に聞かれたくない話もあるし。

・・・もづ結界張り終えたみたいだ。

すつゞいなー。展開速度はんぱねーっす。

それにしても、魔法は完全に使えない訳じゃなかつたのね。

それを試したのもあつたんだけど。

「うん。これでいいかな？

ええとまず、サウザンド・マスターの情報からいいですか？」

「いいから話せすぐ話せといふことは話せ——」

なんかいいまだへぐると……「わざになあ。

胸倉つかまなこでよね。

苦しこかひ。

「・・・父は生きてますよ？」

六年前にネギが杖もらつてます。」

「それは本当か！？？」

嘘だつたら承知せんぞ！！」

「なら調べればいい。

あなたなら見ただけでわかるはずだ。」

あの人には呪い掛けられたならね。

「いや、そうか、奴は生きてるのか・・・。

フフフ、そうかそうか。会つたらどうしてやううつか。

まずは一発ぶん殴る。それから・・・。」

自分の世界に入っちゃったよこの子。

戻つてくるまで時間かかりそうだなー。

「あ、茶々丸さんお茶ください。

それにしても美味しいですね、これ。

流石茶々丸さんだ。まだ会つて一日目ですけどね。」

「感謝の極み。

久しぶりにマスターの楽しそうな表情が見れたその御礼です。」

「この子欲しいなー。

超に頼んだら造ってくれないかな?

てかさつと戻つて来い吸血幼女。

「ああ、久しぶりに気分がいい。

おいアリアとか言つたか?

お前の望みはなんだ?お前は何を考えている。」

「本題はそこですね。

私の望みはあなたの知識です。」

「なに?お前は立派な魔法使い候補じゃないのか?

なら『闇の福音』の名が何を意味するかわかるだろう。

まして頭のいいお前なら尚更だ。」

お、エヴァさんから頭がいって言われた。

これはちょっと嬉しい。

「私個人としては、立派な魔法使いなんてどうでもいいです。

赤の他人を助けて何の足しになると？」

そんなのただの自己満足でしかない。

それなら、私は私の大切な、近しい人たちを助けられればそれでいい。

自分もその中に入りますが。」

「他の人間は見捨てる・・・と?」

「助けられるときは助けます。

寝覚めが悪いですし、恨まれたくありませんから。

ですがそれは所詮自分の為でしかない。

自分や自分の周りにいる人々どちらか選べと言われたら

私は迷わず赤の他人を切り捨てます。

その規模がどれくらいであろうと。

それでもし、自分の周りにいる人から恨まれようが

どうだっていいです。それも自己満足でしかないですから。

結局は自分が可愛いんですよ、私は。」

俺が大切な人を守ろうとするのも、結局は自分のため。

自己満足でしかない。

そうだとわかっていて、それをしようとするのは
単なる我慢。

俺はそれを理解してるから。

「だから私は立派な魔法使いに興味はありません。

そしてこう言ひ生き方しかできません。

私が私であるために。」

「フフフ、面白い、面白いアリア・スプリングフィールド！」

貴様のその考え方、立派な魔法使いとは正反対

私達と同じ側だ。

それを理解しているのか？」

「正義、なにを持って正義と言つんですか？」

逆もまた然り。

そんなものの個人で違います。

これと言つた正しい答えなんて存在しません。

また、一人ひとりが持っています。

私が思うに、正義の反対は悪なんかじやがない。

それは他の人が持っているまた別の正義ではないかと。

なら、私は私の信じた道を行きます。

それが、大衆から見て悪だと言うのなら

私は悪で構いません。」

それが俺の道であり、我慢だからな。

そのための障害は全て叩き潰す。

誰にも邪魔なんかさせやしない。

そのための知識、技術、経験が欲しいんだ。

だから。

「だから私は、私が私の道を進むために

私が私であるために

あなたの知識の全てが欲しい。

私が死なないために。

障害を全て叩き落すために。」

「自分を正しく理解している・・・か。

お前、私のものにならんか？

その年でその考え方、遊ばせておくことは惜しい。」

「とても魅力的なお誘いなのですが、

それでは足枷がついてしまう。

私が死んでしまうんですよ。

アリア・スプリングフィールドと言う人間性が・・・ね。

」

そう。

それじゃあ俺は死んでしまう。

もし、自分の生き方を変えてしまったら

それはもう俺の姿をした別の何かでしかないんだ。

「その知識の全てを私に教えてくれませんか？」

「ヴァンジエリン・A・K・マグダウエル。」

「・・・いいだろ？！」

私の全ての知識、その身に叩き込むがいい。

但し、逃げ出すことは許さん。妥協もだ。

いいな？」

元々逃げるつもりも妥協するつもりもない。

そのためには頼んだんだからな。

じゃなきや「んな危ない橋渡んねえよ。

俺は臆病だから・・・な。

「それこそ愚問ですね。

代金は私の血でどうですか？」

「先ほどの情報とは別にか？」

「あんな情報とあなたの知識が同等とは思えません。

私の血を定期的に提供します。どうぞ？」

「ふむ、なかなかに交渉が上手いな。なり早速もらおうか。」

・・・いや、今やるのは全然構わないんですよ？

ちよつとかふつといけばいいだけですし。

だけども、懶々膝に乗らなくてもよくない？

首じやなきや駄目って訳でもないんだし。

「あの、H'ガアンジココンちゃん？」

「H'ガアでいい。私もアリアと呼ぶからな。

で、なんだ？」

「いえ、なぜこのこんな体制を？」

「なんだそんことか。

これが一番早いからだ。いいからいいせ。

かぶつ

あ、なんか献血思いで出すなあ。

この血の抜ける感じが何とも。

おー・・・お?

ଓ. কুমাৰ

おまかせと待て！

「スト、ストッッッ！！」

飲みすぎです！！

やば、血、血が足りない・・・。

エヴァさんはなんか呆けてるし。

勘弁して・・・。

「ハツ、ちょっと待て！」

なんだこの血中魔力は！？

思わず飲んでしまったが、お前、騙したな！？」

「ああ、そう言ひますか。

すいません、ちょっと面倒だったので魔力封印してたんですよ。

今外します。」

俺はネックレスを外す。

あ、まよい、幻術も解けちまつ。

気づいたときにはもう遅かった。

「な、ななななつ・・・！」

「あー、このこと内緒にしててもいいませんか？」

「ばれたらうまやーのや。」

「おまひ、お前つ！」

わっしゃからり嘘ばっかりではないか！

ええい、放せ、放さんか茶々丸つ！

そいつは殴らなきや気がすまんつ……」

「落ち着いてくださいマスター。」

まづつたなー。

まだざらりあつもつ無かつたな。

エリヒよ。

「あ、エリク、そんだけがいいのか。

いすれはびきつもりだつたんだし。

早まつただけつてこじよひ。やうじよひ。

「落ち着きました？」

「全べ、お前にせは驚かされてばかりだ。

「つむりひだるひな、お仕合

「ああ、まだ全てを曝け出す関係でせなこのでなんとも。

「お前と会つ奴は・・・まあいい。

こすれ全て話してもいいわ。」

ええ、いいですとも。

やつしなこと信用されませんからね。

俺はビームでも臆病だから。

その後はこうなった理由などを話しました。

「・・・もう何があつても驚かん。」と言われました。

そんなに驚くことかな?

能力について話した時が楽しみです。

魔導書を見せてもらつたけど、やばい。

貴重なものがいくつもあつてそれだけでこの交渉は無駄じゃなかつ

たなーと再確認。

吸血幼女はただの幼女ではありませんでした、まる

第7話 盟友は吸血幼女？だけど見た目で反して彼女はすこしかつた（後書き）

とつあえず、今日はいいままで。

次回はエヴァ編手前ぐらいまでのつもりです。

それではみなさん、いい夜を。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氐ね（前書き）

期末試験編、エヴァ編の準備段階です。

次は、期末試験

エヴァ編は2～3話のつもりです。

修学旅行はそこからですね。

誤字修正しました。申し訳ございません。

あれから色々ありました。

惚れ薬大騒動

ドッヂボールでネギ + 僕争奪戦

ネギと乙女達のお風呂でキャツ キヤウフフ（僕不参加）。

どれもこれもめんどくさかつたんですがね。

まだ楽しめたからいいんです。

けど・・・

これはねーとが園だ。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氏ね

「あ、アリア先生。学園長からこれ渡してと言われたのですが。」

今日も楽しい一日が始まるかなーと思つて職員室に行けば

一足先に学校。

んでもう起きて朝食。

別荘にこもってたら自分でしなきゃいけなかつたしね。

あ、俺料理もできるんだ。

今日はいい天氣だなーと起床。

朝の運動として拳法の型をやつてシャワー。

茶々丸さんが朝ご飯の準備をしていたのでお手伝い。

としづな先生に紙を渡され。

もひそんな時期だったなーと思ひながら読む。

『試練

ヒュア ンジエリンを手はずかる! ヒ。 がんばるんじやー。』

は?

田をハンカチで拭きながら、一度田に向ける。

『ヒュア ンジエリンを手はずかる! ヒ。 がんばるんじやー。』

はあああああああ！？

ねーよーーこやまじでねーよーー

なんだよこれ！？

あいつマジでぶつ殺そうか・・・。

うん、あんなのいなくともここは大丈夫。

寧ろあんな老害必要なし。

よし 待つてこそ諸悪の根源

今から地獄を見せてやる!!

「で、学園長。何か申し開きはありますか？」

「正直スマンかつた！！」

只今学園長に土下座をせています。

気持悪いだけですが。

大体何よあれ。

手なずけるって？お前人間をなんだと思つてんのさ。

しかもエヴァさん？エヴァさんは人間じゃないと？

お前の手に負えないものを押し付けるごじゃねえ。

英雄の息子なら何とかなるかもとか思つた。

こいつなら潰れてもいいなんて考えんな胸糞悪い。

その前にお前を潰すぞ、おい。

「で、なんなんですか?」これは。

「こや、ちゅうとしたおちやめじやよ。」

「ジロークージャ。アリア相撲いかいの。」

それっぽい」と書いて誤魔化せると思つた。

俺が気づいてないとでも?

表情から大体わかります。

内心冷や汗かいてるんじゃないですか？

九歳の餓鬼だからってあんまり舐めてると

「ああ、そうなんですか。

・・・あわよくば、なんて考へてないですか?

ましてや、俺なら潰れても・・・なんて、ねえ学園長?」

痛い田見るのは、あんたなんだよ学園都市。

side

近右衛門

正直、彼の頭のよさを舐めとった。

わしの軽い気持ちが今この状況を作り出したさじや。

最初は彼の試練を考えておった。

ネギ畠には2・Aの最下位脱出。

同じにしたら面白いないと思つてしまつたのがいけなかつたのか・・・。

今、彼が住んでる部屋の同居人がふと頭に思い浮かんだ。

「いやー」と思つたのはいつまでもないのう。

もし、達成できたなら万々歳。

できなかつたとしても、彼なら問題ない。

それにヒガは女子どもを殺さないしのう。

そう、思つてたんぢや。

「ああ、やつなんですか。

・・・あわよくば、なんて考えてないですかね？

おじてや、俺なら潰れても・・・なんて、ねえ学園長?」

まさか学園長室まで乗り込んでもいいとは。

言動の一いつに有無を言わぬ気迫があった。

勿論誤魔化そうとした。

ジロークとか適当に言つておけば、納得して他の試練を聞いてくるはずじゃ。

そしたらネギ畠と同様にやらせればいい。

じやが、彼は違った。

彼はいひの考え方を全て読んでいた。

わじは背筋が寒くなるのを感じる。

彼は本当に九歳なのか？

その思考速度や知識は大人となんら変わりはせん。

世の中の表と裏、どちらも理解しておる。

そしてなにより、自分の立場をはつきり理解しておる。

『英雄』を父親に持つことの意味を。

彼をこのままにしておくのは危険じゃと考える。

彼は大人を全く信用していない。

いや、正確には『魔法使い』自体・・・。

放つておけば世界を、全てを憎むかもしれん。

タカミチ君に定期的に接觸してもらひつゝするかのう。

「まあいいです。

これが試験で構わないんですね？

なら精一杯やらせてもらいます。

精一杯……ね。」

魔法が使えない

それだけで頭が痛いと言つた。

監視も増やすしかない。

これで魔法が使えば……ネギ君より才能は上じやつたかもしけん。

それを考へると、惜しそうな存在じゃ。

その後は、授業でネギの試練がばれて・・・

おれに飛び火して、もつやになつひやいました。

そう思つなら勉強しなさい。

君達が最下位脱出すれば万事解決なのよ?

こりゃあ、ネギたちが行方不明（図書館島ね）になつたら

授業にならないんじゃないかなー、と先生は漠然と思ひます。

今のうちから対策練つておくか・・・。

「と嘆うのが今日あつたことですかね。」

一日の授業をネギと共に消化し、現在はエヴァさんとの話中。

「あのクソジジイ、こちらが大人しくしていれば……！」

エヴァさん激怒。まあ当たり前か。

俺でもキレるもんまじで。

「こじても、舐められてますね。真祖の吸血鬼であるエガツさんへ。」

「EJの悪々しい呪いをえなければ・・・

今すぐ五体を引き裂いてやるんだが。」

「もう言えば、まだ解けそうもないですか？」

「もう少し、と言つたところだが。

お前は母親の血が濃いからな。

決定力が足りないんだ。

あの坊やから血が吸えれば・・・たぶん解けるんじゃないかな?」

なるほど。なら原作通りに吸血鬼事件を起しあせるか?

それならネギも成長できるし、俺の試練も終わる。

学園長の予想外な結末で、ね。

俺は学園長の慌てふためく姿が見れるし

エヴァさんにいたってはこの地に縛り付けている鎖から開放される
から。

お互に得しかない。

ネギも貴重な経験ができるし。

問題は、俺がどの程度関与していくか・・・だが。

「ならエヴァさん、ネギをおびき寄せましょう。

時期は期末試験後くらい。

今から計画、準備すれば十分間に合います。」

「いや、それはいいが・・・弟を売るのか?アリア。」

傍から見たらそう見えても仕方ないか。

俺の守り方ってそういうのが主体だからなあ。

受け入れられない人のほうが多いかも。

「売る、とは少し違うんですけどね。

どうとでもいっても結構です。

ただ、ネギにも経験させなきやいけないと思つたんですよ。

戦場の恐怖つてやつを・・・。」

「成る程な。この真祖を踏み台にするか?」

原作じやあ勝つてたよなーネギ。

けど、あそこで中途半端に自信をつけたら駄目だと思つ。

だから修学旅行も油断ばかりしていたし

その後の魔法世界に行くときだつてフロイトに襲撃されてたし。

なら一度完膚なきまでに叩き潰してもう方がいいんじやないか？

世界の広さ、魔法使いトップクラスの実力。

それを身をもつて理解するほうが大事だと思つ。

何より、エヴァさんが勝つて血を定期的に貰つた方がいい。

一回吸つただけじゃ解けないかも知れないし。

「いや、エヴァさんには本氣で戦つてもうこます。

勝つておかないと、血が定期的に貰えません。

そして何より、ネギの為にもなりません。

中途半端に自信が付くと後が怖いですから。

天才であればあるほど後で挫折した時に立ち直れない可能性が高

いものです。

なら、今は最強クラスの魔法使いの実力を体で理解した方が大きい。

フォローを私が行えれば問題ありません。

学園長もこのことを考えてはいるはずです。

しかし、ネギの勝利を……ですが。」

「なるほど……自分との力量の差をわからせてやるんだな?

戦場で一番必要なのは『経験』だからな。

理には適っているか。

それにしても、お前はなぜそんなことまで……いや、今はいか。

ゆっくりじっくり長い時間をかけて話してくれればいい。

しかしあのクソジジイ、私を掌で踊らせよ!としたのか?

呪いが解けたら真っ先に報復にいくか……。」

ほんと、HUGAさんは物分りがよくて助かるねー。

不適な笑みに惚れそうですよ。

冗談ですけど。

学園長は一度痛い目に会えばいい。

わへ、底づきにもならなによ。

あんたの思い通りにはさせさよ。

俺の掌で踊り狂ってくれ。

原作と言ひ加の物語は、少しづつシナリオが書き換えられていく。

一人の異端と、一つの悪^{せいたく}によつて。

歯車は、少しずつ回り始めている。

最後にあるのは、ハッピーホンダか

はたまたバッジホンダか。

それは全てが終わるまで、誰にもわからない。

けれども「引き返す」とはできない。

始まつてしまつたのだから。

結末は、一つとは限らない。・・・。

第拾話　期末試験・修行の試練・学園長先生（後書き）

もう何も言いません。

皆さんが言いたいことは感想にどうづく。
全てを受け入れ、書き続けますから。

所詮趣味ですからね。

自分が楽しければそれでいい。

ただ皆にも楽しんでもらえるとすう「J・ケンショウ」あがりますが。
皆の「メント」が私のやる気成分を分泌させます。
なので、一言でも「メント」いただけたら画面前でしゃけます。
「メント」は必ず返すよつこじますよ。

田指せ、最低一田一話！

第拾壹話 ネギ＆バカレンジャー失踪？犯人はわかつてゐる。（前書き）

みなさんこんばんわ。

意外と読んでくださる人がいて驚いている作者」とせぶんすたあです。

こんな稚拙な文を楽しんでくださる人がいて、私はすぐ嬉しいです。

ですが、やはり思いつきだけで書いたものでやはり矛盾や説明不足が否めません。

そして、それでも読んでくださる方々のためにももつと面白くと思うものを書きたいと考えるようになりました。

やはり小説は楽しんでいただくのが一番ですね。

ですので、一度切りのいいところで書き直そつかと思つています。今考えているのは修学旅行編まで、書き終えたらにじょうかと考えています。

話の大筋は変わらないので時間はそうからないとは思うのですが・・・。

よろしければ皆さんのお意見が聞きたいです。

このまま続けて欲しい人も、もしかしたらいるかもしません。

そんな人がいるなら書き直しはとりあえず保留にしますし、完結させてから行つてもいいくらいです。

主人公やキャラ達と一緒に私も成長できるような小説を書いていけたらいいなと思います。

これからも作者共々、よろしくお願ひしますね。

では本編へまいり。

第拾壹話 ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。

この辺から学園長の陰謀は既に始まつてゐると思つ。

なぜに図書館島？

懶々危険な橋を渡らせなくとも、普通に勉強させりやあええやん。

いや、だつてわ？

上手く誘導した、学園長が憎い。

図書館島の魔法の本を探しに行つたんです。

考えなくともわかりますね。

ネギとバカレンジャーが失踪しました。

と語つか最初からだけ。

一般人巻き込んで高みの見物とは、いい趣味ではないですね。

学園長？

第拾壹話 ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。

「兄さん・・・魔法ばれちゃいました。」

その表情は今にも泣き出しそうな、悲痛なものだ。

内容は原作と何ら変わりはないがネギの心情は

原作とは違う印象を受ける。

小さじこじこに話を聞かせてきた効果が少しあつたかな？

魔法を使わずに助けられたならそれがベスト。

けど、ひとのひとに体が動かないなんぢぞりにある。

なら次にできることは自分の手札でひとつ助けるか。

その手札が今回のネギは『魔法』しか無くそれを使って助けられた
なら

結果としてベストでは無いにせよベターではあった。

フォローの仕方は、単純だ。

「ネギ、お前は後悔してるので？」

「え・・・？」

「富崎さんを魔法を使って助けたことだ。

その結果、神楽坂さんには魔法がばれてしまった。

いつもなるなら魔法を使わずに見捨てたほうがよかつた
そう思つてゐるのかつてこと。」

答えはわかっている。

ネギの持つてゐる正義は、そんなつまらないものではない。

俺には無理な生き方。

視野は狭いけど、それはこれから広げていけばいい。

立派な魔法使いとはまた違う、純粋に人を助けたいと思つ氣持。

それがネギの持つ正義。それがネギの魅力。

俺とは真逆の考え方であつ、少し羨む気持もでてしまつ。

「・・・僕は、僕は後悔なんてしていません。

アスナさんには魔法がばれてしましましたけど

それでも、宮崎さんを助けられてよかつたと思います。」

そう、これがネギの魅力なんだ。

ただひたすらに、ひたむきに真っ直ぐ自分の道を進む。

それがネギであり、俺なんかよりもずっと強い。

戦えば百回やっても負けはしない。

けど、俺なんかよりも硬く、真っ直ぐな芯が通っている強い心がある。

だから、少し羨ましい。

俺は今の生き方しかできなーから。

「ならよかつたじゃないか。

勿論、魔法を使わずに助けられたなら一番いい。

けどそれが無理で、他に助けられる方法があるなら使えばいい。

それが、ネギにとって『魔法』だったってだけだよ。

だからヒーリングであまり頼りすぎるのはよくないけどね。

『少しの魔気が本当の魔法』だけ、おじこひきさんが言つてた言葉。

その通りだと俺も思つよ。

まして、西崎さんは俺達の教え子だ。

教師なら助けないと、なー

「兄さん・・・うそ、そうだよねー」

僕もう迷わないよ！

次は魔法を使わずに助けられるよう戸頑張るー。」

俺の言いたいことをしっかりと理解するネギ。

これで悩みは吹き飛んだかな？

魔法もあまり頼り過ぎないよ!になればいいが

すぐには無理だらう。

あ、図書館島の時は魔法封印していくかもなあ・・・。

まあ、学園長がいるから大丈夫だと思つんだけど。

ほんとは行かせたくないんだがなー・・・。

あんまり口を出すと動き難くなっちゃうから

今回は様子見、でいいか。

誰にも魔法はばれないし。

「今度時間が空いたり、神楽坂さんにも俺から話を聞いておへよ。

俺のことをせわせわひいてるだらうね。」

「ハハ・・・！」と呟く。

「ここよ。われよつも面騎さんが無事でよかつたわ。

ネギもまだみたいだし、俺は魔法使えないからね。

あまり関係なこよ。」

ビの口がそれを囁く、と止む。

面騎の「」とせ少し心配したが、それほどでもない。

副担任と生徒、その関係でしかないから。

助けられた時は助けるナビ。

魔法も今はぱらさない。

まだその時期じゃ がないから。

主に学園長あたりにばれたくない。

後は、アスナの方かな？

あの性格ならネギを放つておかないと想ひ。

ならエヴァの襲撃で魔法使いがどのようなものか

理解してもいつのが一番いいな。

それでも関わるって言つながら・・・。

まあそれはいいか。

本当は平穀な生活を送つて欲しいんだけど、ねー。アスナは特に。

一応叔母?にあたるのかな。

その辺あまり知らないんだけど、親戚だとまは思う。

俺達のクラスの生徒も巻き込みたくない。

この世界なんて、知らないに越したことは無いよ。

汚い欲望しかないからね。

それから何日か経つて、終にネギはバレンジャーと共に失踪した。

あ、このかもいないね。

とにかく教室がやかましい。特に雪広。

とりあえず、知つてそつな・・・

「えー、富崎さん、早乙女さん。

何か聞いてませんか？」

この一人に聞いてみる。

確かこの一人だつたはず。

「図書館島に行つたつきり帰つて来なくなつたんですね！」

アリアせんせーじうしょー！？

早乙女が大分パニックに陥つてるな。

こんな話し方じやあなかつただろうに。

そして宮崎は相変わらず俺が怖いのな。

ちょいとショック。

周りもかなり煩くなつて來た。

とうあえず皆落ち着け。

「皆せん落ち着いてください。

私から学園長に聞いてきますから。

なにか知つてゐると思ひますので。

わかり次第伝えますので、授業はまじめに受けしてくださいね?」

「なつ、心配じゃないのですか!-?」

せんせー、雪広さんがあつむやこでーす。

先生は俺ですけど。

知ってる俺としてみれば心配なんてしようがないし、それに

「あのメンバーとネギで先生ですよ？」

早々危険な目に遭うことはないでしょうし、ネギも教師です。

自分の生徒くらべ守り抜きますよ。

ですのであまり心配はしていません。」

「で、ですが、万が一と言つことも・・・。」

「ですから学園長に聞きに行くのです。

学園の施設も把握できない程の馬鹿ではないでしょう。

万が一、把握できていないのなら早々にその席を退いてもらおうが。

では私はこれで。」

ちよつとむかつこで来たので話を切って教室を出る。

雪広じやなぐて学園長こだよ。

生徒にむかつくなんて黙田でしょ。

あー、学園長痛い田見ないかなー。

その頃の教室では

「なんか、アリア先生怒つてた？」

「うん、なんか怖かつたよね。」

「と、と、と、誰よりも心配だったんじゃない？」

なにせネギ先生は実の弟なんだし。」

「怒つたことないもんねーアリア先生。」

「そ、そ、そ、いつも綺麗な笑顔してるよね?」

「あんた、それ禁句よ？」

「初日があれだつたもんねー・・・。」

「まあ、なんにしろ自分の弟を心配しない兄がいるわけないか。」

「そうだねー。」

「それなりにやさしくしておきたい。」

Դ Դ Դ Դ Դ Ե Ե Ե Ե Ե

（心配もあるが、あれはジジイへの怒りが大きいな。大体、あいつはそんな人間じゃない。ククク、ジジイのうろたえる姿が目に浮かぶな。）

アリアをしっかりと理解しているエヴァでした。

また場所は変わつて学園長室。

俺の前にいるのは、この学園のトップ。

なんか物凄く既視感を覚えるが、それは置いておこう。

大事なのはそんなことじゃない。

「説明してもうりますか？」

「説明も向も無いんじゃが……。」

また白を切るつもりですか。

なら、これからも考えがありますよ？

「なら今回巻き込まれた生徒達の両親に連絡しておきましょうか。」

「私達には報告の義務がありますよね？」

普通に考えたら、行方不明になつた時点で報告しなければならない。

学園に子どもを預けている両親達は信用してるのでかい。

学校という教育機関を。

まあ連絡した時点で信用はがた落ち。噂も広がるけどね。

何としてでももみ消したいことではあるな。

「それは、ちと困るの。」

「・・・いえ、困ると言われましても。

生徒が行方不明になるなんて前代未聞ですよ？」

しかも担任と一緒に。

「報告しない訳にはいかないでしょう。」

やつ『普通』ならそうする。

でもそれをしないで、大して焦つてもいい学園長は何かを知つて

いるはずだ。

もし、何らかの理由でどこで何をしているかを知っていたとしても親に連絡しないのはありえない。

そして俺ら先生に伝えないのも変だ。

それ以前に、生徒の外泊を許すこと自体おかしい。

仮にも男と女なわけですか。

ここから導き出される答えは唯一つ。

目の前にいる人が全ての元凶、犯人というわけだ。

知ってたけど。

知らなくてもおかしいことには気づく。

これだけ疑問に残ることがあるんだから。

「それをしないのは、今回のネギ先生達の失踪は

あなたが原因だからですか？」学園長。

「本当に君は……鋭すぎるわい。」

やつと認めたな？

逃げ道を一つずつ潰したからそれが得なかつたんだろうけど。

まあいい。

「やはらうですか。

ネギ先生達はどうで何を？

私のクラスの生徒が心配していますので教えてあげたいのですが。

「

「図書館島の地下で勉強しておる。朝、司書から連絡があつたから
のべ。」

司書つてクウネルのこと?

本名はアルビレオ・イマだつけ。

あの人くらいしか地下なんていかないよなあ。

つてか監視は魔法だらう。

この人も覗いてそうだけどね。

「なら生徒にはそう云えます。

最後に一つだけ、ようじいですか?」

「・・・なんじゃ?」

「なぜ、なぜ危険な図書館島へ。」

今回一番聴きたかったのがこれ。

たぶん、建前を答へると悪いからだ。

「彼女達は普通に勉強しては間に合わないと……。」

やつぱりつか。

もう逃げ道潰しましょう。

ええ、逃がしませんよ。

白を切れないようにしてあげます！

・・・なんか楽しくなつてきたんだが。

「勉強なら学校でもできるも

むしろそれが普通ですよね?

彼女達がいくら勉強が苦手でも、もつといにやり方がいいのも
あつたはずです。

図書館島には勉強がはかどる魔法もあるのですか?

それなら、魔法の秘匿に関わってきますから問題ですよね。

それに、あまり生徒をひこきするのもどうかと思います。

・・・改めて聞きますが、なぜこのようなことをへ.

「それは・・・言えん。

少なくとも、君が知る必要はないからのう。」

そう来ましたかー。

実際うちのクラスの生徒と弟が絡んでる時点で

知る権利はあると思うんだ。

てかなきやおかしいでしょ。

俺は学園長と田を合わせるなど、その田に映る色を見てため息を吐く。

これは、絶対に話さないつもりだな。

俺が考え付くのはネギと親密な関係を作りせておいて

いづれはパートナーに・・・つてことなんじやないかと考える。

結局、アスナ、このか、古、夕映は仮契約するし

まき絵は好きになつてゐし。

楓は微妙だけど、興味はあるみたいだし。

先を見越してつてことだと思つ。

てか魔法の秘匿完全無視だろ・・・。

なんか疲れてきた。

自然と肩を落としてしまつ。

「わかりました。しかし、次からは知らせてください。

でないとこちらも準備できませんので。

では、失礼します。」

この先のことを考えて歩みが遅くなる。

なんとか学園長の陰謀を阻止して生徒たちの平穏を守つてあげたい。

と黙つより、俺のパートナーが多くなつてくると

守りきれなくなつてしまつかもしれないから。

だからパートナーつくりたくないのよね。

できないかもしないけど、それならそれでいい。

けど、そうなつた時にネギパートナーの人数が増えても問題なんだ
よね。

原作みたいにさ。

それなら何人かこっちで負担したほうが、生き残る可能性は高いか？

でも、魔法に関わる人数を減らすのがベスト。

この辺りは常に狙われるからネギにつくのもいいかもしないね。

アスナは・・・いざればれるのか？

ばれないなら平穏に暮らして欲しいが・・・。

難しいかもしだいな。

なんにせよ、人数は減らせるように頑張りう。

主に俺の為に。

「あれ、いつのまにか教室についてしまった。」

考えごとをしていたせいか、気づいたら教室の前にいた。

一旦切り替えようか。

「とにかくわざで、心配ないわづです。」

学園長の言い分をそのまま話して落ち着かせようとするが、そんな
ので納得しないやつが一人。

雪広だ。

とにかくわづで。そこはかとなくへうるわー。

俺だって納得はできなー。

けど

「だからと云つて、ここに騒いだつて何もなりません。

心配だつたから試験ができませんでした、なんて言い訳通用しませんよ？

そしたらネギ先生は教師を辞めることになりますね。

結局はあなた方は自身の首を絞めているだけです。

今あなた方にできることはなんですか？

それを今やらないと、後できつと後悔することがありますよ？

それでも何もしないこと云つてあれば、わつ私は何も云つません。

どうぞ、好きに騒げばいい。

辛い現実から逃げても何も変わりませんけどね。

今からね云々です。名前好きなことをしてくださ。

教科も聞こいません。後はあなたの方のやる氣次第、と言つておきます。

「これで動かないのであれば、俺にはどうする」ともできないね。

「もう言つべき」とは言い切つたから。

「アリア先生、わからないとこを教えてくれますか？」

「顔を上げるとそこにはいたのは。

「大河内さん、ですか。」

大河内アキラ。

正直彼女が真っ先に動くとは思わなかつた。

もしかして、このクラスで一番大人なのは彼女なのかも知れないと認識を改める。

「今、私に・・・私達にできる」とは、少しでも成績をあげること。

それに、一番心配してるのは先生ですよね？」

んーあまり心配はしないんだけどね。

あ、けど怪我とかは心配かな？

あそこ危ないから。

けど大河内かあ。

理解が早い人は好感もてるなー。

「せんせー、私にもおしえてーー！」

「私もー。」

次々に寄つてくる生徒達。

なんか嬉しいけど、これじゃあ対応できない。

「わかりましたから落ち着きましょう。」

「これでは一人ひとり対応仕切れません。」

「ですので、このクラスの成績上位の人達、すいませんが手伝つてもらえますか？」

「担当の教科を分けたら十分教えられるはずです。」

申し訳ないが、生徒にも手伝つてもうらう。

じやないといくら時間があつてもたりないから。

勿論英語は俺

数学は葉加瀬

国語は富崎

歴史は朝倉

超に全体の力バー

これでなんとかなるか？

朝倉が上位にいるとは思わなかつたけどな。

「フン、随分と教師らしいじゃないか。」

「マグダウルさんですか。

もちろん、今回のテストは本気で取り組んでくださいなんですよね？」

「坊やのために今回は本気で行こう。

あの計画が無になつても困るからな。」

「それは助かります。

さて、私も精一杯教えますかね。」

みんな、頑張れ。

俺には教える」としかできないからな。

それでも、思つんだが

ネギ、愛されてるねえ。

やつぱり少し羨ましいわ。

俺は正論しか吐けないから、きっとこの印象ではないだろ？

正論を吐くことが必ずしもベストな答えって訳ではないだろ？

ま、あまり好感を持たせなこよう仕向けてる部分もあるただけ。

でも、やっぱり羨む気持は消えてくれないんだよなー。

俺は少し寂しい気持にならながらも、それを振り払つて首を振る。

けれど、心の鬱^{モヤ}は消えることは無いのだった。

第拾壹話 ネギ＆バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。（後書き）

アリアの苦悩の回ですね。

この辺はあまり動きがなくてぐだつてているかもです。
疑問に思うところがあれば、感想へどうぞ。

作者からできる限り伝わるように説明させていただきます。

前書きに書いたこともよろしくお願いします。

次は試験終了～吸血鬼編の準備段階までです。
ではまた次回。

第拾二話 期末試験の結果？暗躍する吸血鬼と俺と・・・（前書き）

テスト編完結。

昨日久しぶりに運動したら筋肉痛がひどい・・・。

書き直しの件はもう少し考えます。

些細な感想でもいただけると嬉しいです。

第拾一話 期末試験の結果？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。

みんな不安な表情で発表を待っている。

今日は試験の結果発表だ。

俺はそこまで心配はしていないが。

試験前のこの子達の頑張りを見てるから。

それだけで点数があがるかわからないけど

2・Aの生徒だからな・・・と思ってしまう部分もある。

あとはバカレンジャー達だけど、そつちはネギが上手くやると悪い。原作でもそうだったしネギの頭の良さはわかってる。

それ=教えるのが上手い、ではないんだけど。

やつとあの子達はやつてくわる。

2 - A の子はみんな、優しいからね。

ネギのために精一杯頑張ってくれたさ。

第拾一話 期末試験の結末？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。

今日は試験の結果発表の日。

けど俺のやることまだして変わらないが。

朝は拳法、シャワー、ご飯作り。

最近は茶々丸さんとの連携が異常に上手くなつてゐる気がする。

家事的な意味で。

エヴァさんは久しぶりに頑張ったみたいで疲れてるようだ。

もう少し寝かせてあげよう。

試験当日は、合宿組は原作通りに遅刻した。

エバニアネギは魔法を使つけど、別に魔法なんかに頼らなくて

眠気を覚ます方法なんてある。

今回は多めに見るけど、そちらは後で軽く注意しておべきかな。

合宿の話をネギに聞くと、なかなか勉強ははかどったみたいだ。

けどなんかジジイ言葉を話すゴーレムに襲われたらしい。

・・・十中八九学園長じゃん。

けが人がいなくてよかつたよ。

みんなが心配してたことを語りつと、落ち込む反面嬉しそうな顔も見せる。

「なんで嬉しそうな顔してるんだ?」と聞くと

「心配して貰えたことがなんか嬉しくて」だと。

そつ聞えれば昔もことなことあつたな、と思いつ出す。

あの時はお父様に会いたいが為に無茶ばつかやつてたつた。

その度に俺やネカネちゃんに怒られてたけど、どこか嬉しそうな顔だったんだよな。

あの時は、将来を心配したつ。

心の中でさう思いながら自然と笑みがこぼれる。

「あ、兄さんの笑顔、久しぶりに見た気がする。」

ネギにせつ言われ、少しの間呆ける。

そう言えれば最後に笑つたのつていつだっけ。

頻繁に笑ってる気がするけど、よくよく考えてみると

作り笑顔ばつかだつた気がする。

心の底から笑つたのつてもうずつと無かつたかもしれない。

そうか、そんなに余裕無かつたのか、俺。

村の人の石化解除の研究についてもなかなか上手く進んでいない。

そこで最近の行動を振り返る。

感情的に動いている部分が多かつた気がする。

焦つて、視野が狭まっていたのは俺の方だったのだ。

思わず苦笑してしまつ。

自分のあまりに矛盾ばつかな行動に。

それをネギに教えられるとは思わなかつた。

俺もまだまだ、だな。

ネギがビリしたの、と言いたげな表情で俺を見てくる。

俺は「なんでもないよ」と言いながらネギの頭を撫でる。

久しぶりにネギの頭撫でたな、と再び頬がゆるむ。

ネギも嬉しそうだ。

兄弟のスキンシップも増やすかね・・・とか考へる。

少しくらい心にゆとりを持たないと想事が偏つてしまつ。

もっと柔軟に、色々な考えを持たないと。

案外簡単な方法とか出てくるかもしれない。

まだまだ時間はあるんだ。

あこまつむつくつはしていられないけど

それでも、時には一休みも必要だよな。

「ありがと、ネギ。」

今度はネギが呆ける番。

なんか既視感。

そんなに俺がお礼すんのって珍しいのかな、と思。

わかんないけどまあいい。

俺も一緒に成長しなきやな。

そして結果発表待ち。

ぶっちゃけると、あまり心配はしていない。

このクラスの成績上位者はダントツにいいし

他の生徒達は極端に悪かったけど、それは単にやる気がなかつただけ。

真面目に勉強し出すと勢いが違った。

教えたことは次々に飲み込んでいくし、応用力もある。

基本のスペックが普通とは違うことを再び認識させられた。

合宿組も今回は出来がよかつたみたいだし。

正直、真剣になつたこのクラスに敵はないと思つ。

結果は、眞づまでも無く学年トップ。

ただ、学園長の採点が遅れたせいでネギは一度イギリストに帰りつとしました。

気づいたら、いつか、どれだけ速いんだと思わなくも無い。

一生懸命追いかけます。

まだお前は帰らなくていいんだ。

「う、ネギー」

「兄ちゃん……。」

今こも泣きたくな、これからどうしたらここのかわらない

そんな表情をしていい。

「兄さん、僕、ダメでした・・・。

一生懸命やりました。

アスナさん達もこんな僕の為に頑張ってくれました。
けど、けど結果は・・・。」

「ネギ、結果が全てじゃない。

お前は今回のことでの学んだことはなかったのか?

そうじゃないだろう。

大事なのは結果じゃない、その過程だ。

それに、ほら見てみる。」

後ろを振り返れば、2・Aの生徒のほとんどが一いつ向こうに向かって走つてきていた。

ほんと元、愛されてるな、ネギ。

「あの子達に何も言わず勝手に帰郷するなんて、人としてしちゃいけないことだ。」

それに・・・いや、後は皆から聞けばいい。」

「兄さん・・・?」

皆が追いついてネギをもみくちゃにする。

何がなんだかわかつていなーいネギ。

今はただされるがままにされとけ。

それが今回の罰・・・かな?

さて、俺は退散しますかね。

エヴァさんも来てないみたいだし。

皆に怒つてしまつた手前、顔を合わせづらい。

「あ、あのー」

なんか大きな声が聞こえる。

あの声はアスナっぽいけど、タカミチでも見つけたのかな?

まあ俺には関係ないか。

エヴァさんと今後のことも決めなきゃいけないしさつと帰るか。

「うふ、ちゅうどーー。」

・・・あ、今氣づいたけど、石化つてフュイト得意じやん。

なぜ今まで気づかなかつたんだ。

灯台下暗しもいといじぢゃないか。

うわあ、俺どんだけ余裕無かつたんだよ。

思わず血嘲してしまひ。これは仕方ない。

あまりの自分の馬鹿を加減にほとほと呆てしまつたから。

早速別荘に引きこむるか。

エヴァさんにも手伝つてもうれば解除薬か魔法でなんとかなる方法が見つかるかもしね。

文珠の方も続けるけど、あつちはいつになるかわからないからな。

他の方法も考えてみるけど、宝具なんかは流石に創れなかつたし。

ゲームなんかのアイテムも試してみるか？

そんなんじゃ無理って決め付けてたけど、試さないで決めるのは早計だ。

「ちょっと、無視してんじゃ……ないわよーーー！」

「はいっ！」

思考の海から帰ってきたときこは、田の前にアスナがいた。
その手は俺の左肩にかかっている。

あれ？え？あれ？？

もしかして、タカミチじやなくて俺を呼んでたの？

それでも、顔赤いのは走ってきたのか？

それは悪いことしたな。

「ならアスナさんと呼ばせていただきますね。

・・・敬語、使ってないよアスナ。

俺も所々怪しい」というがあるからあんまり人のこと言えないけど。

「ああ、すいません。

少し考え方をしていたので気づきませんでした。

神楽坂さん何か用ですか？」

「えっと、その、アスナでいいわ・・・です。

なんか余所余所しくて嫌、なんです。」

学校では一応教師といつ立場なので苗字で呼ばせていただきますが。

後、そちらも無理に敬語は使わなくていいですよ。

九歳に敬語も変ですし。流石に学校では使って欲しいですけどね。

それで、何か用があつたのでは?」

「なりませひりせひり。」

敬語とか肩がこるのよね……。

あ、そうやべ、この前からひくり話す機会がなかつたから。

それに今だつてあんたいつの間にかいなくなつてるし。」

「ああ、ううですね。

なら今度時間とりましようか?」

その方がゆっくりできますし、もうすぐ春休みですからね。

アスナさんの都合のいい日で結構ですよ。」

アスナから接触がないと思つたら、今来るのか。

魔法のこともたぶんあるだらうじ日を改めた方がいいな。

でも、俺と同じ時間を過ぎると封印解けたりしないか？

かなり強力な記憶封印の魔法だとは思うけど、今一よくわからないからな・・・。

過度な接触は控えようか。

「わかったわ。つてかあんた携帯持つてんの？」

忘れてた。

頭からすっかり抜け落ちていた。

春休みにすぐ買いに行くか。

もつ血費でいいか。

つてか街のどこになにがあるのかわからんない……。

エヴァさんの呪いが解ければ着いて来てもらひんだけど。

「あー、まだ持つてないですね。

春休みにすぐ買いに行きますので電話番号教えてくれますか？

今度電話しますか？」

「別にいいけど、あんた街とか全然知らないでしょ……。

どうやって買っていく行ぐのよ？」

・・・アスナ、鋭いじゃないか。

痛いところをつかれ思わず顔が引きつるのがわかる。

なんか俺、ほんと駄目だなあ。

少し前の俺が恥ずかしい。

「はあ・・・。

あんた、完璧な天才児に見えて案外おっちょこちょいなのね。

いいわ。春休み入ってすぐに買いに行くわよ。

その時に話もすればいいじゃない。」

うぐう、おっちょこちょい・・・。

けど今はやられても仕方ないか。

それでも、中学生におっちょこちょいって・・・。

今の俺は「うちの世界でも二十歳を超えてるって言ひのこ。

ちよつと繊^{せん}になりそうだ。

私は田の前のまるで女性のような男に田を向ける。

s.i.d.e

アスナ

やつくり話したいとずつと思つてた。

けど色々ありすぎてそんな暇なかつた。

主にネギ関係だけど。

久しぶりにまじまじと見るたび、やっぱじか懐かし感じがする。

なんでだらう?

まだ出逢つてそんなに経つてないのに。

そつ言えば、最初に抱きついたのよな。

今思い出しても恥ずかしい・・・。

またあの時のことを思い出してしまう。

自然と顔が熱くなつていいくのがわかる。

私、今絶対顔が赤いわ！

変に思われてないかしら・・・。

「ああ、すいません。

少し考え方をしていたので戻りをませんでした。

神楽坂さん何か用ですか？」

話しかけられて思わずかみかみになってしまつ。

絶対変に思われたわね・・・。

まあ、いいわ。

そんなこと考へても仕方ないし。

それよりもアリアも魔法使いなのよね？

魔法使いつて天才ばつかなのかしさ。

ネギもアリアも尋常じゃなくへうい頭いいし。

そうだとしたら、なんか不公平ね。

それから色々話したけど、新しい発見があった。

アリアが案外おつむすじうまいだと喜んだ。

携帯の下りはちょっと可愛しかも、と思ってしまった。

だつてあまりに予想外だつたんだもの。

私は悪くないわ。悪いのはアリアよ。

仕方ないから春休み入つてすぐ、携帯買いに連れて行く約束をする。

なんか、ネギ以上に放つておけない感じがするのよね。

後で気づいたけど、これって『データ』ってやつじゃないの？

私初めてなんだけど・・・。

な、何着て行こうかしら。

つて、まだ先の話じゃない。

それに、あいつは九歳よ？

これは弟と買い物に行くみたいなものよ！弟いないけど。

でも、アリアは大人っぽいし・・・。

たまに私達より年上に見えるし。

うーん・・・。

「あー、もうまだ寝るこじー！」

今日はもう寝よっ！

「アスナ、どしたん？」

このかに聞かれるが、話せるような内容じゃない。

「めんけど聞こえなかつた不利をわせてもうつわ。

今度なんか奢るから許して・・・。

その日はもううん、寝れるはずもなく朝を迎えた私だった。

アスナ side end

アスナが頭を悩ませていた頃、エヴァハウスでは

「私の別荘に行くぞ。」

「そつちのが時間の短縮になるか・・・。

「了解。」

石化解除薬の話をすると、早速別荘に移動になる。

サンプルを見せたらかなり難しそうな顔をしていたからな。

これは時間かかりそうだ。

そういう、くだけた話し方をしてこるのは猫を被るのをやめたからだ。

」との発端はエヴァ センの「いい加減敬語やめひ」の一言。

俺も疲れるからすぐいやめてくだけた話し方にする。

もちろん遠慮はなしで。

すると、なにが不満だったのかエヴァ サン怒り顔。

聞くと「また嘘だつたからだ！もうお前の全ていが嘘に見えるぞ……。」
らしい。

それは仕方ない。

そう言つ風にしてるんだが。

誰にだつて手札を多くは見せないのが俺のやり方。

信用してない訳ではない。

ただ俺が臆病なだけ。

「あ、俺の従者も呼んでいい？」

石化のスペシャリストがいるんだ。」

「いいだろ？」「

フェイトも呼んで三人であーだーだ話しえ。

最初にひと悶着あつたのはお約束だ。

フェイトと仮契約結んだのつていつだけ。

麻帆良に来てからなのは覚えているけど・・・。

思いつきで提案してみたら案外あつさり了承されたのには驚いた。

聞いてみると「君が創り出したんだから、君がマスターでいいよ。」
だと。

なんかこのフェイト、性格が段々変わってきてる気がする。

「やつ言えればフロイトはこいつも向してゐるんだが、……。

勝手に出でることはないといふけど、少し氣になる。

まあ、魔法先生にばれるような強さではないからいいんだけど。

話がそれた。

フロイトに聞いてみてもやはり難しそうな表情をした。

爵位持ちは落ちても爵位持ちはことか。

力は変わんないからな。

「やつ言えればアリア、お前こんなに別荘を多用してたらまずいだろ
う。

お前は人間なんだから寿命もある。

「のままじやすぐにジジイになるだ。」

ああ、確かにそうだね。

あんまり深く考えてなかつたけど確かにそれは問題だ。

ちなみに今は二十歳越えて・・・二十一になるいふか?

あまりわからんないから予想だが、

ううん・・・。

「なら、もう少ししたら咬んで・・・つてのは駄目?」

「おま・・・ここのか?」

「うふ。別に人間に拘りは無いし。

不死は怖いけど・・・他の何に変えてもしなきゃならない」とが
俺にはあるから。

「これは俺の我慢だ。本当に傲慢なのは魔法使いとかじやなくて俺
なのかもね。」

魔法世界の人間は確かに傲慢だ。

だけどよく考えてみれば俺も大して変わらない。

色々なものを犠牲にしながら、俺の我慢を通さうとする。

これを傲慢と言わずになんと叫ぶのだろうか。

それでも生き方は変えないけどさ。ってか今更変えれない。

「フフ、相変わらずお前は面白いな。

流石私の見込んだ人間だ。

誰よりも悪の本質を理解し、誰よりも人間らしい。

ああ、余計に欲しくなってきたじゃないか。

それと私のものになれ。」

「いや、そんなのそつちの勘違いだつて。

俺はただ自分のやりたいようにやつてるだけ。

だから氣に入らぬことには精一杯抵抗するし、興味の無いものは無視する。

多分、誰よりも子どもなんだよ。俺の本質つてやつは。

それにそんなに焦んなくとも不死になるんだからいづれ周りに誰もいなくなるよ。

その時にまだ俺なんて欲しいないうりへりでもあがるわ。

だから「めんけじちよつと待つててよ。」

「そう言つてこひがいいんじやないか。

誰よりも自分のことがわかつてこる。

良いところも、悪いところもひつくるめてわかつていながら変えるつもりが無い。

そんな人間はほとんどないことが、なぜお前はわからんのだ。」

そんなこと言われたって、ねえ。

これが俺だもの。

なら俺は俺らしく生きるしかないじゃない?

人間は他の誰にもなれないんだから。

石化の方は焦つても仕方ないので、とりあえず長い目で見る」という
する。

時間をかけねばなんとかなるかもってことがわかつたし

それだけでも収穫があつたと思つ。

それから、フュイトも交えてご飯にする。

相変わらず茶々丸の「ご飯はおいしい。

フュイトのコーヒーに対する執着も相変わらずだけど。

その後はみんなでお酒を飲んだ。

変なテンションのままネギ襲撃の話をすると、フェイドも食いついてくる。

ネギの実力が気になるみたい。

・・・ここからはバトルジャンキーなんじゃないかとたまに想つ。

流石にフェイドが出てくるとまあこので、今回は見学で我慢してもいい。

その時の残念そうな顔が忘れない。今度久しぶりに模擬戦に付きましたから。

今日はほんと久しぶりに騒いだ気がする。

たまにはじこいつのもいこな、と思つ。

今まではずつと根つめてたから。

立ち止まって周りを見渡すことの大切さを知った

そんな一日だった。

第拾二話 期末試験の結果？暗躍する吸血鬼と俺と・・・（後書き）

次は日常パートをはさんでいよいよ吸血鬼編ですね。
戦闘はかなり久しぶりな気がします。

では、次話も楽しんでいただけると幸いです。

第拾參話 アスナの苦惱、アリアの眞実（前書き）

アスナとの絡みです。

上手く書けてたらいいなあ。

てかアスナがめっちゃ乙女っぽく・・・。

つてか気づけば10万PVを超えていました。

みなさん本当にありがとうございます。

感想も気軽にどうぞ。

第拾參話 アスナの苦惱、アリアの眞実。

ナジヤ、

今日はアスナと話をする口。

いつもとは違つた、な格好で髪も完全に下ろす。

そして駅に向かつ。

今田はどうな話をするのかな、と思考しながらも久しぶりの買い物に

少し心を躍らせる。

やせつ女のトとのトーク……でいいのだらうか。

とにかく買い物はいつになつても楽しみつてことがわかる。

まづい、初つ端からつまづいた・・・。

第拾参話 アスナの苦難、アリアの真実。

s i d e アスナ

昨日も全く寝れなかつた。

目にクマが残らなくてよかつたわ。

それにも、ふわあ・・・眠いわね。

これも全部あの大人みたいな子どもが悪いのよ。

顔はどこかあぢけなさがあるんだけど、雰囲気が子どものそれでは

ないあいつ。

ネギはまだ子どもな部分が多いけど、アリアは違う。

・・・おつかれさうよいだね。

あれはなんか、うん、可愛かった。

つて、私あいつのことばかり考へてるわね。

これじゃまるで私があいつのこと、す、好きみたいじゃない！

違うわ！私には高畠先生と言つ人が！

・・・はあ、ばかみたい。

とつあえず着替えましょ。

この向日か悩んで決めた勝負服。

スカートなんて滅多に穿かないし化粧もしないんだから。

何と勝負するか私自身よくわかつてないけど。

んな細かいことまじの際いいのよ！

このか達はまだ寝てるわね。

書置きでもしとけば大丈夫よね？

んじゃ、行きましょ！

駅に着くと、もうアリアが待っていた。

この辺しつかりしてゐるわよね。

まだ約束の時間三十分前じゃない。

・・・そんな時間に來てる私もどうかと思わなくも無い。

けど、今日はそんな細かいこと気にしたらひつちがもたないわ。

にしても・・・。

いつもはスーツだったから私服がなんだか新鮮ね。

黒を基調にしたシックな感じが、うん。かなり似合つてゐる。

あんまり着飾つてないとこりがアリアらしいけど。

「おはようございますアスナさん。

私服姿初めて見ましたけど、可愛いでですね。

化粧も自然な感じでとても似合っていますよ。」

アリアも同じよう私の私服を見てたのか、褒めてくる。

そりや、結構気合こ入れて選んじゃったから褒められるのは嬉しいけど・・・。

いきなりだからびっくりしちゃひじやない！

嬉しいけど、やっぱビックリか恥ずかしいわ。

私は今の照れ隠しに逃げ道を探す。

ん？綺麗なネックレスしてるわね。

クリスタル？かしら。

「それ、綺麗ね。」

「はい？ああ、これですか。

いつもつけてるお守りなのですが、スーツの内側なので見えませんよね。

普段はこいつ出してるんですけど。」

そう言って首に掛けたまま少し持ち上げる笑顔のアリア。

私はその光景に、少し見とれる。

すぐに首を振り意識しないようにする。

な、なんでこんなにビキビキするのよ？

相手は九歳なのよ？こんなにビキビキ、私いんちよに何も言えないじゃない！

逃げるよつてそのクリスタルに手を伸ばす。

指先がそれに触れた瞬間、何かが変わった。

田の前にいたのは、わざとよつ身長が高くなつて

子どもっぽさが消えた

本当に綺麗な女性のよつな、けいぢにか黙つぽやも感じじる。

あきらかに子どもとは言へない、冷や汗を流していのアリアが立つ
ていた。

呆けてしまつた私は、絶対に悪くない。

アスナ

s i d e

e n d

これはやばいって、まじで！

アスナに幻術その他諸々ぶち破られた！！

ちょっと間の抜けた声が可愛いが、今は無視！！

うん、少し落ち着こいつ。

深呼吸深呼吸。すうーはー。

とりあえず、まずは魔力をどうにかしないと。

「アスナさん。このこと、誰にも言わないでくださいね。」

ネギも使ってた簡易魔力封印を施す。

何重にもかけたので外に漏れることはないだろう。

学園長にばれてなければいいが。

あとは、認識阻害か。

魔力任せで強引にかけるか？

いや、そしたらたぶん残滓でばれる。

それに封印しちゃったからもう使えん。

容姿は・・・まあ他人の空似で押し通す。

今は解かれた瞬間つをアスナにしか見られてないからなんとかなる。

監視もちょうどいみみたいだし。

かなり危なかつた。

あー、焦りすぎだ。頭が働かない。

こじは仕方ないからこのまま行くしかないか・・・。

にしても、まさか解けるとは。

結構高かつたのにな、あれ。

これじゃあただのアクセにしかならない。

最初抱きつかれたときはスーツの内側に入れてたから大丈夫だったのか？

多分そうなんだろ。触れた瞬間だつたし。

アスナが呆けるのも仕方ないな。

エヴァさんの次にばれるのがアスナとは思わなかつたけど。

早く再起動しないかな？

説明しなきや、ね。

どう誤魔化そうかな。

「ちよ、ちよっとあんた！

その姿はなんなのよー？」

「ええと、色々事情がありまして。

今はまだ話せない、とか言えないのですが・・・

それでは納得できません、よね?」

「あ、当たり前でしょー。説明しなやこよー。」

だよな。

どうするか・・・。

少しだけ真実を話すか?

もつなるよひにしかならぬよひに思えてきた。

あまり深いところまでは話せないけど、ほんのさわりだけで納得してもらひつか。

もう、幸先悪いな。

「やつですね、この姿は副作用、みたいなものと考えていただければ。

隠すその理由までは話せません。

私の命に関わることなので。」

「い、いのちって・・・[冗談]でしょ?」

[冗談、ではないけど。

俺が魔法を使えるってのはいい印象『ええない。

特に魔法世界のジジイどもにはね。

今は、大した障害ではないと認識をせているが

これが最優先暗殺対象に変わる。

下手したら普通に殺しきるかも。

あのアリカお母様に似ているってだけで危険だらけなのに

「いや油は注がたくない。」

「おの園長じぱりやなこのは、そこから漏れるかもしねないから。」

魔法先生から、とか。

まあそれだけでは無いけどこれが一番納得してくれると思つ。

「冗談ではないですよ。」

「こんなつまらなこ嘘つこてもどうひみつも無いですしお。」

だから、誰にも話さないでくれますか？

勿論ネギにも、です。」

「これ以上は話せない。」

だからこれで納得してくれ。」

じゃなこと、じひひ側に引き込んでしまつゝしなる。

それはしたくない。

折角手に入れた平穂をわざわざ捨てなくていい。

「・・・なんで?」

「なにがです?」

「なんで、なんであんたは・・・そんな平氣そうな顔で笑つていら
れるのよ――」

それは、もう諦めてるからだ。

この世界に来たのは自分の意思。

そりやあ、いんなはずじゃ・・・と何回も思ったことがある。

でも結局は自業自得だし。

生まれは予想外だつたけど、それはもう仕方ない。

今更何を言つたって変えようの無い事実だから。

誰かを恨むのもお門違いつてもんだ。

けど、その中で大切な物を見つけた。

それはこれからも増えていくかも知れない。

そのどれもが、この掌から零れ落ちないよう^{。こ}。

この手で守りきれるよ^{。こ}。

それが俺の、私の生きる人生みちだから。

「それが、私の宿命だからですよ。

私もネギも、そんな宿命を生まれたときから背負っています。

危険度は私のほうが上ですが。

命を狙われたり、なんて普通にあるでしょう。

そんな世界なんです。魔法世界は。
まほうせかい

だから、アスナさん。

「うう」とは早く忘れて日常を取り戻した方がいいですよ。
でないと戻れなくなってしまいます。」

少し予想外の展開だけど、これで引いてくれたら嬉しい。

でなきゃ無理やり理解しても「うう」となる。

下手したらトラウマになるかもしねない。

そんなことはしたくない。

一応親類、とこうとなるんだね」
し

なにより今は俺の生徒だ。

平穀な毎日を送つてもらいたい。

それこそ死ぬまで。

できれば誰も巻き込みたくないからさ。

「あー、もう！難しそぎー」

とにかく、あんた達の魔法ってのは関わると危険なんでしょう？

それだけはわかった。

正直後は全然わからなかつたわ。

あんた達がどれだけ危険なのかとか、命に関わるとかいきなり言
われても

全然理解できないわ。

けど、それでもあんたやネギは放つておけない！

特にあんたよ？変な所でおつりこひょいだし。

私はバカだから、考えてわからないなら仕方ないじゃない。

なら私は私の考えで勝手に動く。

あんたやネギなんかに文句なんて言わせない！

これは私が決めたんだから！

なら」の話はおしまいね。それと携帯販賣に行くわよ。

ついでに街も見て回れば少しは覚えられるでしょう？」

ああ、アスナってこういつ性格だつたつけ。

弱つたなあ・・・。

エヴァに頼むしかないか。

多分着いて来るからな。

心苦しいが、仕方ない、な。

オコジョにパクティオーはさせなこよひこよひ。

でも、もし、エヴァの魔法、殺氣を受けてなおその覚悟を持つていられたなら……。

その時のことを考えると、俺も覚悟をとかなきゃいけないな。

守る対象として認識するかどうかの、ね。

といつか、まじでこい性格してゐよなあ。

俺がもうしちょっと若かつたら危なかつたかも……。

俺はロリコンじやなこいつこの上。

その後はまた一変して、楽しく街を散策した。

切り替えの早さに俺が驚いたぐらいです。

携帯を買つて最初の登録がアスナつてのには違和感があつたが。

まあそんなのは些細なことだ。

久しぶりの外出は楽しかった。

あんまり機会はないけど、またいつか誰かと来ようと思つ。

色々な発見があるし、いい刺激にもなる。

アスナも楽しんでたみたいだし、とりあえずはよかつたかな？

最初やらかしたけど。

悔やんでも仕方ないので、今後のことを考えよ。

とつあえず、エヴァさんに相談かな？

おまけ

「ねえ。HAPPYさん」

「どうした?」

「いやそれ、今日神楽坂アスナと携帯買いに行つたんだけどね。」

「なぜお前が・・・まあいい。で？」

「・・・ばれた。」

「なにが、つてお前、まさか・・・。」

「うん。たぶん想像通り。」

まあエーヴィーさんの家に戻つてすぐ別荘に入つて

予備の魔法具つけたからわからなかつたかな。

金が何百万かトンだのが痛い。

今は創れるようになつたからいいんだけど、時間かかるしなあ。

「・・・なんでだ？」

「それなんだけど、まずこれ見て。

「術式刻んであつたクリスタルなんだけど。」

「なんだ、これは・・・。」

「わかるでしょ？術式がぼろぼろにじぶち破られてるんだ。」

「待て、これせびいかで……いや、ぜかな、そんな筈無い、だが
しかし……。」「

あら、自分の世界に入っちゃつた。

研究者ついにこれだから少し面倒なんだよな。

俺もなんだけど。

つてかこれが本題ではないのだが。

「戻つてきしエガトさん。たぶんその予想であつてゐるから。

「なんでもそんなことがわかるー。?」

「もしかしたら親戚かもしないから。

俺の母親、俺の容姿。これで想像つくでしょ？」

「・・・ウエスペルタティア、か。」

流石に知つてたか。

ここからが本題。

今日あつたことをかいづまんで話す。

アスナの覚悟の辺りからエヴァさんは笑いをこらえていたけど

話が終わると同時に吹き出す。

そして大笑いし出した。

ほんとにさ、笑い事じゃないんだけど・・・。

「ハハハツ！面白いじゃないか！」

「いや、面白いとかじゃなくて・・・。

とにかく、ネギ襲撃のときたぶん着いてくるから。

ネギと一緒に教えてあげてくれないかな？

最強種の力、じゅら側の怖さをや。」

「まあ確かにそれが一番いいか。

でも、お前も覚悟しとけよ？

たぶん、あいつは真っ直ぐに突っ込んでくる。

直情バカだ、あれは。

簡単には引き下がらないぞ。」

「うそ、なんとなくわかってるから困ってるんだけどね。」

直情バカはかわいそうだよ、エヴァさん。

とにかく、頼んだからね？

あとはなるよくなれだ、ちくしょう。

・・・いつに来たりの話だけど、ね。

その時は全力で守らせてもらりますよ。

なんか、上手いこと進まないなあ。

これが現実なのか・・・。

第拾參話 アスナの苦惱、アリアの眞実。（後書き）

どうだつたでしょうか。

楽しんでいただけたらうれしい。

次はアリアを少なからず思つてゐる人たちの心情を整理しようかと思ひます。

六人くらいになるのかな？

それが終わればようやく・・・。

でわまた次回。

第拾四話 アリアとネギ 男性編（前書き）

言い訳をせてくれさい。

この話書いていたら思つた以上に長くなつてしまつたんですね。
一話にまとめるつもりだったんですけど・・・。

一日一話が・・・本当に申し訳ありません。
と書つわけで、男性編です。どうぞ。

ネギ君とアリア君の資料を見比べる。

近右衛門の憂鬱

そして、二人の容姿と性格を思い浮かべる。

どう見ても似ていないうー人。

容姿も性格も、双子とは思えないほどに違う。

ナギの面影を残しながらその性格はまるで真逆のネギ君。

アリカ姫の容姿に瓜二つだけどこかナギと被るアリア君。

井澤君としえせんともう少し優秀な」と

思わずため息が出る。

アリア君の大人びた物言いや行動は九歳とは思えない。

「わざとあなたに困らせるつもりはない

九歳の子どもである事実なんを忘れてしおりともしあはる。

これで魔法が使えたなら・・・。

何度も同じことを考えたことか。

「そりいえば……。」

この前大きな魔力反応が麻帆良内に急遽出現したこと思い出す。

学園結界に反応が無いなんて、まずありえん。

エヴァに聞いても侵入者の可能性はほぼ無いと言つておつた。

反応はすぐに消えて、魔力の持ち主が誰かは特定できぬまま。

わしは内部の誰かが魔力封印をしていた可能性を考える。

その場合何らかの拍子に解けてしまつたと考えるのが自然。

敵の可能性はほぼ無いじやう。

そんなミスを犯す者が今までばれずにいた訳がない。

一人、思い当たる人物がある。

魔力が感じられないくらい少ない、もしくは完全に無い人物。

魔法先生に度々監視させている人物。

ネギ君の双子の兄、アリア君。

じゃが、それじゃと理由がわからない。

わしはどれだけ考へても妥当な理由が浮かばない。

彼なら、それだけする相当な何かが無ければしないじゃねえ。

魔法先生も間が悪くちゅうど彼を監視してない時だったようじゃ。やじり。

全く、本当に間が悪いのづ。

これでは何のための監視かわからないのじゃ。

今日向度目かわからないため息を吐ぐ。

「もし彼じゃつたら……。」

そう願わざにはいられない。それほど彼は優秀なのじゅ。

何度も思考しても口から出るのはため息ばかりじゃった。

ネギの兄さんな一日

僕は今日までの「」とを思ひ出す。
本当に色々なことがあった。
まずはアスナさんを占つたこと。
あの時は本当に失礼なことを言つてしまつた。
兄さんに怒られたことも覚えてる。

「失恋ってのは女性からすると、とてもショックなことなんだ。

例えそれが事実でも言つてはいけない言葉もある。

例えば、太っている人にそれを伝える、とかね。

占いで言えば、不吉な相が出ています、とか。

と言つとか占いは悪い結果なら対処法も教えなきや駄目。」

なんて言われたっけ。

相変わらず兄さんの言葉は難しいけど、後になつて理解できぬ」と
がいっぱいあった。

しかも間違つていないんだ。

うん、やっぱり兄さんはすごい。

でもそんな兄さんにも欠点がある。

それは魔法が全く使えないこと。

兄さんは、魔法がなくとも生きていける、って言つたけど……。

便利だから使えたほうが絶対いいと思つ。

けど「便利な物に頼つてばかりいるし、それが使えなくなつた時苦労するぞ」と言われたことがある。

僕は魔法が使えなくなつたりひとつなんだらう?

少し考えてみる。

・・・少し、ひとつとっても怖い。

僕は魔法が使えないし、パンチになつた時こそひとつ何もできなくなつた時

そんな時があるかわからぬ。ナゾ。

もしあつた時はどうしよう?

うーん・・・。

あれ? もしかして僕から魔法をとつたら、何も残らない?

なんかショックだ・・・。

これからは魔法ばかり頼らずに自分の力でなんとかできるようにならうかな。

どうすればいいか全然わからないけど。

体でも鍛えてみよつかな？

そういえば、この前久しぶりに兄さんと頭撫でてもらつたなあ。

えへへ。すぐ嬉しかった。

魔法学校に行ってからまともにスキンシップなんてなかつたから・
・・。

これからはもうと兄さんとスキンシップとりたいな。

あつちでは僕も強くなることで頭がいっぱいだつたし。

この修行も兄さんが一緒にやなかつたら、もう失敗してウホールズに帰つてたかも。

ん?なんだか僕兄さんに助けられてばつかかも・・・。

「、これは大変だ!

僕兄さんに迷惑ばかりかけてる! !

兄さんを助けられること、何か無いかな?

僕の得意なことで兄さんが苦手なことじやなきやだめだよね。

数分後、僕は膝をついて落ち込んでいた。

うう、魔法しか思い浮かばないよ・・・。

僕が兄さんに勝てるのってそれぐらいしかない・・・。

やつぱりなんかショック・・・。

はあー、僕つて駄目駄目だなあ・・・。

でもそつ考へてみると、やつぱり兄さんます」いな。

僕が駄目なんじゃなく兄さんがす」「あれるだけな気がする。

うん。兄さんと比べちゃだめだ。

比べても落ち込むだけだもん。

一つ年上のアーニャよりも年上っぽく見えるし。

そつ言えば、アーニャ元気かな?

また三人で遊びたい。

お姉ちゃんにも久しづりに会いたいかも。

あ、そうだ。手紙書いつ。

鞄に魔法のレターセットがあつたはず

何を書こうかな?

やつぱり、こつちであつた出来事とかだよね。

よし、書くぞー!

「これでよし、と。」

結構な時間をかけて僕は手紙を書き終えた。

この場合は撮り終えた、が正しいかも。

アスナさんにも映つてもらつたし色々な話もできた。

兄さんの話題が多くつたのは、僕が兄さんともつと話したいからかな？

たぶんそうだね。

これからは僕からも積極的に話しかけてみよつかな。

今度は兄さんと一緒にこの映像を撮ろう。

うん、これはいい案だ！

絶対忘れないようにしなくては…

僕はその日、兄さんのことばかり考えてた気がする。

とりあえず、わかったことが二つ。

兄さんはすごいこと

どんな兄さんでも僕は大好きだとこいつ。

えへへ。

ちょっと恥ずかしいけど、本当のことだから仕方ないよね。

今田は呪わしくの思いを再認識した、そんな一日でした。

僕は最近、街に出でよくコーヒーを飲んでいる。

勿論、出るときは魔力をほとんど封印して、一般人に偽装しながらだけだ。

こここのコーヒーはとても美味しい。

コーヒー好きの僕としては、これほど嬉しいことは無い。

ほんと、彼には感謝しないと。

ゆづくりとくつひざながら、思い出すのは最初の出会い。

今一状況が掴めていなかつた僕の視界に映つたのはアリカ姫にそつくりな彼。

思わず攻撃を仕掛けてしまったのは鮮明に覚えている。

・・・返り討ちにされたけどさ。

気づいたら地に組み伏せられてたとか、ほんと勘弁願いたいね。

まあ攻撃した僕が悪いんだけど。

話を聞くと、アリカ姫とあのナギ・スプリングフィールドの子どもだった。

そして、自分で僕を創りだしたらしい。

方法を聞いたけど曖昧な答えしか返つてこなかつた。

敵に手札を晒すような真似はしないのは当たり前のこと、だつてさ。

正直もう一度戦つても勝てる気はしなかつたのでこちら側に勧誘。

すぐ断るかと思えば、保留されてこっちが面食らつたよ。

全く掴めない人物だと思いかなり警戒した。

次の瞬間思わず呆けてしまった僕を、誰も責められはしないよ。

だつていきなり「修行つけて」だもん。

もし、あの場にいたのが僕でない誰かとしても、きっとその人は呆然とする。

感情が無い、人形の僕が受けたのだから。

彼との修行は受け入れた。

彼を見極めなければ、と思つたから。

まずは中国拳法を教えられるだけ教えた。

最初は、肉弾戦のみなら秒殺のレベル。

はつきり言つてお話にならなかつた。

でもその吸収力はすさまじいものがあつたね。

次々に型を覚え、応用し、たまに驚くような発想を捻り出す。

日に日に戦闘時間が増え、僕との実力の差を急速に縮める。

人に物を教えることや誰かとの戦闘がこんなにも楽しいと感じたのは初めてだった。

後で聞けば、戦闘中の僕は自分でも気づかない内に微笑を浮かべてたらしい。

少し驚いたけどよく考えればそれもそつかと納得した。

僕自身がそれだけ楽しんでいた。ただそれだけ。

「なんだ、フロイトって人形じゃなくてけやんと心あるじやん。」

そのことを彼に伝えたときに返ってきた言葉がこれだ。

彼の発言には一々驚かされてばかりだね。

でも悪い気分には不思議とならない。

それが彼の最大の魅力なのかも。

僕は造物主に創られた存在。

その存在意義は主のためだけにこそ、と思つていた。

彼はそんな僕に新しい知識を多く与えてくれた。

『心』なんて馬鹿馬鹿しいと思っていた頃の自分が今は懐かしい。

こんないゝものなら、もつと早く彼と出会っていたかった、と考えてしまつ。

そうすればもつと違つた道も選べたかも知れない。

けれど僕は完全なる世界の一員。

彼の情報もあちこちに渡している。大した情報なんて無いけど。

もし、彼と僕らの組織が敵対するのなら、その時は、ね。

最近はかの『闇の福音』とも知り合ひになつた。

彼はびっくり箱なんじゃないかと思つてしまつ。

どんな交友関係してゐるんだと小一時間聞いて詰めたい。

・・・今度聞いてみようか。

話はそれたけど、その時見たあの石化は正直すぐかつた。

僕でもすぐに解くことは不可能。

解析にも時間がかかるけど、できることはない。

絶対に解いてみせる。

それが彼への恩返しになるのなら。

自然と口角が上がるのがわかる。

僕はまた笑っている。

少し冷めたコーヒーに口をつける。

うん。やはり美味しい。

そう言えばこの美味しいって思つ感情も心がある証拠じやないだろ
うか。

もう一人の、組織の方にいる『僕』は気づいていないと思うけど。

勿体無いね。

人生の半分以上損しているよ。

今度会うのは・・・修学旅行?の時かな。

その時には、力説しておいた。

造物主に反乱したりして。

その事を考えると、少し止めておいたかなと考え直す。

だから仮契約もしたし、今も彼と共にいる。

これだけは誰にも変えることはできない事実。

彼は僕の主であり、僕の唯一の友だ。

それだけじゃない。

でも今の僕の主は彼だ。^{アリア}

これからもずっと、それこそ彼が死ぬまでの間の関係は変わらない。

僕はそう思つてこる。

彼もそう思つてくれてこるのかな?

そうだと嬉しいね。

完全なる世界の一員である事実も変わらないけど、どちらかしか選べないなら僕は・・・。

考えるまでも無かったことに気づき、思わず苦笑する。

彼と一緒にならいいけど、どんな生活でも適切はしないんだから。

さて、今日は模擬戦に付き合つてしまひつよ、アリア。

君のせいなんだから責任はとつてもらわないとね。

第拾四話 アリアとネギ 男性編（後書き）

すぐにもう一話更新します。

アスナのもやもや

「ふわー・・・。」

んー、今田もいい天気ね。

ふと私のすぐ横に誰かいるのに気がつく。

・・・またネギが私のベッドに潜り込んでるようだ。

全く、ほんとにガキなんだから。

アリアとは大違イネ。

「ん? でもアリアはもう大人なのよね。」

よくわかんないわね。

副作用つて言つてたけど、九歳より前にその副作用がある薬?

でも飲んだのかしら。

わからんない。 考えても全然わからんない。

だから私はすぐに考えるのを止める。

わからないことをいくら考へても仕方ないから。

大体、私にわかるはずもなかつた。

あいつは天才で私は一般人なんだから。

・・・今、一般人？バカの間違いじゃ？とか思つたやつ表に出なさい。

自分以外にバカにされるのってムカつくのよ。

でも、あの顔はかなり美形だつたわよね。

雰囲氣にも男っぽさがあつたし。

「つてまたあいつのこと考へてる。

私、どうしちゃつたのよ・・・？」

まさか、ほんとに好きになっちゃったとか？

・・・無いわ、それは絶対アリエナイ。

そんなこと、ありえぢやだめなんだから。

だつていいんぢょに何も言えなくなるもの。

ん？でもあいつはもう大人つて考えていいのよね？

なら問題無いんぢゃ・・・。

はつー私には高畠先生つて人がいるじゃない！

でもなんでこんなに気になるのかしら。

昔から知つてゐるよ'うな、つてそれも変ね。

うーん、私、大事なこと忘れてるよ'うな・・・。

「うが――――! わかんないわーぜんつぜん、なんつにもわかんな
いわよーー。」

私は思わず頭をかきむしりながら叫んでしまう。
しまった、と思ひつけどもひ遅い。

「ん~、あすなあ~?

どうかしたん~?」

やはつ」のかを起してしまった。

ほんと、私のバカつ!

「「あん、起いちゃひつたわね。

別に何も無いから気にしなくていいわよ？」

ネギがまた私のベッドに紛れこんでたださだから。

ネギのおかげで少し助かった。

これで今回紛れこんでたことせぬために見てあげることになる。

私って優しいつ！

自分で思つて少し悲しくなったのは嘘つまでもない。

それにしてよへ寝るわね、このネギ坊主。

「そういえばこのか。アリア・・・先生のこと、どう思つ?」

つい呼び捨てにしそうになるのをなんとか誤魔化す。

少し、親友の意見を聞いてみたくなった。

普段のみんなのアリアに対する印象とか、イメージとか。

そう言えば私達が図書館島の地下で勉強してた時になんかあつたつて聞いたわね。

今度他の人にも聞いてみよっと考える。

「アリア先生?んー・・・

綺麗やんなあ?」

私は思わずさすがにかる。

そ、そういうじゃないわよ!..

つてかそれ言つたらあいつ確実に怒るわ。

「それ、本人には絶対言つては駄目よ?..

大体容姿じやなくて印象とかイメージの話。」

ほんとにこのかはぼけぼけしてゐるわね。

まあ、可愛いし癒されるからいいんだけど。

今は真面目な話をしているの。

「このかが珍しく真剣な顔で悩んでいる。

たまに「んー」とか「むー?」とかうなつていてるのが小動物チックで可愛い。

それにしても、長いわね。

「せうやなー、ついひと距離置いていひる仮がある。

それには・・・

そ、それに?

そのあまりに真剣な表情に思わず唾を飲み込む。

にじても意外とよく見てるのね。

「こまだこ」のかつて呼んでくれへん。」

ズコー！ー！ー！

思わず滑ってしまった私は、絶対に、確実に、神に誓つて

わるくないわー！

「あ、あんたそれ真剣な表情で言つたじやないでしょーー。」

「えーー？大事なことやんかあー。」

全く、珍しく真剣な顔してると思えば・・・確かに大事なことだけ
じ。

それによ。あこつ学校では苗字でしか呼ばないと想つわ。

私も学校では「神楽坂さん」って呼ぶつもりみたいだし。

れひやかりゅうとあこつのこと覚えてる。

ほんとにひしきたのかしらね。

まあ放つておけないのは確かよ。

ネギは子どもっぽいけど、あこつは変に話しかけてるところつか・
・。

なのにどいか抜けてるのが余計に心配されるのよな。

ネギとは違った意味で、だねじ。

なんか、自分の気持がわかんないってのはイライラするわね。

今度八つ当たりせてもいいおつかしりへ。

うん、そうしよう。

これも全部アリアが悪いんだから仕方ない。

全部、あいつが悪いんだ。

私は自分に何度もそう言い聞かせた。

私は横でうるさいと唸つていい男に目を向ける。

なんか、手紙がどうとか言つていたな。

誰に書くんだろつか。と言つてもあまり親しい人間なんかいないだろつ。

親族か幼馴染、と言つた所か。

「お前の全てが嘘に見えるぞ……」

アリアの本質を測かねている時にこれだ。

思わず叫んでいた。

性格すら猫を被っていた。

そんなアイツが全くと言つていいく程にわからなかつた。

その決意はどこに向いているのか。

私にすらほとんどの手札を見せない。

信頼されてないのかと思い、少し苛立つたのもある。

こいつなら気の許せる友人になれると思った。

思っていたのに・・・。

やはり、私が吸血鬼だからか？

人間ではないからか？

だからこいつも信用も信頼もしないのか。

今まで何度もこの身を恨んできた。

そして今回も。

物凄くムシャクシャした。

一度目の前の男を完膚なきまでに叩きのめし、服従でもさせてやろうと考へた。

考えたら即行動が私のモットー。今考へたが。

別荘で本気の実力を見せ付けてやる。

茶々丸もチャチャゼロも一緒にだ。

卑怯とか言つなよ？

これが私の全力なのだから。

「まじでやるなあや駄田つ。」

やうなやうなひでい。

その時は五体をバラバラに引き裂いてやる。

それを引くといつまため息を吐く。

そつだ。本氣で来い。

でなきや殺す。

「これで終わつていい?」

勝敗はすぐについた。

私は何も、動くことすらできず、首筋に剣を突きつけられていた。

今、こいつは、なにを？

わからない。全く。

動き出しそう見えなかつた。

転移ではないのは確かだ。

瞬動か？いや、ありえない。

この私が入りすら見えないなど絶対にない。

ならなんだ・・・？

「これじゃあ、納得出来なもんつだね。

ならもう一度しよう。

もう一枚手札を切るさ。」

「こいつは、一体幾つ持ち札があるとこいつのだ。

これだけ強いのに、なぜそこまで徹底する。

わからない。余計にわからない。

「今度はそっちから攻撃していいよ。

さつきのはこいつらの不意打ちだったから。」

流石に、今の発言にはキレた。

そんなに舐められて黙つていられるほど私は大人しくない。

絶対、完膚なきまでに叩き潰す！！

「後悔、するなよ？」

私は闇の吹雪の詠唱に入る。

全力で魔力を注ぎ込み、かつ速く。

この一撃で決めてやる。

自分の迂闊さを呪え、バカ。

「闇の吹雪！－！」

私の最大の闇の吹雪。

普通の人間にはまず防げない。

それこそあの赤き翼くらいの力が無きゃ不可能だ。

「こいつがそれだけの力を持つているとは思えん。

先ほどのを不意打ちと思っているのなら避けないだろ？

それももし嘘なら。

これ以上は考へても意味が無いな。

そろそろ直撃する。

私はあいつの行動を何一つ見逃さないよ！ 田中を凝らす。

動く、気配が無い？

直撃したら死ぬのは確実だ。

そこまでのバカではなかつたはずだ。

何を、考へているんだ。

そこじで私はあることに気づく。

「ん？ 何か呟いてるのか？ あれは・・・。」

術式展開？なんのだ？

考える間もなくアイツに直撃する。

何をしたと言うんだ。

防げたとは思えない。

けど、それもすぐにわかった。

「な、に・・・？ 吸収している、だと？」

私の放った魔法の規模が段々と小さくなつていぐ。

あいつの周りに圧縮されていき、胴体に固定される。

あれは、私が考えていた闇の魔法の完成型？

いや、でも、それはない。ないはずだ。

けどそれ以外に考えられない。

故に目の前で起じている現実が理解できない。

再びアイツの唇が動く今度は何をするんだ！？

「ちつ、茶々丸、チャチャゼローー！」

「了解しました。」

「アイ三。」

何にしても放つておくのは危険すぎる。

茶々丸とチャチャゼロに挟み込むよつて攻撃させ、邪魔をさせる。

従者がいなきやきついはずだ。

「やれやれ、君といふと本当に退屈しない。」

すると、あいつの前に魔方陣が現れそこから何かが飛び出す。

従者がいたのか！ つち、本当に多くの手札を隠し持つてゐるやつだ！

しかもその従者はかなりの熟練者だ。

めんじくせうな言葉とは裏腹に茶々丸とチャチャゼロの攻撃を全て捌き、一人はあいつに近づけない。

「多重詠唱、千の雷。圧縮し両手足に固定。」

な、やはりあれは闇の魔法！？しかも千の雷を両手足に固定だと…？

展開も詠唱速度も速すぎる…！

マズイ…離れなければ…！

「遅い。」

「な、つじり・・・！」

私は途中で黙らしられる。背中から前方に思い切り吹き飛ばされた。

周りの景色すら靈むほどの速度で建物に突っ込む。

クツ、田で追える速度ではない！－

だが・・・

「真祖の吸血鬼を・・・なめるなつ－－」

気配と直感でなんとか追撃を避ける。さつきまで私のいた場所にクレーターができる。

あまり攻撃を受けることもできない。

闇の魔法は少し時間が必要。

今の状況では足止めすら不可能、どうする？

このままでは確実に捕らえられるぞ！

なにか、なにかないか・・・！

「考え方なんて余裕だね、エヴァちゃん。」

私が感じるようにも速く地面に吊りつけられる。

建物の最下層まで突き抜ける。

イヤ、これは無理だ。

絶対に勝てない。

久しぶりに恐怖を感じる。

なぜ、やつはこんなにも強い。

この真祖を手玉に取る程に。

なぜ、やつはこんなにも怖い。

この真祖を恐怖に陥らせる程に。

「なぜ、お前は、そんなに悲しい顔しているんだ・・・？」

田の前の男、アリアは今にも泣きそうな顔をしていた。

なぜだ。なぜ。

「俺は本当は誰も傷つけたくない・・・。

誰も、だ。

けど俺はそこまで強くない。

わかると思つナビ、心の強さだ。

だから自分を、俺の周りの誰かを助けるためには他人を傷つけることしかできない。

俺は臆病だから。敵に情けなんてかけていられる余裕なんかない。

だけど、それでも・・・

傷つけたくないんだ。誰も。

矛盾してるのはわかつてゐる。不可能なのも氣づいてゐる。

それでも、俺は・・・。
「

ああ、なるほどな。

私はこいつのことがようやくわかつた。

理解できた。

こいつの本質は誰よりも『臆病』なんだ。

そして誰よりも優しく、誰よりも冷徹。

矛盾ばかりなんだ、こいつは。

こんなのはすぐに理解できるわけがない。

自分が矛盾だらけなことをわかつていながら、それでも進む。

自分の決めた道を、ただひたすら真つ直ぐに。

闇の魔法の闇に侵食されないのは、それだけこいつが闇を従えてい

るから。

自分の抱える闇すらコントロールして自分の力にする。

どんな過去があつたかなんてしらん。

だけど、それは簡単なことではない。

それだけの覚悟があるんだ。こいつには。

ただ、一つだけいえるのは、こいつが

「ハハハっ・・・バカだな、お前。」

「そんなの、自分が一番わかつてゐよ。」

他の誰よりもバカだということだ。

あれだけ一方的にやられては、アリアに何も言えない。

けど、もういい。

なんか考えるだけアホらしくなつてきた。

どれだけ考えたってアリアは理解できない。できるはずもない。

ある意味全て本当に、全て嘘なのだから。

この矛盾人間め。

それに、こいつが真祖じきを氣にする人間でもないことがわかった。

あれだけ強いなら怖がる必要も無い。

むしろあいつの方が・・・いや、やめておこう。

あいつは誰がなんと言おうと人間だよ。

誰よりも人間らしい、な。

そつ言えば別荘の副作用のこと、あいつに聞くと

「咬んで」

つて普通の顔で言われたのは流石に啞然とした。

いや、吸血鬼をなんとも思っていないのはわかつた。

だけどこれはまた別の話だろう。

いきなりすぎるわ、バカ。

私は別に構わないが生き地獄だぞ、私みたいなのは。

それすらわかつて言つてそうだから困る。

全く、その時になつても氣持が変わらないのであれば、その時は・
・な。

喜んで迎え入れよう。なあ、盟友。

アーニャの心配

手紙？誰からかしり・・・つて！

アリア！？アリアからじやない！！

ちゅうと不安だったのよね！なんて言ったってネギのお守りだし？

けじじ「かおひじよ」ひいだか「じじ」か悪い魔女にでも捕まつて
たらと思つと・・・

よかつたわ、無事で！

それに、最近アリアの温もりが恋しく……つて私何言ひたのよー。

あ、あこつは弟よー

・・・でも私よりしつかりしてるわよね?

ま、まあいいわ。とりあえず見ましょ。

『アーニヤ、元氣?』

めちゃめちゃ元氣よ!

つてか元氣のない私なんて私じゃないわ!

『まあ、アーニャならどこに行つても元氣だと思つたがビ。』

・・・よくわかつてゐるわね。

たまにアリアには隠し事なんてできないんじゃないかと思つてしま
うわ。

『 いっちは元氣だよ。』

副担任してゐるんだけど、そのクラスの子達が元氣すぎてたまに着
いていけなくなるけど。

女子中学生のクラスなんだけど、とにかくお祭り好き。

つか本当に中学生?と云つような人たちが多いんだよね。』

な、なんですか？

女子中学生・・・ハツ！

アリアが騙されて・・・なんてないわよね？

『それから』おこ、「アリアー」 もう、なによ、Hカラ もん。』

『いや、魔法のいじめを黙りいつかと・・・ん？なにやつしてんだ？..』

・・・。

『ほひ、誰にだ?』

『幼馴染の女の子。』

『まつ・・・面白にな、私も何か話してやれい。』

・・・・。

『おい、小娘、一つ言つて置く。

アリアは私のものだ。

誰にも渡さん。以上。』

『うふー！ ハハハさん何書いて……まあいいか。

アーニャ、今のは冗談だから気にしなくていいから。

じゃあ、また何かあつたら手紙書くよ。

体には氣をつけて。』

・・・・・アリアが、アリアが

「アリーアが……変な幼女にたぶらかされた――――――！」

だから心配だったの……きっと何か弱みを握られてくるに違いないわ――！

でなきやあんなどこの馬の骨ともわからないような幼女にくつづいてくるわけない――！

きっと、こつものおつちゅーちゅいで何かしたんだわ……。

ハツ！

いひしちゃいられないわ――！

いつなつたら修行なんとかさせと終わらせて……。

待つてねーーーきっとお姉ちゃんが助けてあげるからーーー

金髪ゴスロリ幼女は覚悟しておきなさいーーー

アーニャ・フレイム・バスター キックをお見舞いしてあげるんだが
うーーーーー

おまけ　ある乙女の決意

私は、最近アリア先生のことが気になっている。

あの子どもとは思えない態度に、どこか壁を感じる話し方。

そして極めつけはネギ先生達の失踪。

その時に言われたあの言葉。

あれは確かに私達全員が悪かった。

田先のことにつぶやいて大事なことを忘れていた。

それを、少しきつこ言葉だけ教えてくれた。

あの時のことをみんなに聞けぜ、せうと「わかつて聞こゆれ」と叫うだりや。

私もそう思ひ。けど、あの言ことかすりわざのよつな・・・私はそんな印象を受けた。

じへり考へてもわからぬ。なら。

「少し、話をしてもようかな?」

わからないなり話をすればいい。

それからだ。

私はそう決意し、春休みを過ごす。

新学期が待ち遠しかった。

第拾四話 アリアとネギ 女性編（後書き）

いかがでしょうか。

吸血鬼編に入る前に周りの心理描写、とも言つてのどうつか。
を入れてみました。

こんなはずじゃなかつたんだけど・・・。

書いて結構楽しかった部分でしたね。
ついつい長くなってしましましたが、読者の皆様にも楽しんでいた
だければとても嬉しいです。

次からやつと、やつとです。

吸血鬼編に入れます。

とにかく頑張るの一言に尽きますね。

何か疑問、誤字脱字の報告、気になつた点などあれば感想にお願い
します。

お手数かけます。

ああ、調子にのつて書いたせいで肩が痛い。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼。ある生徒の心情とヒネギの成長に向けて（前書き）

何とか間に合つた。

今回は吸血鬼編序章ですかね。

まださわりなので次あたりから本格的に動きます。

今回のメインは予想外？の彼女です。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼。ある生徒の心情とネギの成長に向けて

苦笑しか出ないよほんっと。

本当にうひのクラスって強いな。

俺なんかよりも遙かに強い娘達ばかりだ。

ちゅうと羨ましいじゃないか。

全く、俺が学ぶことのほうが多いんじゃないかな?

これじゃあどっちが教師かわからぬ。

第拾伍話

桜通りの吸血鬼。ある生徒の心情とネギの成長に向けて

今日から新学期。

春休み中は専ら戦闘ばかりしていた気がする。

俺は春休みを振り返り、少し気分が下がる。

フェイトがやたら模擬戦したがるわ、エヴァさんさエヴァさんで手札全て見るまで

続けるとか言い出すし、ほんとーに疲れた。

つてかビッチも強すぎや。

フェイトは体術のみだからまだいいけど・・・問題はエヴァさんだよ。

手札切らないと殺すとか言い続けてくるし。

『瞬間移動で』終わらせても納得いかないと書いて無限ループ。

結局切る羽目になるし。

あれはazarこと思つんだ。

えいえんのひょうがの詠唱聞いた時は本当に死ぬかと思つた。

だつてあれ、どうなるかわかんないし。

氷漬けよ？あまり楽観視できないのが、ねえ。

思わず逃げた俺は悪くないと思いたい。

これ以上考えると本格的に鬱にならうつだつたので思考を切る。

それに今田からな行動しなければならない。

自分はあることあまりないことを思つといつも通りでいい気もする。
だけど、常に動ける準備はしておく必要はあるので気持を入れなおす。

さあ、どう転ぶかな？

学年が一つ上がり教室も新しくなる。

お祭り好きなみんなは・・・

「三年、A組一」

「「「ネギ先生、アリア先生ーーー」」」

ネギを胴上げ中。勿論俺は遠慮しといた。

金なんとか先生を思い出した。

懐かしいな。結構好きだったんだけど。

あの卒業の時の漢字とか。

ふとその輪に入っていない生徒が田に留まる。

生徒の名前は長谷川。確かに周りの異常さに気づいて距離置いてる。
・のだったと思つ。

このナゼどうにかしてあげたいな。

学園長にこのクラスに押し込められたんだと思うナビ、これはひどい。

よく不登校にならなかつたなと思つ。

話せる友達なんていなかつたはずなのに。

どれだけ悩み苦しんだと言つのだらう。

俺にはわからない。想像もできない。

自分は普通なはずなのに、周りが異常すぎるために自分が異端に見える。

普通の条件はその所々で変わる。

ナビこれはあんまりだと思うんだ。

そしてタカミチはこの現状を知らなかつたのだろうか。

それなら教師なんて職止めた方がいい。

明らかに向いていない。

『気がついて放置なら……そいつした理由を聞きたい。

今度聞くか？そいつしなひ。

とにかく今はこの状況をなんとかしなければ。

俺は座つて疲れたような表情をしてくる長谷川に近づき顔をかける。

「どうかしたのですか？」

俺が声を掛けようやく気がついたのか、しかしに顔を向ける。

その表情からあまり好意的な印象では無いことが見て取れる。

「……どうもしませんよ。」

「気分が優れないのでは保健室に行つていいいですか？」

話し方つてここんなのだつたか？と思ひながらも現状を把握する。

このままじゃ逃げられてしまつ。

少し考える素振りを見せ、打開策を探す。

そうか、なら着いて行こつ。

この場はネギに任せれば問題ない。

「なら付き添います。途中で倒れたりしたら大変ですから。」

建前でしかないが、これで断れないはずだ。

長谷川は嫌そうな顔をするが諦めて席を立ち歩き出す。

俺はネギに声をかけてから教室を出る。

少しは話を聞いてくれればいいのだけど。

「なんでわざわざ着いて来たんですか？」

どう切り出そうか悩んでいたところに話しかけられる。

予想外だったけどこれは好機。

心の中で長谷川に感謝する。

「いえ、少し長谷川さんと話がしたいと思いまして。

クラスに馴染めて無い様に見えたもので。」

当たり障りの無い話から入る。

教師としては普通の行動だと思つ。

でも今はここまではしないのか？

よくわかんないが、それでも放置はできない。

「そうですか。

けど私なら大丈夫ですので。

自分から距離を置いているだけですので。」

取り付く島も無しとほの」とか?

「これは難しい。

けど「いつも」のままにしておけないんだよ。

少し詠みながら最善の言葉を探す。

核心を突いてみるか?

「それは周り、この麻帆良自体が異常だからですか?」

普通なはずの自分がまるで異常だと錯覚させられるほどに……。

」

「え……?」

反応があつた。やつぱりか。

長谷川の表情が驚愕に染まる。

それだけ一人で悩んで来たってことだ。

今まで放つておいた教師・・・特に魔法使いは何をしているんだ。

これじゃ職務放棄もいじじやないか?

それから保健室ではなく屋上に行く。

この時間なら誰もいないだろ?から。

屋上に出ればまだ冷たい風が頬を撫でる。

日の光と粗まつて暖かさが丁度いい。

遠くを見つめながら少しの間、静かに風を感じている彼女。

そして少し俯きながらも動き始める風。

ポツリポツリといぼれる言葉のどれもが彼女の心情を物語っていた。

自分が異常だと思って周りに呟わせようとしたらしく。

けど、やはり無理で結局今日まで過いでしてきた。

いつ「」の諦めたのがもわからない。

現実を直視するのに耐えられなくて掛けた伊達眼鏡。

日々ストレスは溜まる一方。

何かすぐらものが欲しくて逃げ込んだネットの世界。

彼女は一つ一つ順を追つて、思い返すように

独り言を呟くかのように教えてくれた。

たぶん、最後の希望とでも思つたんじゃないだろうか。

長い間一人だつたから。

「・・・そうですか。

なら私が保証しますよ。

あなたは決して異常なんかじゃあ無い、と。

まあ、異常の塊である私の言葉は信じられないかも知れないです
が。

けれど、私もここは異常だと思います。

「あなたはその気持を大切にしてください。」
「私みたいな子どもを教師にするなど・・・何を考えているのですね？」

そしてそれを疑問に思わない人々。

どう考へても異常だ。」

「・・・。」

本当に考へが全く理解できない。

こういった生徒を放置しておく学園も

修行に一般人を巻き込む魔法使い達も。

俺の言葉に帰つてくるのは沈黙。

440

もう一度言いますが、あなたのその思いは普通です。

何かあれば私が相談に乗りますので、気軽に話しかけてください。

もう一人で悩まなくてもいいんです。」

これで少しでも気持が軽くなれば、俺はそう思いながら言葉をかける。

俺の言葉にどれだけの力があるのかなんてわからない。

けど、それでも彼女に届いて欲しいと願いながら。

彼女は俯いていた顔を上げる。

その双眸から溢れる涙。

彼女は、静かに、けれどどこか嬉しそうに涙を流していた。

俺はその表情に意図せず元見とれてしまった。

不覚にも綺麗だと思ってしまった。

「ありがとう、先生。

私は普通だつて言つてくれて。

なんか軽くなつた気がするよ。」

俺は言葉を発することができなかつた。

何を話していいかわからなかつた。

それに、長谷川のその顔をずっと見ていきたい。

そう思つた。

少し自分の感情に心惑つ。

これじゃあ、どうが年上かわからない。

そんな自分に苦笑する。

とつあえず、彼女の心が少しでも軽くなつたのでよしとする。

もつと気の利いた言葉をかけてあげればよかつたんだけど……。

俺にこれ以上は無理だ。

仕方ないよな。俺は生前もあまり交友関係なんてなかつたのだから。

前世を思い出す。

唯一人と言つていい友人。

あいつは元氣だろうか。

何も言わずにこいつの世界に来てしまつたけど、俺のこと忘れていないだろ？

少しは寂しがつてゐるかな。

そんな姿を想像できないことに気がつく。

そしていきなり消えたことに罪悪感を覚える。

「先生？」

長谷川の言葉で現実に引き戻される。

いけないな。どれだけ考えてもわかるはずない。

今生きてるのはいいだ。

もう、会つことも、謝ることもできない。

そのことに少しだけ、寂しさを覚える。

けど、だけど。俺に寂しがる権利なんて無い。

あの世界から逃げたのは他でもない俺なのだから。

「なんでもないですよ。

それじゃ、そろそろ戻りましょうか。

もう大丈夫ですか？長谷川さん。」

俺は「」の世界で確かに生きている。

これは夢なんかじゃがない。

なら今を精一杯生きるしかないんだ。

例えどんな結末が待っていたとしても。

「はい。あ、あと先生。

これからは千鶴つて呼んでください。

「じゃなきゃ返事しませんから。」

振り向かずそのままに立つ彼女。

その表情はさすがまでとは違う、心からの笑みに見えた。

・・・ほんとこ、うちのクラスの生徒は。

みんな強かといふか、なんといふか。

勘弁してくれ。

「プライベートでなういーです。

しかし学校では勘弁してくださー。

一応教師と生徒なので。」

「冗談ですよ。

本当にありがとうございました。」

一杯食わされたなあ。

最後に頭をさげながら礼を言い、歩いていく彼女の後ろ姿を見ながら

ただ漠然とそう考える。

ま、彼女に對してはこれでいいかな。

魔法に気づかなければいいんだけど、気づいたらうんなんだよなあ。

頭はきれるみたいだし。

ほんのちよつとだけ、その場に留まつ田を開いていく。

風を全身で受け止めながら田を少しづつ開いていく。

「うし、いくか。」

氣合も入った。

俺はまだまだ頑張れる。

自分の決めたこと、やったことに責任は持つぞ。

それぐらいはしなきやつまんない。

そんなつまんない人間にはならない。

それがせめてもの償いだ。

結局はこいつらの血口満なんだけどね。

夜。

まだ肌寒いが、そんなことは気にならない。

二人の子どもが対峙している。

はるか上空から眼下のそんな光景に目を向ける。

俺ともう一人・・・

「どうなるかね。」

「さあ。僕としては戦えないのが残念でならないよ。

せめてそれなりに楽しませて欲しいものだね。」

最近性格に難がある氣がする俺の最初の従者。

こんなにバトルジャンキーじゃなかつた氣がする。

フュイト曰く俺のせいらしいが・・・。

「初めからその素質はあつただろ・・・。」

「何がだい？」

「いや、何もないけどさ。」

怪訝な顔でこいつを見つめてくる白髪。

ほんとに変わったな、フュイト。

いい傾向、なんだろう。

最近は毎日を楽しんで生活しているみたいだ。

チャチャゼロと仲がいいのはお互いに通じるものがあったからだろう。

・・・完璧戦闘狂つながりだらう。

仲がいいのは構わないが、俺は巻き込まないでくれ。

戦いつて好きじゃないんだ。お前らとは違つてな。

形勢は明らかにネギが不利か。

勝てる要素なんか一つもないんだけどさ。

なんか話してる様子だが、ここからは何も聞こえない。

次はもつと近くで見るか。

遮断結界を使えば魔力漏れないし田にも映らないだろ。

二人・・・ネギとエヴァさんに近づく人影が一つ

俺の視界の端に映る。

やつぱり、来ちゃった、か。

「あ、アスナに吹っ飛ばされた。

鼻血出でるし。

折角さつきまでいい悪役してたのに・・・。」「

「プツ、アハハハツ！

あの真祖が一般人に障壁破壊されて鼻血？

何の冗談だい？

これが見れただけで僕は満足だね！！」

フェイトが腹を抱えて笑っている。

・・・ほんとーにいい性格になつたなあ。

俺はどこか遠くを見るよつた田でフェイトから田をやつす。

現実に田を向けたくない。

けどそんなこと言つてる場合でもない。

あ、エヴァさん逃げた。帰つたら文句言わなきや。

折角アスナに氣をつけるつて言つたのに。

なんか無駄に疲れた。

俺はため息が出るのを止められない。

次はタカミチと学園長が来るな。

エヴァさんが本氣で潰すとわかれば、多分焦つて止めに来るだらう。

それは俺が止めなければならない。

中途半端は何も生まない。

大体利用しようとおきながらそれは都合がよすぎる。

それに、ネギをナギの息子としか見ていない。

特にタカミチはね。

たまに俺もそんな懐かしそうな田で見てくるのがなんとなく気持悪い。

あの一人を止めるここになつたらきれそつだな俺、と思つ。

なんとか冷静さを保つておきたいが。

手札は・・・切らすには無理か?

最善は切らないことなんだが・・・。

まあなるべくにしかならないか。

思考は加速する。

最善の結末を思い描きながら。

とにかく、やれるひとばかりぶやるか。

ネギ、自分はまだなんだと気づけ。

お前はこんなレベルで燻つてこようやつじやない。

いづれ俺さえも越えられるだらう。

だから、今日は呑きのねられて來い。

アスナ、お前は折角手に入れた平穏なんだ。

それを自分から捨てるなんて。

この戦いで思い直せ。勿体無いなんともんじやないぞ。

この世界は、お前にとって特に厳しい世界だ。

俺は心の中をひびく。

『あれはしないけど、そつぬかずにはこられなかつた。

次の日は朝からとても奇妙な光景を見るに至った。

原作はどうだったかもう覚えていないが、とにかく落ち込んでいるネギとそれを励ますアスナ。

昨日のことだと思つが……。

「ネギに何かあつたのですか？神楽坂さん。」

「あ、アリア……先生。

実は昨日桜通りで……」

「わーーー・アスナさんーー！」

「なに?..」

ネギがアスナの言葉を途中で遮り、引っ張っていく。

そんなに俺に聞かれたくなかったのか?…と思ったがネギのことだ。

きっと俺に心配かけたくないとか考えてるんだろうつ。

魔法が使えないからな。表向きは。

「…、兄さんー。」

「どうした。」

いきなり言葉を掛けられたので少し素っ気無い返事になってしまつ。

悪いネギ。

「え、あの、その……。」

「どうした? はつきりしないな。

なにか失敗でもしたのか?」

理由はわかってる。けど聞いておかないと変だから。

わかつてゐつてのも動きづらい。

「や、やつぱりなんでもないですーー。」

「あ、じい、待ちなさいー。」

セツニヒテ駆けて行くネギとアスナ。

朝から走る元気はあるんだな、と現実逃避。

いかんな、どうも落ち着かない。

焦つてるのか？たぶん違う。

少しじれつたいだけだ。

・・・同じような意味な気がする。

だめだ、頭が働かない。

少し深呼吸をしようと立ち上がる。

九月一〇

「おはよう、アリア先生。」

•
•
•
?
!

やば、苦しい！

思わず息を吐くの忘れた！！

「ゲホッ、えと、どうやら今までしおりか?」

田の前にはどこかで見たことある美少女の部類に入るだらう人。

頭の隅に何か引っかかるつてはいるが、全く思い当たらぬ。

仕方なくたずねる事にした。

にしても、どこかで……。

「……いや、もう忘れたのかよ！

長谷川だよ、長谷川千雨……！

あ、やべつ……。

ああ、長谷川ね。

・・・え？ 眼鏡してない？

え？ なんで？

更に混乱する思考。もう頭から火が吹きつい。

「いや、

「いや、今現在思いつきつ敬語抜きなのですが。」

「やいかよーあと思慮分別つて言えーーー。」

「うひでもなれ。

「うなじややけだ。

もつ今は疑問をぶつけるしかできぬつもない。

・・・猫被つてたんですね。」

「長谷川さんですか。

「ちつ…まあここ。」

「逃げましたね。」

「逃げてねえよつー。」

なんか漫才してゐる気分になつてきた。

そろそろ落ち着いてきた。

頭もほんの少しほ回る。本題といへば。

「すいません、あまりにいきなりだったので少し取り乱しました。

それでどうしたのですか？

変わりすぎて現実逃避したぐらいなのですが。」

「……ちよっと、がんばってみよつと思つただけだ。

もつ自分を偽りたくなかつたからな。」

なるほど、やつこいつとか。

いい方向に向かつてゐるのかな?

なんにせよ、

「わづですね。

私も今の長谷川さんがいいと思ひますよ。

可愛い顔してゐじやないですか。

隠していろほつが勿体無いです。」

本当にやつかった。

これで彼女の生活も変わるだろ。

異常は感じながらも、今までよつはまじこなると信じたい。

「・・・サンキュー。

またなんかあつたら相談させてもらひや。

「はい。こつでもいいや。

ちよつとしたことかもしれない。

けれど彼女にとつてそれはとても大きなことだったんじやないか、
と囁く。

セントの「サンキュー」って言葉。

今まで生きてきて一番嬉しかったお礼の言葉かもしねない。

それほどに嬉しかった。頬が緩む。

何気ない言葉だけど、教師つて楽しい職業だと思わせねば十分な
言葉だ。

これからも頑張れる。不思議とそんな気分にさせてくれる。

わざと、気張って行きますか。

その日は教室が少し騒がしかつた。

話題の中心は勿論彼女だ。

本人は皮肉っぽい対応だがその反面、表情は嬉しそうだ。

みんなも照れ隠しだとわかつていいもよう。

そんな光景を見るとしみじみと思う。

(本当にいいやつらばつかだよな)

途中で目が合い、ワインクされた時はこっちが顔を背けた。

だつて直視できなくくらい綺麗な笑顔だつたんだもの。

次に目を向けると、額に青筋が浮かんでたが。

んなもん無視だ無視。

今日日の中学生は悔れないな。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼。ある生徒の心情とネギの成長に向けて（後書き）

はい。

こんな感じになっちゃいました。
原作とかけ離れてるわけではないと思つたのですが・・・どうでしょ
う。

やつぱり壊れてるかも。
でも気にせず突っ走ります。
すいません。

次は吸血鬼編の大変な部分だと思います。
ネギはどうするのか。

学園長とタカラミチは？

どんな展開でも楽しんでいただければ幸いです。

そろそろリアルが本腰入れて忙しくなってきました。
少しペースが落ちると思いますが、そこは大田に見てやつてください。

九月あたりが一番きついかな?
隙を見て（表現変ですが）投稿しますのでどうか暖かい目で見てや
つてください。

さて、皆様、また次話で会いましょう。
Good night..

第拾陸話 舞台（前書き）

一曰おきの更新です。

難産でした。

そしてはつきり言います。

たぶんおもしろくありません。

主人公を裏方にさせるのが難しい・・・。

スランプかな？

次の話はもつとまじな話をのせられるよつて頑張ります。

茶々丸と相対するネギとアスナ + 。

攻撃するかとも思ったが・・・ちゃんと自分で考えて行動できるみたいだ。

他人に流されないで自分で考え動くつことは大事だから。

俺は目の前の弟の成長に頬が緩むのを感じる。

原作とは違う、しつかりとした自分の意思を持つているネギ。

その目に宿るのは確かな決意の光。

この表情は物語では麻帆良祭あたりで初めて見た記憶がある。

こうなったネギは、恐ろしいほどの速度で強くなる。

俺は自分の考えに自信があった。

理屈抜きでそう感じたから。

これは・・・化けるぞ。

もつともつと、経験を積んで

俺なんかよりも強く

そして優しくなれ、ネギ！！

第拾陸話

舞台

長谷川が変わった。

ただ単に眼鏡をつけてこなくなつただけだ。

けれど、それは彼女にとつて非常に大きな一歩だつたんじやないか。

少なくとも俺はそう思つ。

前向転じ、まっくじと歩き出した彼女はさうともう

簡単には負けたりしないだろつ。

その強さを見せてもらつた。

俺も見習つべきなんだろつな。

エヴァさん学園長に呼ばれた。

あいつと桜通りの話だらけ。

ネギの性格とエヴァさんの現状を考えたらどうなるか

組織の長ならそれがわからないはずもない。

呪いの所為でこの地に縛られているエヴァさん。

そこに呪いをかけた張本人であるナギ・スプリングフィールドの息子一人が来る。

その片方は母親似で魔力を感じられない。

ならエヴァさんが狙うとしたらネギの方。

確実に呪いを解こうと思つてゐるならどうするだらけ。

だから俺をエヴァさんに預けられたのだし、監視もしたかったのだ
るづ。

今は共犯だけだ。

十五年、ずっと中学生をやられたHヴァさんにしてみれば「のチャンスを逃すなんて

はながら選択肢がないだろう。

ならどうなるか。

Hヴァさんは絶対に動く。ネギの血を求めて。

止めなかつた理由はネギの経験のため。

封印をされているHヴァさんなら打つてつけの相手だと思つたことだ
る。

少なくともいい勝負にはなる。そう思つたはずだ。

学園の先生とかでは敵としては不十分。

悪役に徹することなんてできるはずもないから。

なら元々その役として十分な相手を用意すればいいだけ。

それがHヴァさん。

あくまでいい勝負、をさせたいのだらうが。

だけどHVAは真祖といい勝負なんでしたら、例え封印状態だったとしても

調子に乗る」ことは田に見えてゐる。

自分は真祖とも戦える。自分は強い、と。

果たしてそれがネギの為になるのだろうか。

もし、本当にネギのことを考えているのであれば

上には上がる」と理解せらるべきなのではないだろうか。

まだ九歳の修行中の魔法使いに何を期待しているんだ。

ネギは確かにかの英雄の息子だ。

だけどネギはネギだ。お父様とは違う。

失敗を繰り返して、それでもめげずに、負けずに成長できるのがネギだ。

その性質はお父様とは真逆。

なぜそのことがわからないのか、疑問に思ひ。

今回は観客に徹してもいい。

何があつても、止めさせやしない。

そちらの都合なんか知らない。考えたくもない。

俺はネギが成長できればそれでいい。アスナに現実を知つてもらわ
ればそれでいい。

どじりが正しいか、なんて興味無い。

俺は俺の信じた道を進ませてもらひ。

まずは自分達の矛盾に気づかせてあげます。

学園最強とその右腕さん。

「ハーハー。」

「ハーハー。」

周りを見渡せば猫、ネコ、ねこ。

ここが茶々丸行きつけのネコ広場か。

めちゃくちゃ和むのですが。

ネコ好きの俺からしたらたまらない。

「ハーハー。」

ネコを一匹抱き上げ、顔を上に向けながらネコ語を話す。

俺の特技の一つ、鳴き真似だ。

結構似ている自信はある。

そのまま座り込み、膝に乗せてやるとそのまま丸まつてくつろぐべネ
口。

人慣れしてるなあ。

ここでネギ達に襲われるのだが・・・どうなるかな。

一応後をつけときてはいるみたいだが。

「ネ」の鳴き真似、お上手ですね。」

「そう? 結構似てる自信はあつたけどさ。

「こしても慣れてるね。」

ゆつたりとした時間を過ごす。

茶々丸は横でネコに餌をやつている。

「の光景は絵になるな。

餌をやる口ボに集まるネコ。

いつも思ひがけず、茶々丸って既に口ボの域を越えてるよね。

ネコに餌をやるプログラムなんて入っていないだらうし。

「茶々丸つても、口ボじやないよな。

自立行動してるし。」

「私はガイノイドですので。」

「わうじやなくてさ。

ネコに餌を『やる』より『プログラム』されてるって訳じやないだろ
?」

一応聞いておいたかと思ひ。

もしかしたら、ネコ好きな作者だったかも知れないから。

「私にそのようなプログラムはありませんが。」

「なら、なんでネコに餌を『与えてるんだ?』

プログラムに入力されていない行動をとつてる茶々丸。

既におかしいと思わないか?」

「それは・・・」

考え込む仕草をする茶々丸。

彼女はもうこの時点で心つてものを持っている。これは確定。

そりでなきや、この行動について説明できない。

理屈や理論の範疇を越えた存在。

それが茶々丸、お前だ。

「そんなに深く考えなくていいと思つ。

んー・・・人が今の茶々丸と同じ行動をしててもあまり疑問を持たないだろう。

理由、わかる?」

「いえ、わかりません。」

「難しく考えなくていいさ。

それがロボットと人の違いだ。

心を持つてるか、そりじゃないただの物か。

ただそれだけの違いなんだ。

だから茶々丸はもうロボでもガイノイドでもない。

ある意味、人智を越えた存在と言つてもいい。

人の心を持ったガイノイド。

人でありながら人工物もある。

凄い存在だ。俺は茶々丸を物として扱うことはできないけどさ。

ネギ達にも聞こえているだろ？

無闇に攻撃させないための牽制も兼ねてている。

勿論全て本音ではあるけどね。

そろそろ出でてくる頃か？

茶々丸は興味深そうな顔で見つめている。

表情はあまり変わらないけど、田でなんとななくわかる。

たぶん、自分が理解できないんだろう。

今はまだわからなくていい。

あいつといつかわかる日が来るや。

まだ二年そこそこしか生きてないんだしね。

「考えすぎないでいいよ。

茶々丸は茶々丸なんだから。

茶々丸らしくしてればいいだけ。」

「私らしく・・・ですか。

わかりました。私はいつも通りに行動します。」

「それでいいや。

わへと・・・おーい、ネギー。そんな感じじゃないで出て来ーい。

「

あまつこ出でこなこから呼ぶ。

そこはじめて気づいたのか、茶々丸は警戒体制に入る。

出でたのは、ネギとアスナと・・・+。

やつぱり来たか。

ネカネさんから手紙来てないけど、俺のも捨てたのか?こいつ。

わへ、どんな行動をとるのか、見やせてもいいつよ。

成長してるとか・・・それとも。

「兄さん・・・いつから?」

「最初っから。

魔力ですぐにわかる。」

でかい魔力が近くで「ひらり」とすれば、ねえ。

そんなことばざりでもいい。

お前の目的は茶々丸だろ？

俺は少し下がると、向き合いつ形になるネギと茶々丸。

アスナは何か言いたそうな顔で睨んでくるが「気がかないふりをする。

「茶々丸さん・・・僕を狙うのを止めていただけませんか？」

少し考える素振りを見せるが、構わずに口を開く。

俺に聞かせたくなかつたのかね。

「どうせよ、俺は知つてゐる。悪いなネギ。

茶々丸は気にせず、構える。

応戦する気満々だ。

「すいませんが・・・マスターの命令は絶対ですので。

少し油断しましたが、お相手いたします。」

「だから言つただろう冗費!

とつととやつちまおつぜーーー!」

カモ、やはりこんな性格か。

これは少し話しあつ必要があるな。

頼む、ネギ。早まるなよ？

心の中で願いながらネギを見る。

茶々丸の返答を聞いて俯けていた顔を上げる。

その目には先ほどまでの迷いが無くなっていた。

「力モ君、少し黙つて。これは僕の問題なんだ。

僕は僕自身で考えて行動する。

後悔しないように。

僕は、茶々丸さんに攻撃は出来ない。

例え少しの間でも、僕の生徒なんだ。

教師としても、僕個人としても

茶々丸さんは攻撃したくない。だからしない。」

「あ、兄貴？」

これは・・・。

思つた以上に成長してたみたいだな。

つここの前まで落ち込んでたのに。

何かきっかけでもあつたのか？

いや、それだけじやないはずだ。

やつぱりネギは頭がいい。

俺の何気ない言葉もしつかり自分で考えて、自分の力にしてこる。

俺は想像を遙かに越える成長を遂げているネギに素直に驚く。

同時に嬉しさもこみ上げてくる。

唇の形が歪むが、俺はそれを元の形に戻せない。

男子二日会われば刮目して見よ、とはよく言つたものだ。

ネギは二〇の数日、ただひたすら悩んでいた。

今まで兄から聞いた幾つもの話。

そこに攻略の糸口が無いか。

これまでに何度も助けられた兄の言葉だ。

きっと今回も、どこかにあるはずだ。

ヒントとなる言葉が必ずどこかに。

そう考えていた。

悩んでいる途中で山に迷い込んだことがあった。

そこで会ったのは長瀬楓。3-Aの忍者だ。

色々な話を聞かせてもらひった。主にサバイバル関連ではあつたが。

でも新鮮な話でとても興味を持つ。

最後には励ましの言葉までかけてくれた。

元気が無いのがバレバレだったのか、とネギは苦笑する。

けどいしきつかけにはなつた。

結局人は自分で考えて自分で動かなきゃいけない。

カモ君には悪いけど、まずは話を聞きたい。

それをしてからでも遅くないはずだ。

彼女達も麻帆良女子中等部3・Aの生徒なんだから。

少なくとも、いきなり攻撃なんてできない。

それをしてしまったら、僕はきっと後悔する。

だから。

茶々丸の行動を尾行しながら見て、さらにその思いは強まる。

(こんないい生徒を攻撃なんて、出来るはずないじゃないか。口ボ
だけど。)

ロボットなのはカモに言われて初めて気づいた。

だけどそんなことは些細な事象だ。

ネギの決意は固まつた。

誰にも流されずに自分の意思で決めることができた。

この違いは大きい。

飛躍的な成長を遂げているネギ。

そのことに本人が気づいていないのは更にほんの些細なことだった。

神楽坂アスナもやはり悩んでいた。

エヴァンジョリンがまさか吸血鬼で、ネギを襲おうとしてる。

どうすればいいか、なんてわからない。

つい最近まで普通の女子中学生をやっていた彼女にわかるはずもない。

そこに来たのはあのオゴジヨ妖精のカモ。

なんの冗談かと思つ。

カモとネギなんて、洒落になつていない。

そしてパクティイオーがどうのこのい。

意味がわからない。その契約方法も。

キス? このがきんちよに?

正直いい加減にして欲しかつたしキスなんて出来るはずもなかつた。

ただでさえもやもやしてゐんだ。

するならアーツと・・・なんて少しでも考えた私はバカだ。

結局、何も考へがまともないままに茶々丸を尾行する」とになる。

茶々丸を見て思つたこと。

(めつちゃいい人じやない。ロボだけど。)

カモは攻撃をして倒しちまえば早いと言つた。

けど、それって間違つてゐると思つ。

大体クラスメイトを攻撃なんてできるはずもない。

ロボなのは初めて気づいたが、それでも気持は変わらない。

隣にいたあいつには言いたいことがあったが。

睨みつけるが全く効果なし。

少しイラつと来る。

けど、私の気持はわかつた。

ならネギを手助けくらいはしよう。

アスナも自分で考えるようになっていた。

それはアリアとの出会いの所為もあるし、ネギとの出会いの所為でもある。

今までなら、何も考えずに突っ走っていた。

けれど一人の魔法使いとの出会いが彼女を成長させてくる。

この事実に気づいた者は今のところ誰もいない。

「後日家まで訪ねますので。そこで話をつなましみやう。

「ヴァンジョンさんこそお手伝いください。」

「……はい、わかりました。」

「行きましょう、アスナさん。カモ君も。」

そう言つてその場は立ち去る。ガキ達。

それを見送つて、思わず呟く。

「成長してゐるな……ネギ。」

「アリア先生？」

「ああ、いや、なんでもないよ。

ただ弟の思わぬ成長に嬉しくなつただけだ。」

俺は頬が緩んでいた。

これで経験が加われば・・・。

そつ思うと先が楽しみでならない。

まだ甘さがあるナビ、それがネギのことじいさもある。

理想を抱きすぎるのはよくない、ナビ。

ネギなら救つてしまいそつなんだよな。

敵も味方もひつくるめて全て。

無理だとと思つてゐるけど、それでもなんとかしてしまつ。

やつ思えるんだ、ネギを見ている。

ほんとの英雄は、お前みたいなやつの「」とを言つんだと思つ。

お父様ではなく、赤き翼でも、俺でもなく。

この物語の主人公、ネギ。

お前だ。お前なんだ。

俺は弟の更なる成長の為に画策する。

その計画の邪魔はさせない」と。

今一番考えなければいけないのはそこだ。

「HUGOさんは徹底的に敗北の一文字を刻み付けてあげて。

「わかった。だがジジイビもが止めに来るぞっ。」

「そつちはなんとかする。だから頼むよ。

きつとあのオロジヨガいたらんことをするから気をつけたね?

アスナとネギは近づかせちゃダメだから。」「

「僕は?」

お前は観戦してていいよ。

どっちみち動けないだろ?つ。

手札は見せたくないしな。

後は・・・もうないか?

「ぐれぐれも殺さないでよ？」

「わかつてゐる。女、子どもは殺さん。」

「僕はある」とないのか・・・それはそれでつまらないね。」

「少しばし大人しくしてろ、戦闘狂。」

「・・・最近扱いが酷くないかい？

確かにその直覺はあるけど。」

「うあうあしてるのが田に見えてるんだよ。

タカミチとか学園長と戦いたいとか思つてるんだろう？

武者震いしてるし。

この件が終わつたら魔法ありで戦闘してやるから今回は大人しくしてなさい。

「約束だよ？」

「破ればどうなるか……。」

「もし破つても全力なら負けん。」

「それに破るつもりも無い。」

「……少しイラつときたね。」

「覚悟しどきなよ？」

墓穴掘つたがまいい。

それで今回手を引いてくれるなら安いもん。

ネギの成長のためだからな。

アスナの今後のためもあるけど。

「ケケケ、 楽シミダ。

切り刻ンデヤルゼ。」

「 「お前がいたか。」

お前も自重しろ。

後でいっぱい戦闘かまつてやるから。

夜は更ていく。

真祖と道化は舞台を整え終わる。

舞台に上るのは勇者と姫。

話の大筋はできた。

後は役者の演技にかかるつている。

この舞台の脚本は道化がつくり

真祖は道化と共に演技をし

それにつられて舞台上に出演する勇者と姫。

結末は、フィナーレを迎えるまで誰にもわからない。

時は刻一刻とその結末に向けて近づいていく。

そして、舞台はついに開幕を迎える。

観客が三人の舞台が、満月の夜の

静寂に包まれた麻帆良で正に始まるつとしていた。

第拾陸話 舞台（後書き）

なんか単調に見えてしまつ・・・。

次は話の一番重要部分になりますので少しあ面白くなると思います。
遅くなつてゐるのに本当に申し訳ない・・・。

気分転換でもしてきます。

第拾漆話 真祖の実力、命の危険、乱入者、そして終幕（前書き）

皆様お久しぶりです。

一週間近くあいてしまって申し訳ありません。

いや、持病舐めてました。

小さい頃から喘息なんて持つてるとこの体が憎い。〇ーＺ
仕方ないんですけどね。

アレルギーもあるなんて不便な体ですよほんっと。

パソコンを開かない日が四日くらいありました。が、なんとも久しぶりですね。

何年振りでしょうか。

違和感が凄かつたです。

今回は吸血鬼編の大変な部分です。

次回で完結します。

バトルは・・・あまりないです。
駆け引きの方が多めです。

次は三日以内に投稿してみせる・・・。

第拾漆話 真祖の実力、命の危険、乱入者、そして終幕

「・・・黙れよ。」

俺はいい加減堪忍袋の尾が切れていた。

目の前にいる人間に対してだ。

さつきから聞いてれば、納得なんてできるものじゃない。

そんなことはハッキリ言つてどうでもいい。

英雄になりたきやなればいい。

立派な魔法使いになりたきやなればいい。

俺には関係無い。

だけど、何故そこに一般人を巻き込む必要があるのだろうか。

俺には到底理解なんてできない。

だから俺は立ちふさがる。

自分の思いを、決意を、踏みにじられるのが我慢なら無いから。

俺を退かせなければ、それ相応の理由を言ってくれ。

じゃなきゃ絶対に退かん。こっちにも譲れないものがあるんだ。

第拾漆話 真祖の実力、命の危険、乱入者、そして終幕

「さて、計画通り進めばいいんだけどな。」

「そうだね。まあ計画にイレギュラーは付き物だよ。

いつでも動ける準備はしといた方がいい。」

今回はフュイトが潜入とかでよく使つてい隱遁術を駆使して近くで観戦している。

そして、視界に映るのはネギとエゴマさん。

アスナは後から来るのか・・・。

フュイトの言ひ通り準備とかなきやな。

「後は無粋な乱入者達についてだが・・・。」

「見てる・・・ね。

「うひすけむ氣づいてないけど。」

「そりゃお前さんの本気の隠遁術ですかねえ。」

「その辺は信用してる。」

「嬉しこ」と言つてくれるね、全く。」

歴戦の兵ですからね、あなたは。

その実力が無きや赤き翼が英雄なんて呼ばれる』とはなかつたらう。英雄つて呼ばれるものの条件には『強敵がいる』こと』つてのも重要なんだから。

二流の悪党倒したといひで英雄なんて呼ばれない。

乱入者については・・・動きを見せたら、かな。

あつちの様子も気に掛けなきやいけないから暢気に観戦なんてできない。

(ヒュアさん、信頼してゐるからね。)

ネギ達はヒュアさんに任せて、自分の役割に集中する。

俺は道化。

人を化かし、自分の道を進む。

この神聖な舞台に乱入者は近寄らせない。

この物語で言つなら、俺は警備員なんだから。

「真祖が中々にいい悪役しているね。

君の弟の魔法と同程度のものを撃つて遊んでる。

プライドを叩き折るつもりかな。」

「だろうな。 そう頼んだし。

そろそろ本氣を出すとは思つんだけど・・・お、やつぱり。」

「かなり魔力を練ってるね。

普通なら死んでもおかしくない量だよ、あれ。」

エヴァさん殺すことはまず無いからそれだけネギが粘つたってことだろ？。

こんな感じでも弟の成長を見られ内心喜ぶ俺。

だけどあまりのんびりはしていられない。

そろそろ、動く。

「・・・ここで来るか。」

「あっちが動いたね。」

余程焦ったと見える。行くの?」

「ああ。なんかあつたら頼むわ。

自分の仕事して来る。」

フロイトから「氣をつけて」と言葉を背中に掛けられながら動く。

友人の成長にも嬉しくなるが、今は氣持を切り替えて真剣モードに入る。

邪魔は・・・せん。

学園長は焦っていた。

エヴァとネギの戦いはもつと拮抗すると想っていたから。

だけど蓋を開けてみれば、エヴァに優心など無くネギとの圧倒的な力の差を見せ付けていた。

そして、本気の魔力の奔流に流石に動かすにはいられなくなる。

(それはちとまづいぞエヴァ！)

そして近づく道化の気配には気づけないでいた。

タカミチも同様に焦っていた。

どこかで、ネギならなんとかしてしまひ。そう思っていたから。

だけどひつもならないほど経験と実力の差がエヴァとネギにはある。

あくまで傍観しようと思つていたが、エヴァの本気を肌で感じ、危

険信号が鳴り響く。

あれは止めなきやましい。

そしてその焦りからか、やはり道化の気配に気がつけず。

(やつすぎだエヴァー間に合へーーー)

焦った学園のトップ一踏み、立ちはだかるのは

「ど」へ行くのですか、お一人さん。」

道化、アリア・スプリングフィールドであった。

「どこへ行くんですか、お一人さん。」

正面から一人を見据える。

俺の笑みは月光にさらされ、少々不気味に映っていることだらう。

だけど今はそのくらいが丁度いい。

あくまで笑みを絶やすことなく一人を見つめ続ける。

呆気にとられている一人。

先に気を取り直したのは・・・学園長。

「セーをどくんじや。」

何故ここに、とは聞かない。

そんな時間はないのだろう。

俺も無駄な会話などしたくないから好都合だけど。

それにしてもどけ、か。

「なぜですか？と今まで傍観に徹してきた一人に私は問いますね。」

聞きたこりせよこゝにあるんだ。

「ひるといふ顛を追つて説明してもいい。

それで納得できれば退いてもいい。

まあ、聞に合わないとは思ひたがい。

「いこからソレをじくんだ。」

今度はタカミチ。

少し殺氣を出して威圧していく。

ポケットに手を入れて既に臨戦態勢に入つている。

けどやんな」とじやあ、どかない。

どこでなんかやるものか。

「嫌ですね。

「こいつ通りたければ二人の考えを話すかもしくは・・・」

言葉を言い終える前に顔の横を拳圧が通り抜ける。

背後の木が折れるような音がしたが些細なことだ。

やはり聞く耳持たないか。

わかつてはいたけどなんかイラッと来るね。

あくまで表情には出さず見つめ続ける。

「もう二度目はない。」

「そこをどうぐんだ。」

さらに威圧感が増す。

けど怯まない。

怯んでなんかいられない。

「怖いですねえ。

ああ、それとさつきの話の続きですが・・・。」

俺はあくまで自然体を貫きながら、能力の一部を開放する。

ここでは使うのは瞬間移動。

一瞬で一人の背後に回っこむ。

「話やないのであれば力ずくでどうだ。」

そしてあいつたけ殺氣をぶつかる。

首筋に換装した一ふりの剣をそれぞれに押し当てながら。

動いたら切る。

その意思も込めて。

勿論そんなつもりはこれまで無い。

けれど『交渉』ってのは氣を抜いたほうの負けだ。

脅迫とも言ひ方だ。

「「なつ・・・。」」

「話やないのなら」」から先へは行かせません。

観客は黙つて見ていてください。

もつ一度聞きます。

何故、今更止めるのですか？」

三度田はありませんよ、お一人さん。

タカラミチの言葉を借りるなりの言葉しかない。

俺はそう思ひながら冷めた田で一人を見つめる。

あくまで笑顔は絶やさず」。

「なんの」とかの「……」

「そんな嘘が通じるとでも？

HUGOさんのことを知つて事前に止めなかつたのは明らかに不

自然じゃないですか。

なら知つてて止めなかつたと考えるのが自然です。

そんなこともわからず組織のトップなんて務まりませんからね。

理由、話わないなら私の推測でも話しまじょうか。」

間違つてるなら訂正入れてくださいね、と念押し。

二人が息を飲むのがわかる。

「ううう霧囲氣に飲まれてくれるのはありがたい。

勝手に自滅してくれそつだから。

「まず大事なのは、目的ですね。

今回エヴァさんを止めなかつた理由は簡単。

ネギに経験して欲しかつたのでしき。

魔法使いとの戦闘を。「

俺の言葉を真剣に聞く二人。

そりやつて大人しく話を聞いてくれると楽だ。

「そこには私も賛成です。

実戦とこゝもの経験するのほとても大事な」とですから。

ただ、お一人と私の考えが違うのは次です。

どんな経験をさせたいのか。」

静寂に包まれた森の中で、響くのは俺の声のみ。

エヴァさんもネギと話しているのかな。

やたら時間をかけているみたいだ。

少し向こうのことも考えてしまつが、今は自分の役割を全うしなきゃならない。

エヴァさんを信用して田の前に集中する。

「おー一人は恐らへいつ考えたでしょー。」

あくまでいい勝負をさせたい、と。

それもいい経験になることは確かですよ。

けど、私はそれ以上に大切なものをネギに学んで欲しい。
だからいつも考えました。

完膚なきまでに叩き潰してもらおうと。」

「そんなどしたらネギ君は潰れてしまつーー。」

タカミチが声を荒げる。

けれど俺は氣があることなく続けたまでもいいつ。

「そうでしょうか？」

私は後のフォローでどうにでもなると思こますよ。

大体、たかだか九歳の子どもが真祖の吸血鬼に勝てると思つていることが間違いなのです。

万が一勝つてしまいでもしたら、そこでネギは懶心してしまつてしまつ。

僕は強い、僕は凄い、と。

変な自信を持つと後が怖いと思いませんか？

特に、私達の場合には命を狙われることもありますから。

懶心なんてしていたらあいつに命を落としてしまうことになりますね。

そうだ。

英雄なんてものは、それだけ多くの人を救つたといつ証。

だけど裏を返せばそれだけ多くの敵がいるってこと。

お母様を恨んでいる人もいる。

『災厄の魔女』なんて呼ばれてしまつたのだから。

真実を知らない人の方が多いんだ。

その一人の子どもが、のつのうと暮らせる訳がない。

タカミチもわかつているのだろう。

今は黙つて聞いている。

「ネギには長く生きて欲しい。

そのために今必要なのは中途半端な自信なんかじゃない。

世界の広さを知つてもうひとつ。

自分の小ささに気づいてもいたいと。

それが大事だと判断したから私はエヴァさんに頼みました。

力の差を見せ付けてあげてください、と。」

「・・・それでネギ君が潰れたらどうするんじゃ?」

学園長が静かに聞いてくる。

けどその質問は予想の範囲内。

「その時は仕方ないです。諦めて死んでもらいます。」

「君は!...ネギ君がどうなつたつていいと言つのか!...?」

「誰がそんな」といいました？

大切ですよ。あなた方の思つてる以上に。

けれど、仕方ないじゃないですか。

その程度で潰れるようじやいつか簡単に殺されます。

戦争を経験してきたあなたがそんなこともわからないのですか？

高畠・T・タカミチ。」

「それは・・・。」

赤き翼にいたあんたがなぜそんなこともわからない。

現実つてもんはそこまで都合よく進まないってこと、よくわかつて
るだろ？。

少しイラついてきたのを必死に抑えながら話す。

「それに、あなた達はネギの何を見てきたのですか？」

あいつは確かに天才です。

ですが、ネギの力の根幹にあるのは努力と負けん気。

どんなことにも負けず、努力して乗り越えてしまう。

それがあいつの怖さです。」

「 「 · · · 」

「なぜそのことがわからないんですか。」

「 · · · いい加減、あいつにナギを重ねるのは止めるよ。」

「それは違う！」

学園長は黙り込む。

その表情は、思い当たる節があるつてどこか。

タカミチにはいい加減イラついてきた。

「ビニが違う？

違うところなら何故ネギを見ていい。

お前らの中のネギがどんな人物か言ってみる。

俺の中のネギと比べてやる。」

いい加減頭にきていた。

いつもの一寧な口調が無くなつたことがそれを物語つている。

けど、そんなことは気にしてこられなかつた。

「お前らがネギに何を重ねてゐるかなんてすぐにわかる。」

懐かしむよつな田、時折見せるおかしな行動。

一代田ナギを育てよつとしてゐんだろ?」

やつ考えれば全てに納得がいく。」

ここいらの行動なんか本音を言えばどいつもいい。

ただ、ネギをナギに重ねてゐるのだけは許せなかつた。

ネギはネギだ。

それが何故わからぬ。

それに・・・。

「あんたらが何を考えてるのかは知らないし、知りたくも無い。

だけどあのクラスの生徒達をこいつら側に巻き込むのだけは認められる。

一般人だぞ？俺やネギと関わることの危険さをわかつていいのか？

答える。

「ネギ君のためじゃ。それが何故わからん！…」

学園長の怒声が響く。

何故怒っているのかわからないが、俺は怯まない。

それなりの覚悟はしてきてこる。

「ネギのため？

ならもつと優秀なの連れて来いよ。

裏の世界を知っていて、さらに天才と呼ばれる人たちをな。それだけでネギの生存率は上がるし貴重な指導者もできる。年も近けりや言つこと無しだ。
従者つてのはそういうところから連れてくるのが一番だとそう思わないか？
うちの生徒達が異常な才能を持つてているのは知ってる。
だけどあくまで一般人だ。本職には勝てはしない。」

確かにあのクラスは異常だ。

身体能力、思考速度、理解力、知への探求

他にもそれぞれが一般人よりも秀でている部分が目立つ。
でも、それはあくまで一般人と比べたら、だ。
裏の存在を知らなきゃどうにもならん。

知つてるやつも数人いるが、そいつらだけなら別にいい。

けれどこのままいけば、ほとんどの奴が関わってしまいます。

こじは漫画の世界なのかも知れないが、現実でもある。

なにが起きるかなんてわかんない。

「都合主義は存在しないんだ。

それだけじゃない。

「神楽坂アスナ。

彼女はウェスペルタティアに縁のあるものだろ。

俺を見た時の反応、魔法無効化能力。

・・・十中八九『黄昏の姫御子』だな。」

「なぜ、それを？」

「調べりゃいくらでも出てくんだよ。

それにそう考えたら説明が簡単につく。

俺が聞きたいのはそんなことじやない。

なぜ彼女は記憶がないんだ？」

タカミチと学園長は絶句しているのが見て取れる。

全部知つてたけど、多分氣づく奴は氣づく。

タカミチ、なぜ記憶を消したんだ？

「・・・僕の師匠の遺言だよ。

それを実行したんだ。」

「そうか。それは別に構わない。

彼女が平穏に暮らせるのは俺もいこと願つ。

けどな・・・」「

ガトウの遺言は別にいいと思つ。

それは大事なことだね!」、彼女はここで静かに暮らしていく。

事実そうであり、このまま死ぬまでそつならよかつたんだ。

「今になつてなぜこりから側に引き込む必要がある。

」のまま魔法なんて知らないで一生を終えた方が良かつたんじやないのか?」

「僕は、ネギ君に関わって」ちり側に来るのなり・・・それが運命
だつたと思つ。」

「運命? そんな簡単な言葉で人の一生を決めてんじゃねえよ。

お前は彼女がこちら側に関わらないように努力したのか?

何か行動したのか? してないだろ。

それは運命とは言わない。

必然じゃないか。

ネギがあのクラスに入つて、神楽坂アスナと同室になつたら
どうなるか、そんなこともわからないくらい平和ボケしてんのか?
もし、関わらせんなら記憶くらいい废せ。
どちらかしか選べないだろ?..

中途半端なことばつかしきながら綺麗な言葉でまとめるな。」

黙るタカミチ。

その顔に浮かぶのは迷い。

自分の行動を振り返って、俺の言葉を聞いて
迷っている。

どれだけ崇高な理念があったとしても、彼女達のことを本気で考え
ているとは思えなかつた。

学園長はナギー世をつくりたいだけ。

タカミチにいたつては何がしたいかさえわからない。

その思いも行動も中途半端にしか見えない。

「大体、あのクラスの生徒は関係無いだろ？」

お前は仮にも担任だつたんだろ？

ならなぜ魔法に関わらせないよつに努力しない。

行動しない。

魔法使いつてのはそんなんに偉いのか？

子供の一生涯を勝手に決めていいもんなのか？

命に関わる選択だつてのに、本人の知らないところで

勝手に誘導して。

あんたは神にでもなつたつもりかよ。」

「黙つて聞いてれば好き勝手言いおつて……。

それが最善の選択じゃと何故理解できんのじゃ……。」

「……黙れよ。

いい加減、殺すぞ？」

俺の頭の中で何かが切れる音がした。

最善?

だからなんなんだよ。

こいつはそれが許される人間だとでも言つつもりか?

許されるわけが無い。そんなことがあつてはならない。

自分の道は自分で決める権利がある。義務がある。

それを他人が決める?

ふざけんのも大概にしろ・・・!

「彼女達は死んでもいいと?

仕方ないと？ そう言つ事か？

ふざけんじやねえ！！

お前に何の権利があんだよ！

彼女達は彼女達の道を、自分で決めて歩いていく。。。

それが普通でありますから前なんだよ。。。

お前みたいな奴が決めていいわけがない！！

ありつけの殺氣を込めて心の底から叫ぶ。

ここからの答えはわかった。

尚更にこれを通すわけにはいかない。

彼女達の為に、ネギの為に、そして・・・

なにより俺の為に。

「あんたはここで大人しくしていいもんう。

次に目覚める時は全て終わっているさ。」

首筋に手刀を落とし、一瞬で意識を刈り取る。

こっちの役目は終わった。

後は頼んだ、エヴァさん。

side ハヴァンジエリン

私は、ネギ・スプリングフィールドと神楽坂明日菜に対して
なにか思うところがあるわけではなかった。

まあ呪いが解けるならやつてやうることもない、って感じか。

アリアからこの作戦を聞いた時はそう思っていた。

だが、それも日に日に変わっていく。

最初は情けなく、甘ちゃんでつまらんかつたが、何かをきっかけに
様変わりしていく。

今日の前にいるネギという人物は最初に見た時とはまるで別人。

戦闘や魔法に関して言えばまだまだだが、伸び白は大きい。

まだ九歳だ。

そのことを考えると十分すぎるくらいだ。

「どうした坊や。もう終わりか？」

先ほどからネギ・スプリングフィールドが使う魔法を読み取り
同系統の魔法を、威力、数を圧倒したものを出しプライドを削る。
すでに満身創痍の状態。

それでも尚立ち上がりをしてくる。

「ほ、くは・・・まだ・・・やれ、ます・・・。

あなたも、ほのせことのこちこん・・・

みんな、みんなを、すべつてみせる・・・。

ほくは、まけられない・・・。」

そして真祖を前にこの台詞。

面白い。本当に面白いな、ここでの家系は。

ほのせことなりながら、尚相手までも救おうとこのか?

しかも生徒だからとかくだらん理由で。

自分が死ぬかもしれないこの状況で。

そこにはどれだけの決意が込められているのだらうか。

私にはわからん。

きっと、アリアにもわからん。

だが、面白い。

こいつには人を惹きつける何かがある。

「まだ立ち上がりてくるのか。

なら、最強種である真祖の力、その身にしかと焼き付ける。」

こいつの想いは所詮理想だ。

全てを救う？そんなこと出来るはずも無い。

だが、こいつはそれを薄々理解している。

それでも、その理想を追い続ける。

実に愚かなことだ。

だが、私には無理だ。

それを成そうとするこいつは大バカものだ。

今は何もかもが未熟だが、成長したら面白いことになるだろ？

修行でも見てやるか？

私はそんなことを考えながら魔力を練る。

ありつたけの魔力をつき込んでの闇の吹雪。

ふつうなら死ぬ。

けど殺しはせん。この先楽しみなんだ。

「今はただただ理解しろ。

世界の広さ、最強と呼ばれる者の力を・・・。

闇の吹雪！！」

手をかざし最後の鍵となる言葉を紡ぐ。

体から魔力があふれ出し、それが圧縮されて吹雪となり、坊やを襲う。

直撃は避けてある。

余波によって気絶はするだらうが、茶々丸に任せて安静にしておけばすぐに回復するだらう。

今のうちに血を貰おうか。

私は坊やの首筋に噛み付き、血を啜る。

まだ呪いは解けない。

けど、もう一、一回吸つたら無理やりぶち破れるな。

後は・・・。

「貴様だ、神楽坂明日菜。」

「ネギは？殺したの・・・？」

殺しはせんよ。

呪いも解けていないんだ。

それよりも、貴様はバカだ。

「殺してはいけない。まだ利用価値があるからな。

それよりも、貴様、何故来た？」

「ネギを放つておけないもの。

それにあいつだって・・・。」

ふむ、アリアに惚れたのか？

坊やはないだろ？。

餓鬼っぽ過ぎるからな。

「アリアに惚れたか？」

「な・・・！」

「そんなんわけないでしょーーー！」

「これは・・・まじか？」

なかなか面白ことになつていてるじゃないか。

「まあいい。

それよりも貴様、平穏を捨てるといつのか？

もう一度と戻っては来れんぞ？

死んでも仕方ない世界なのだからな。」

ウェスペルタティア縁の者が何故ここにいるかは知らん。

予想はつくがな。

黄昏の姫御子・・・だつたか？

今こちらの側に戻るなら、確実に狙われるだろう。

勿体無いなんてものじゃない。

それでも、こちら側に来るのか？

私は目で訴える。

平穏の、静かな暮らしの大切さを私は理解しているから。

「わかんないのよ・・・。

何がなんだかわかんない。

けれど無視もできない。

私は・・・バカだから。

考えて、考えて、それでもわからないのなら

自分の思ったようにしか行動できない。

それが私なのよ。」

「死んでも文句は言えんのだぞ？」

「それでも・・・よ。」

そつか。

なら、身をもつてわかつても「うつしかないな。

魔法が効かないと言つても今は一般人。

死の恐怖を刻み込んでやる。

それでも立ち向かう勇氣……」の場合は無謀だが。

それがあるなら見せてみる。

「なら……」で死んでも構わんな？」

「そつ簡単に死んでやるものですか！――」

吼えると同時に突っ込んでくる。

速いが、私にとつて大したことはない。

突き出してくる拳を軽くいなし、投げ飛ばして地面に背中から叩きつける。

神楽坂明日菜の肺から空気が漏れるようなうめき声が聞こえるが無視して糸で縛る。

後は首を徐々に絞めるだけ。

ゆづくりと死へ近づく恐怖を感じるだけだ。

首に手をかけ力をこめる。

「う・・・く・・・」

「どうだ？」これが魔法・・・スプリングフィールドに関わる代償だ。

苦しいか？怖いか？逃げたいか？

今すぐ許しを請えば殺すのだけは勘弁してやる。

「ひつかぬへ。」

人間は逃げ道を用意すれば飛びつくだろう。

心理的な思考誘導だ。

普通ならここで諦めるだろう。

貴様はどうなんだ？ 神楽坂明日菜。

「わた・・・しは・・・。」

「なんだ？ 許して欲しいか？ 死にたくないか？」

「わたし・・・は・・・

ぜ・・・た・い、に・げ・・・ない・・・。

に・げ・た・く・・・な・い・・・。」

やはりこいつはバカだ。

なぜ他人のためにそこまでする必要がある。

なぜ折角手に入れたものを自分から捨てる必要がある。

私には全く理解できん。

「なら死ぬだけだぞ？」

「それ……でも……よ。

あいつは……あいつ……う……は……

ずっと……ひとりで……

こわ……いおもい……するんだ……。

まつりて……おけ、ない……の……よ……。

しかた……ない……じゃない……！

糸を引かれて私の手を掴む馬鹿。

その腕にはいたるところに傷がついている。

「仕方ないじゃない・・・！」

あいつの、アリアのこと考えたら・・・いてもたってもいられなくなるんだから！

私は考えて行動なんてできないのよー

気づいたらもう体が動いてるんだから！！

私は、本当にバカなのよ・・・それで死んだって文句は言えない・
・。

けど、それでもー！

今放つて置いたらきっと、後悔するわー！

そんなの、嫌なのよー！

私の手を首から離しながら叫ぶ。

本気ではないにしても、私の腕を放す力は凄まじいものがあった。

火事場のなんとかか？

そんなことより、こいつ・・・。

やはりバカだ。

大バカもんだよ、貴様は。

死を前にしてもそんなことが何故言える。

理解できん。

けど、少なくとも

覚悟は見せてもらつた。

これから大変だぞ・・・『神楽坂』。

首筋に手刀を落とし、意識を刈り取る。

お前も愛されてるな、アリア。

少し、羨ましいじゃないか。

私は孤独でしか生きられないから・・・な。

「そんなことはないでしょ。」

ふとそんなアリアの言葉が耳に聞こえた気がした。

しかし私の周囲には誰もいない。

自分の都合のいい耳に苦笑してしまつ。

けど、あいつならもしかしたら・・・。

そんなことも考えてしまつ自分がバカラしかつた。

なんだ、私もバカじやないか。

首を一、三度左右に振り、先ほどの考えを頭の隅に追いやる。

だが、そんな希望を奴に持つてしまつた私がいた。

「今日は・・・月が綺麗だな。」

不思議と軽い足取りで帰る。

茶々丸に坊やと神楽坂に任せて。

今日は飲もうか、用でも見ながら。

アリアにフェイト、チャチャゼロも混せてやろう。

笑顔で帰るは不死の吸血鬼。

付き従うメイドが抱えるはこの物語の主人公達。

そして舞台は幕を閉じる。

勇者と姫が勝つありきたりの物語ではない。

この結果が出るのは、翌日。

主人公達が目を覚ましてからだ。

第拾漆話 真祖の実力、命の危険、乱入者、そして終幕（後書き）

今回は見直しする気力すらなかつたです。
もし何かあれば気軽にどうぞ。

次は皆の心情やら今回の件についてのまとめみたいな感じだと思います。

それが終われば・・・ほのぼの挟んで修学旅行だ・・・!
早く書きたい。
書き直しもしたい。
やりたいことだらけです。

ではまた次回お会いしましょう。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤（前書き）

中四日と言つたところですね。
みなさんいかがお過いじりしそうつか。

今回で吸血鬼編は一応終わりです。

次回から「話ばなしにて修学旅行」・・・！

やつとだ、やつとなんだ。

もう修学旅行が「ゴールでよくね？」とか思つたり。
いや、よくないのはわかつてますけどね。
書きますよ。麻帆良祭までは。

次は学園側の反応と日常つて感じですね。
ついに学園魔法使いが・・・！

その次は・・・多分驚きます。
予想外な展開にしたいです。

そういうばいつの間にかPV40万、ユニーク3・5万くらいを越
えていました。

なんか、もう・・・泣きそうつす（、ロガ）
本当にありがとうございます。

感想も一つひとつ返していこうと思つてこますのでどうかよろしく
お願ひします。

とりあえず上手くいったのかな。

吸血鬼編を終えた感想がこれ。

エヴァさんのおかげでネギは一回りも二回りも大きくなつただろう。

アスナは・・・はあ。

問題はこっちなんだよな。

思わず吐いてしまつため息を止める氣にもならない。

世の中つてこんなものなのかねえ・・・。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤

大事なイベントをまた一つ終えた俺は、エヴァさんの別荘で一人が起きるのを待つ。

勿論、今回のこととは素直に話すつもり。

その上でしっかりと答えを出してもらひ。

起きるまではすることもないでの雑談タイム。

「エヴァさん、フロイト、どうだった?」

主語が抜けているがさうと伝わるはず。

この二人は頭がいいからね。

聞いた理由は一人の目にネギはどう映ったのか

それが知りたかっただけ。

フェイトの頭の上に乗つてゐる「ケケケ。」とか時折発する

人形は気にしちゃいけない。

「そうだね。

まず言えるのは、未熟。この一言につきるかな。

まだ九歳だからと言つてしまえばそこまでなんだけど。

後は人間性だけど・・・はつきり言つて至。

あれは持つて生まれたものなの?それとも何かあつたとか?」

「あれは性格だ。

他にも原因はあるんだろうが・・・。

じつ偽りともネギはきつとああこう生き方をやる。

ネギがネギであるかぎり。」

フェイトが聞いたのはネギの在り方。

全てを救いたいといつ理想のこと。

あれは多分、悪魔襲撃は関係ない。

それもきっかけではあるのかもしれないが、根っこにあるのは

良くも悪くも、ネギの優しさだと俺は思っている。

はつやつててしまえば無謀、無理、不可能。

どこかでそう思つていながら、それでも追いかける。

ネギのそんな生き方は、この先どうなるのか。

俺には全くわからない。

前世で有名だったゲーム『運命』の主人公に似ているかも。

赤い『兵』になるのか、正義の味方厨になるのか。

それともまた違った生き方になるのか。

まだ判断はできないかな。

なんにしても、俺の教えられることは全て教える。

色々な見方があることを知つてもいい。

なにより、長生きしてもわないと。

フエイトは俺の返答に対し「ふーん」と興味があるように相槌をうつ。

なんか目が爛々としている気がするんだけど・・・。

「結論から言つと・・・」の先が楽しみ、かな?

「もうと強くなつてもうらつて、いつか闘いたいね。」

「……そうか、お前はそういう奴になつてしまつたのだったな。

すまん。聞いた俺が悪かつた。」

「なんか気に食わない言い方だね……。

」いつなつたのは君の所為なんだつて理解してる?」

断じて違つ。

それはお前に元々あつたものだ。

俺はきつかけにすぎん。

フロイトの返答に思わず心の中でシッ パリ!を入れる。

声に出でなこのはまた責任ゼ!「うづくまれるから。

「やの」とはもひこいつでは。

エヴァさんほひう。」

今度はこれまで沈黙を保つていたエヴァさんに振る。

なんかずっとと考え込んでいたようだけど、なんだろ？

けど、まあいいか、とすぐに愚考を止める。

俺はエヴァさんの考えなんて読めん。

「よし、決めたぞーー！」

「「はー?」」

これまでの話を無視していきなり大きな声でそう叫びエヴァさんに思わず呆けてしまう。

フェイドとハモッてしまつがこれも仕方ない。

はつきり言つて意味不明。

「坊やは私が育ててやる。

うん、決めた。今決めた。

いいだろ?アリア。」

「いや・・・それは別にいいけど、またなんで?」

それだけネギを氣に入つたつてことか?

エヴァさんは突拍子も無いから困る。

・・・俺もあんまり人の「ことじゃない氣もするけどさ。

なんにしても、理由が知りたい。

あの面倒くさがりなエヴァさんだよ?

なんか裏があるんじゃないかと考えてしまつのは

普段のエヴァさんが悪い。うん。

「理由?そんなものの簡単じゃないか。

面白そうだからだ。」

あの坊やが悪い魔法使いの考え方を知つたらどうなるのか・・・。

私にも想像がつかん。

面白いとは思わないか?」

「あー、うん、そうだねー。」

俺は棒読みな返答をする。

フヨイトは「やれやれ。」と言いながらため息。

お前も似たようなものだけどな。

けどそうだった。

エヴァさんはこういう人だった。

なんかもう、どうでもよくなってきたなあ。

でもエヴァさんに教えてもらえるのは好都合か?

知識や経験、環境と三拍子揃つてゐる。

強くなるにはこれ以上無い好条件だよな。

確か修学旅行終わってからエヴァさんに師事してたから、原作よりは強くなれるか。

なにより、エヴァさんがやる気になってくれるのはあり難い。

「ドウデモイイガ、刻ミテエゼ。」

「やめてくれ。」

戦闘狂名殺戮人形にため息を吐くのはこつものことだ。

あれからじまびらかして、茶々丸から起きたと連絡が来たので俺とエヴァさんで話を聞きに行く。

フロイト? パーヒー飲んでたナゾ。

暇になつたらチャチャゼロと模擬戦でもやるだろ。

やる場合は俺の別荘に行つてくれるから楽。

あんまり壊してたら片付け + 説教だけど。

そういうや、カモ見てないな。

「どう行つたんだろ?」

仮契約はしてないつてエヴァさんから聞いたけど氣になる。

部屋の前まで来たので思考を止める。

ずっとと見ててくれた茶々丸に対しても礼を言つてエヴァさんと一緒にに入る。

ネギとアスナはおれの姿に目を見開いていた。

まあ、当然の反応か。

「兄ちゃん……エヴァ……。」

「あ、アリア?」

「俺がここにいる」とこ窓問もあるだろ?ナビ

今から説明するから少しの間黙つて聞いてて。」

一連の件について説明する。

話している間はきちんと黙つてくれていたので楽だった。

物凄く何か言いたそうな顔だったがそれはあえて無視する。

後でまとめて答えたほうがわかりやすいくお願い。

「つまり、今回のことは全部俺が計画したって話。

「ここまで何か質問は?」

大体の話を終えた俺は質問を促す。

そろそろ黙つていられなくなりそうな雰囲気だつたから。

「アリアは、なんでこんなことしたのよ・・・？」

「うん。 まずはそこだよな。

・・・俺が計画した理由はお前達二人に対して知つて欲しいことがあつたからだ。」

「知つて欲しいこと？」

アスナが質問してきたのは、今回の件を計画した理由。

一番大事な部分だ。

二人ともに違う理由があるからそれぞれ説明しなきゃならない。

だけど魔界にもできないからきちんとさせてもいい。

アスナに関して言えばこれで諦めて欲しい。

だから真剣に、わかりやすく話す。

「そうだな、まずネギ。」

「はー。」

「お前は今回ヒカルさんと戦つてビックリした?」

「うん……せつせつ言つて怖かつた。

魔法使いと戦つとは思つてなかつたし、負けるとも思つてなかつた。

けどそれは、ただの自惚れだと気づかされた。

僕なんてまだまだだつて、そう痛感させられた。」

「だらうな。

俺がネギにエヴァさんと戦つてもらつた理由はいくつかある。

まず、お前に魔法使いとの戦いを経験してもらつため。

俺らスプリンング・フィールドの血は普通の魔法使いよりも戦闘が多いだらう。

英雄つてのは全ての人から尊敬される訳では無いからな。

命を狙われる場合もあるだらう。

経験があるのと無いのじゃ生存率が全然違う。

だから経験させたかったつてのが一つ。

エヴァさんは魔法使いの中でもトップクラスの強さだ。

そんな上位クラスの魔法使いがどれほど強いのか。

それを知つてもらいたかったのが一つ。

後は俺らを通して魔法の世界に関わってしまったたらどれほど危険かとか

お前に世界の広さを知つてもらい、更に努力して欲しかったとか

理由はたくさんあるが、後は自分で考えてみる。

学んだことは多いはずだ。」「

これ以上は俺が説明しても無駄だからな。

自分で気づくのも大事。

だからネギはちょっとの間放置だ。

エヴァさんがあまりに静かだったから寝てるのかとも思ったが、普通に話し聞いてた。

少し驚いたな。

「後はエヴァさんと話してみるのもいいんじゃないかな。

エヴァさん、頼める?」

「お前は?」

「アスナさんと一緒にで話すよ。

これは他人に聞かせたい話でもないだろ?」

アスナさんはついてきて。」

黙つて着いて来るアスナに妙な感覚を覚えたが、今は関係無い。

とりあえず静かな場所で話そつか。

どこがいいかな・・・。

あ、ネギが過去話を暴露つたとこでいいか。

塔の天辺だったよな？

うし、いじり。

僕が目を覚ましたとき、この部屋には茶々丸さんとアスナさんがいた。
びつからぬまま氣絶して連れてこられたらしい。
しばらく待つてみると、ヒヴァンジョンさんと・・・兄さんが来

side ネギ

た。

なんで兄さんが？

訳がわからない。

説明するって言われたけど・・・。

説明が終わり、アスナさんと一人つきりで話があるらしく

一緒に部屋を出て行つた。

兄さんから聞かされた話は驚くことばかりだった。

僕は考える。

今回のことで何を学べたのか。

正直などこの、僕は自惚れていた。

天才だ、流石英雄の息子だ

そうと言われて今まで生きてきた。

だから心のどこかで自分は凄い、と思つていたんだ。

けれど、ハウアンジエリンちゃんと戦つて氣づかされた。

僕は弱い。

まだまだ強くなれる、と。

初めての戦闘は怖かった。

死の恐怖を味わった。

あれが本当の戦い・・・思い出すだけでも怖い。

自分の甘さを痛感させられたのは言つまでもない。

でも、兄さんが僕の為に動いてくれていたのはあの真剣な表情から嫌でも読み取れた。

なら僕は兄さんの期待に応えなければ。

僕の父さんは英雄。

だけどそのせいで僕達も命を狙われる可能性が高いんだ。

英雄って呼ばれるからには敵がいたはずだ。

その敵が生きていたら・・・。

きっと狙われる。そういうことじやないのかな。

うん。怖い。

けれど、ここで立ち止まってしまったたらきっと前に進めない。

僕はもっと強くなる必要がある。

自分が死なないために。

多くの人を救うため。」

そして・・・。

今まで何度も助けてくれた兄さん。

僕のことを真剣に思ってくれている兄さん。

そんな兄さんの隣にたてるよ！」。

守れるよ！」。

「ヒュアンジエリンさん、僕に魔法・・・いえ、戦闘技術をおしえてくれませんか？」

かうともうと、強くならなあや黙田なんだ。
父さんと回じへりこ、それ以上を囁いて。

ネギ
s.i.d.e
end

s.i.d.e ハヴァンジエリン

アリアめ、私に押し付けたな。

後で血を吸つてやる。

まあそれはいい。

それよりも目の前の坊やだ。

アリアの話を聞いてから随分考え込んでいる。

恐らく、今回のことを想い出してくるのだろう。

アリアの意図はどんなところにあるのか、とかな。

私はその答えを聞く役か？

「の先、強くならなきゃここは死ぬ。

それは確実だ。

私が育ててやるつとは思つが、これからどうあるのかはここから聞かなきゃつまらせ。

まあ聞くまでもないだろ？がな。

アリアに坊や。

どうりも本当に面白い。

双子の癖にその性格は真逆と言つてもいい。

本当に面白いな。

私は思わず唇を歪める。

嗚呼、退屈しないよ、本当に。

「ヒグアンジエソンさん、僕に魔法……いえ、戦闘技術をおしえ

てくれませんか？」

自分で考えてその答えを出すか。

「こいつは私が悪だとわかつているのか？」

いや、わかつているのだろうな。

やはり退屈しない。

魔法に拘らなこよつこなつてきていこるのもいに傾向だ。

「なぜだ、と聞いておいか。」

「兄さんは貴方をトップクラスの実力だと言いました。

兄さんが嘘をつくことはほとんどありません。

なら貴方はその通りなのでしょう。

それに、僕の戦闘スタイルは魔法一辺倒です。

なら魔力の使い方が同じ貴方に教わりたいと思いました。

魔力の少ない方に魔力の多い人の戦い方は教えられませんから。

そして、なにより多くのことが学べると思ったからです。」

色々考えたみたいだな。

思考力は悪くは無い。洞察力もある。

そして、強くなることに貪欲だ。

簡単なことじや諦めないだろ？

そしてなにより丑だ。

甘さがほとんど無い。

現実を受け止め更に進もうとしている。

「こつはお前の思った通り、いやそれ以上かも知れんぞ。

アリア、お前の弟は確かに成長している。

「生半可な修行じゃ済ませんぞ？」

「望むところです！」

後は任せる。

私がきっと強くしてやる。

・・・まあ半分は退屈しのきだがいいよな。

エヴァンジリン

s i d e

e n d

s i d e

アスナ

「アリアでいいか。」

あの夜、私は死んだと思った。

けど実際は生きてて、アリアが考えたことなんだって。

・・・はつきり言つて意味わかんないし。

全然理解なんてできなかつた。

そもそも、じじつの考えがわからなかつた。

あんな怖い思いしたのに、アリアが元凶だなんて。

「・・・なんで。」

「どうかしたか?」

「なんで、なんで私がこんな目に合わなきやならないの?」

私は、あなたの為に動いたのに・・・。

あんたが、心配だったのに・・・。」

気がつけば両側の瞳から涙が頬を伝ってぽたぽたと垂れていた。

なんだか、裏切られた気がしたから。

苦しかったのに、辛かったのに

全部アリアの所為だつたなんて。

信じたくなかつた。

信じたくなかつたんだ、私は。

「怖かつた・・・だらうな。

辛くて、苦しくて、逃げたかっただらうな。

悪いとは思つてゐる。

けど、これでわかつたろ?」

「なにがよ・・・。」

「ひら側、スプリングフィールドと関わるとこいつらが

どれだけ危険か、だ。」

私は、意味がわからなかつた。

それじゃ、なー。

あんた達はあんなことが普通にあるっていつの?

まだ九歳なのに?

この時の私はアリアが姿を偽つてこることなんて考えていなかつた。

それほどに衝撃的だつた。

「俺らは、平穏な暮らしになんておくれないだろ。」

もう言つ生まれなんだ。

俺たちの父親はこち側では有名な英雄なんだ。

英雄には打ち倒すべき敵がいる。

敵側からしたらこの上なく憎いだろうが。

憎がその子どもに向けられるのも当然。

命の危険なんぞやうにある。

俺は特にな・・・。

だから、アスナには知つて欲しかった。

平穏の大切さを、こち側に来るとどうなるかを。

そして、思いとどまつて欲しかった。

アスナの為ではない。主に俺の為に。」「

涙がいつそう溢れてくる。

私自身の決意なんてひとつだけなものだったことに。

ここからがそんな危険な世界に生きていこうといつも感じた。

なにより、全てを受け入れてしまっているアリアに・・・。

「なんですよ、なんで・・・？」

なんでそんな風に笑っていらっしゃるのよ・・・。

なんで当たり前のよつた顔してるの・・・？」

「前も言つたが、『仕方ない』ことだ。

親は子を選べないし子は親を選べない。

ここで文句言つたって、誰かを恨んだって

何一つ変わりはしない。

なら死なないように頑張つて、誰も死なせないうちから側から遠ざけて。

この手の届く、大切な人達は全力で守る。

それが俺にできる精一杯。

後悔しているのはもう嫌なんだ・・・。

だから、足搔いてみせる。

それが、俺の決意であり、おれの生きる道なんだ。

田の前でさう言つアリアの顔は、とても辛そうな

悲しい瞳をしていた。

さつと、何かあつたんだ。

それでも、泣き言を言わず、前を向いて生きている。

なんでもこつは・・・。

「だから、アスナさんは平穏に生きてください。」

それを捨てるのは・・・勿体無い。」

微笑むアリア。

その笑顔は、どこか悲しみを帯びていて無理しているのが目に見えてわかった。

だけどとも綺麗で、思わず見とれてしまつ。

先ほどのと違つ言葉遣いに距離を感じ、胸が痛む。

「でも、嬉しかったですよ。

僕らの為に怒ってくれて。

涙を流してくれて。

それだけで十分です。」

私に背を向けて歩き出す。

このままいけば、もう会えない気がした。

実際そんなことはないのだろうけど、そんな気がした。

そつ考えたとき、胸が苦しくて息が出来なかつた。

嫌だ、嫌だ。

「・・・待ひなさいよ。

勝手に・・・決めてんじやないわよー。」

あいつたけの声に私の思いを乗せる。

死ぬのは確かに怖い。

もうあんな思い、したくもない。

だけど、だけど・・・！

それ以上に、このまま放つておくれのも

あんたと離れるのも、嫌なのよー！

「私のことは私が決める！」

あんたが何を言おうと放つてなんて置けないわ！」

田を見開いて驚いているアリア。

私は、今度こそ、自分の意思で
そつちに行つてやるひじやない。

覚悟も決意もいくらでもする。

それ以上に譲れないものがあるから。

「何度も死ぬ思いをしますよ？」

「いいわ、なり強くなればいいのよ。

みんなぶつ飛ばせるよ！」

それでも死ぬんなら後悔しないわ。

私がバカだっただけ。

仕方ないわよね？」

「後悔……しますよ？」

「しなじって言つてゐるぢやない！」

「本当に、いこんですな？」

「何度聞いても同じよ……。」

絶対に引かない。

引いてなんかやらないんだから。

私はそっち側に行く。

そのためには平穏なんて捨てる。

あんたについていく為に。

しばらく沈黙が流れる。

見詰め合いつような形で何分も、何十分も固まっていた気がするわ。

ふとアリアが諦めたようなため息を漏らすまで。

「仕方ない・・・か。

わかりました。いや、わかつた。

なら俺は全力でアスナを守る。

絶対に死なせない。

強くもなつてもううがな。

泣き言は、聞かないからな？」

「・・・上等じゃない！

かかつて来いって感じね！」

そうか、私は、こいつに・・・。

自分の気持もわかつてすつきりした。

簡単な話だったのね。

絶対に離れないわよ。

覚悟しなさいね、アリア！

アスナ side end

結局いつなつたか。

エヴァ もんの話から予想は出来ていたんだけど。

ままならんna。

死なせるわけにはいかないし。

自業自得な気がする。

まあ、いいか。

守つくる。守りきつて見せぬや。

それが俺の責任つてものだ。

「セツニハズメ、あのホロジコサヘ。」

「ああ、あいつならキスキス煩いからぶん殴つて氣絶させておいたわ。」

「ああ、なるほど。」

「何が仮契約よ。」

簡単にキスなんてできるわけないじゃない。

ふざけてんのかしら？

あ、アリアは・・・別にいいけど。」

「はい？」

「守ってくれるんでしょ？」

なら戦力は必要じゃない。」

あれ、なんかフラグ立てた？

それはまずいんだが。

たまにドキッときせらわれるけど、実年齢考えるとなあ。

にしても仮契約か。

いい手ではあるな。

「おひだな。エヴァさんに頼んでみよつ。」

「・・・やけに信用してるわね？」

「ん？ エヴァさんは信用できるぞ。強いし。」

信用してなけりや襲わせないつて。

誇り高き人物ですからね、彼女は。

悪だとか言つて高笑いしている姿はシユールだけれども。

つてなんでそんな不満げな表情をしていらっしゃるのでしょうか、
アスナさん。

「ロコ」「断じて違う。」「ん・・・・。」

なんてこと言つのですか、あんたは。

エヴァさんがあなたが恋愛対象?ないない。

どつねえても犯罪です。

別に嫌いではないけどね。

むしり好きだし。無論ユーチューバーだけれども。

つてかしまらないな。

あーだこーだ考えるのバカらしくなつてました。

もうこここや。

俺が守りきれば言ひだけの話だ。

ネギにやるやる魔法のことばらしてもこいかな。

覚悟やら決意もできてるだらう。

この先不安ではあるけど、どうかするしかないな。

俺も、気合を入れなおさなきゃダメだな。

明日は学園長達に呼ばれるだろ? う。

ま、負けないぞ。

夜は更ける。

アスナとネギは成長し、俺も新たな決意を胸に。

なんとかしてみせよ! じやないか!

ねまな

「めぐへー、いの日が来た。。。」

JR新潟空港。

そこに全身ロープの明らかに変な人物がいた。

ロープから覗くのは赤い髪。

顔もフードを被っていてよく見えない。

とにかく怪しい。

「フフフ……やつと、やつと

やつと行けるわ……。

」の田わざだけ待ち望んだことか……

待つていなさい……麻帆良学園……」

やつ頃ばかりに面倒見ると、周囲を『こせやがー』と口説えていた。・。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤（後書き）

わかる人はわかると思います。

てかわかり安すぎたかも。

ちょっと適当になつた部分もありますが・・・。

まあいいです。

それにもしても、暑くなつてきましたね。

私は非常に眠い。

暑さに関係はあつませんが。

皆さんも体には気をつけくださいね。

私のようになつてはダメです。

それでは、次回も楽しんでいただけると幸いです。
感想お待ちします。

コーナー制限なんてかけていないのでどなたでも気軽に書いていた
だけると嬉しいですね。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会（前書き）

また一週間近くあいてしまいました。

申し訳ありません。

はつきり言ってスランプです。

今回はまた日常パートみたいなものです。
次話まで続きます。

朝から学園長室に呼ばれた俺。

話なんて一つしかない。

どう切り出されたとしても問題は・・・無いはず。

一応、色々な状況をショミレートしてはいる。

表向きの理由もきみちゃんと用意した。

だからきっと大丈夫。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会

「失礼します。」

朝、学園長に呼び出された。

九割九分昨日の話だらう。

こつちには一応の言い訳・・・表向きの理由があるから大丈夫だと
思う。

それで納得してもらつ。無理にでも。

そんな気持で学園長室まで来た。

ドアを開けてまず驚いたのは、魔法教師が勢揃いしていたこと。

瀬流彦先生にガンドルフィー二先生。

式集院先生、明石教授、神多羅木先生。

葛葉女史にシスター・シャーケティー。

ここまで来れば圧巻だ。

表情には出さないよう気につけたがもしかしたら隠せなかつたかもしだれない。

それぐらい驚いた。

どうか。エヴァさんつて結構危険視されてるから集めたのか。

後は・・・俺の評価とかそんな感じか。

どんな人間か判断したいってところじゃないかな。

「何故呼ばれたのか・・・わかつておるな？」

「ええと・・・思い当たる節が無いのですか。」

平常心を保つ為に軽口を叩く。

焦つたら負けだ。

どれだけ冷静に、且つ本心を悟られないかが大事。

熱くなるのはいいけど心だけに留めなければ。

「君は、何をしたのかわかつておるのかね！」

吼える Gandalf 「長いな。 Gandalf でいいか。

この人はやはり良くも悪くも熱い。

正義感が強いと言つのかな。

俺の正義とはベクトルが反対だけぞ。

「何を・・・とばかりこいつ意味でしょうか?」

あ、皆さんは自己紹介は必要ありません。

一応知っていますから。

それで、Gandalf 「先生は何が言いたいのです?」

警戒の色が強くなつた。

葛葉刀子にいたつては刀・・・野太刀か?に手を掛けている。

タカミチは相変わらずポケットに突っ込んでるし。

でも威圧は止めて欲しい。

問題無いんだけど、少しイライラするといつか・・・。

思わず動いてしまいそうになる。

条件反射の域まで来てるみたい。

フュイトとの修行の成果がここにきてわかる。

少し苦笑しそうになるね。

「ヒヴァンジエリン・・・闇の福音に手を貸したそうだな?」

アレがどういったものかわかつてているのかー」

エヴァさんを『アレ』扱いか・・・殺そうかね?

いや、俺がきれる所じゃないか。

エヴァさんに報告しようっと。

「そうですね・・・なら質問します。

Gandalf先生に答えてもらいますが、皆さん考えてくださいね?

約束を守らない人をどう思いますか?」

「いきなり何を言っているんだ?」

「いいから、質問に答えてください。」

少し面倒になつてきたので威圧する。

全員の驚く顔が面白い。

・・・最近自分の性格がよくわからんないなあ。

「・・・約束を守らないなど、人間として最低だ。」

「そうですね？」

と言つわけで、私の父、ナギ・スプリングフィールドは最低の人間です。」

「 なつ ． ． ． 」

「 だつて そりで しょ う？ 」

Haga サとと 約束して おきながら せつてい ない のですか ら。」

「 そ れ は 奴 が 閻 の 福 音 で ． ． ． 」

人間じやないと？

やはりなめて じりつ しゃる。

「エヴァさんは理由になりませんね。

人間じゃない?だからなんだって言つんですか。

約束したんですよ?その吸血鬼と。

もし守るつもりが無いのなら、問答無用で縛り付ければいい。

それでも、父は約束を交わした。

三年と言つ期間、エヴァさんは大人しく待つたはずです。

学園の警護までしました。

冷静に考えれば、彼女がどんな人物かわかるはずです。

そして今は何年目ですか?

十五年目ですよ?

父が守れなくなつた約束、そのままにしておいていいとも思えません。

だから私が変わりに引き継いだ。それだけです。

私は父の後始末をしただけ、何かおかしい部分でもありましたか

?」

全員黙り込む。

何とも言えない顔をしているのが印象的だ。

まあそういうな。

英雄に対して最低と言い、その英雄の約束を息子が引き継いだ。

文句なんてつけられるわけがない。

「それに、彼女はこの学園に来て一度でも人を殺したのですか？」

侵入者は知りませんが、麻帆良の人間は殺していないはずです。

それは皆さんがよくわかっているはず。

例え魔力が封印されていたとしても、彼女なら殺すことは簡単で
しょう。

少なくとも、私は彼女によく面倒を見もらっています。

学園長が彼女の家に押し付けたからですけど。

だから彼女を悪くなんて言わないですし、悪く言われたら口を出させていただきます。

人には、それぞれ持っている正義の形が違うと思つのです。

私と眞さんが違うように、眞さん一人ひとつも違うと思います。似てはいるかもしないのですが。

そして、英雄と呼ばれた父も多分違うんだと思います。

エヴァさんも然りです。

それを最初から否定しないでください。

正義の反対、悪ではないです。

眞さんも思つとこないはあると思つますが、ここは私と・・・父の
こつこつ

「彼女を信じていただけないでしょうか？」

あくまで下手に出てお願いする。

エヴァちゃんは『氣こしないだらけだ』、俺は『氣くなる』。

それに、呪いが解けてもこの地にここいらひともదれる。

あくまで俺の我欲なんだけだ。

「・・・君の『氣持』はわかった。

だけど、そつ簡単に割り切れる問題でもないんだ。

すまないが、考えてみるとしか言えない。」

「いえ、それだけでも十分です。

先入観さえ消えれば、彼女を悪く言ふなくなるでしょうから。

あつがとついであります。」

Gandorlとしか話してないけど、何となく全員の雰囲気が和らいだ
 気がする。

さて、とりあえずはまずまずな結果だけど・・・。

次はネギについてかな。

「学園長、ネギ先生についても報告・・・いりますよね？」

「・・・つむ。」

「結果だけ言います。」

ネギは更にやる気を出しこんな経験を得たみたいですね。

自分の未熟さに気づけたとも言つておつました。」

「やうか、君の言ったとおりになつたのう・・・。」

その為にがんばりましたから。

いい結果になってしまっては何も言えないよね。

「 そのために色々と画策しましたから。

それと、あまり焦ると碌な結果になりませんよ？

私はこれからも自分の思った通りに動きます。」

「 君は・・・何を考えておるんじや？」

「 簡単に言えば、大切な人達、この手の届く範囲にいる人たちが幸せになれるよう・・・ですかね。」

それ以上は望みません。

後は・・・必要以上に私やネギに一般人を関わらせないよつ」で
しょうか。

それが私の持つ正義・・・我慢ですか。」

「なるほどのう・・・あいわかった。

昨日はすまんかったのう。

もうよいが。」

「いえ、もう忘れました。

ですがあまり無茶なことはしないでくださいね?

何度も叩き潰しますから。

では失礼します。」

さて、終わった終わった。エヴァさんに報告しないとな。

軽い足取りで帰る。

思ったより話のわかる人たちでよかったです。

けど、なんか嫌な予感がするんだよな・・・。

警戒はしておこう。

アリアが退出した後の学園長室では・・・。

「わしらは焦つておったのかのう・・・。」

「そうですね、結局、彼の思つた通りになつてゐるわけですし……。

」

「それにしても……彼、本当に九歳なのか?」

学園長にタカラミチ、ガンドルフィーーーと続く。

皆の表情はとても堅い。

トヴァンジーリンのこととアコアのこと、そしてこれがかりどつたらいいのか。

そのことに対する感想であるのだ。

「じゃが……少なくとも彼の持つ正義、我僕とも言つておったのう。

あれは本心じゃねえな。」

近衛近右衛門は考える。

ネギのためを思つてした行動は本当に正しかったのか。

一般生徒を簡単にこちら側に引き込んで良いのか。

今回のことわからなくなつた。

いや、きちんと考ふるおえなくなつたと言つのが正しい。

どこかで考ふるのを拒否していたのだ。

大丈夫だろ、と高をくくつて。

けど良くなればそれがどれだけ馬鹿げた考ふたが、痛いほどに理解できる。

若こつちに死ぬのは田に見えていた。

気づいてよかつたと思つ反面、もうどうする」ともできない」とこ頭を抱える。

何人が関わるかわからないが・・・きっと数人はこちら側に来るはず。

もつ、任せるしかないのか。

けれど、アリアなら上手くやってくれそうな気もある。

・・・ここに来て彼に任せるなんて都合が良すぎると。

学園長は一人苦笑する。

希望も絶望も半々なこの状態に。

タカミチは昨夜のこと思い出していた。

威圧して、牽制して、気づいたら後ろを取られていた。

瞬動はありえないだろ？

文字通り、瞬間的に背後に回られた。

どんなカラクリがあるか想像もつかない。

けどわかつたこともある。

彼の実力が未知数で、少なくとも自分よりも強いということ。

あの年で・・・どんな努力をしたんだろう。

そして殺氣。はっきり言って子どもの出せるものじゃない。

益々わからない。

タカミチは恐れを感じる。

その計り知れない力に対しても。

Gandalfは自分の目指す正義を信じていた。

いや、疑わなかつた、がより正確だらう。

純粋に正しいと思つていた。

間違つているなんて考えたこともなかつた。

しかし、彼・・・アリア・スプリングフィールドの言葉で惑つた。

彼の言つことは尤もだつたのだ。

エヴァンジエリンは問題を起こすことなく、この十四年を過いじた。

三年の約束を十一年も延長しているのに。

そして、彼自身は現在彼女の家に住んでいるといつ。

その彼に危害を加えていない。

どうみても危険な人物ではない。

そもそも、警備まで引き受けているのだ。

この学園なんか潰そうと思えば潰せる。

それなのに今まで大人しくしていた。

危険・・・はないのかもしれない。

けれど簡単には割り切れない。

今まで根付いた物があるから。

それでも・・・。

戸惑いを覚えつつも少しずつ変わっていく。

それは関東魔法協会全体に言える事だった。

癒されに。

「ネコんとこに寄つてくか。」

さて、エヴァさんちに帰る前のこと。

なんだか嫌な予感があるのよ。

「う・・・寒気がするとこうか・・・。

何かが近づいてきているような・・・。

「・・・ア――――」

物凄く嫌な予感なんだよね・・・当たった試しがないけど。

色で例えるなら、赤?

あー、マジ齧だ、ネコに会わなきゃやつてられん。

わざと行ひへ、すぐ行ひへ。

茶々丸いないけど大丈夫かな？

あ、電話してみるか？

・・・エヴァさんち電話あつたつけ。

エヴァさんは使えないからな・・・たぶん。

機会音痴ですかね。

なんかもうやばい。

すぐそこまで迫つてゐるような・・・。

・・・これは夢だ。

そうだらう、なあ、アーニャよ・・・。

「夢だとこいつってくれ・・・アーニャ。」

「夢なんかじゃないわ！」

お姉ちゃんが助けに来て上げたからにはもう大丈夫！

金髪幼女に弱味を握られたのでしょ？ 可哀想なアリア・・・。

さあ！一緒に帰りましょ！

誰か、この暴走っぷりを止めてくれ。

とりあえず、暴走と言つかもう覚醒に近い何かがあったアーニャを何とか宥め（三十分がかった）、エヴァさんちまで連れてきた。

どうしようもないでしょ。

修行は終わらせたみたいだし。

なんか俺が帰るまでここにいるとか言い出すし。

・・・もつ現実から逃げたい。

逃避はいいまでにして、エヴァさんで説明しなきゃな・・・。

「ただいまー・・・。」

「えへ、おじやまします~。」

「ん? 遅かつたな・・・って誰だ?」

「あー出たな金髪幼女ー!ー」

あー、まずいな。

エヴァさん、きれる。

幼女は禁句なのに。。。

お子様であります怒るの!。

「だ、誰が幼女・・・だと?」

ほら、笑顔なんだけど青筋が浮かんでるし。

なんか引きつってるし。

「あんたよ、あ・ん・た!」

アリアを誑かした罪は重いわよー!」

「お前・・・私が誰だか知らないのか・・・？」

「知るわけないでしょ金髪幼女なんて！」

大体初対面なんだから当たり前じゃない！――

そんなこともわからないお子ちゃまなのかしじ？」

「ふふ・・・ふふふ・・・。

「うか・・・余程殺されたいと見える・・・。

小娘、祈りは済んだか？済んだよな・・・。

自分の不幸を呪え！小娘ええええええええええ――！」

なんとこう戦い。はつきり言ってアーニャの毒舌が痛い。

エヴァさんの急所に的確に打ち込んでいいてる。

二つの間にか成長したんだな・・・。

とか考えてる暇なんか無い。

エヴァさんがどんどん魔力溜め込んでいつてるから洒落にならない。

昨日血分けたのがまづつた。とりあえず・・・

「エヴァさん、ストップ。」

「放せアリアー！そいつを殺せない！――！」

「落ち着いてって。

H'ガ'アさんにも責任があるんだから。」

「・・・なんだと？」

少しは落ち着いたか。

いや、いつ魔法が来るかわからぬから怖かったよ。

「H'Jの子はアーネヤ。

アンナ・H'ガ'アが本名でアーネヤは愛称。

前H'ガ'アさんが[冗談を言つたあの手紙を本気にして]うちに来た
んだと。

俺を助ける為に。」

「待て、何故そつなる?」

「よくわかんないけど、俺が弱味を握られて……って想像をしたらしい。」

つてか俺つてそんなにちよこちよに見られてたのか……。

でも、俺を心配して来てくれたのは素直に嬉しいな。

ちょっと、いやかなり面倒なことになつたけど。

帰すことが出来ればそれでいいんだが……。

修行終わらせてるから時間はあるみたいだし。

何より、頑固なんだよな。

アスナに近いっちゃん近いかもな。

おしゃまだけど。

素直に帰るとは思わないし……かと言つて聞くと満足せしむれな
い。

難易度高くないか?

血業自得と言つてしまえばそれでなんだけど……。

とつあえず、今日は別荘にアスナとネギ呼んで話すか。

「「むうううう……」

おこない、こがみ合つてんじやねえ。

「あ、アーニヤ。

ちなみに金髪の子はエヴァンジエリン・A・K・マクダウルさん。

聞いたことへりこあるとは思ひナビ。

「え・・・エヴァンジエリンって・・・あの~」

「うんそ。」

「吸血鬼の・・・?」

「吸血鬼の。」

「い・・・いや-----」

たべられたる-----！」

そんなことではないから安心しなさい。

エヴァ やんも胸張らない。

微笑ましいだけだから。

別荘に入つてネギ達を待つ。

やはり最初は驚いたみたいだ。

しきつてほじゅべアーニャが年相応で可愛かった。

エヴァさんか称えろひつるとかつたけど。

なんかもつあれだつた。

犬猿の仲。

「アリア・・・。」

「どうした?」

なんか色々考へてるひづアーニャが近づいていた。

全く気づかないなんて・・・。

少し急げてるなあ。

久しぶりにフェイドと模擬戦しようか。

「アリアは、なんでここにいるの？」

「……どうこいつ意味？」

「何で麻帆良に……ヒヴァンジエリンの家にいるのかってこと。」

そういう風な目で見ちゃうが……。

なまはげだから仕方ないけど、少し寂しいね。

「理由なんかいっぱいあるわ。

修行だから、エヴァさんちに決まってしまったから

ネギが心配だから・・・それこそ探せばいいからでも。

まあでも、一番大きいのは麻帆良ですることがあるから。

エヴァさんちにいるのはその理由の他に、エヴァさんがいい人だからだよ。」

「いい人？吸血鬼なのに？」

「うん。俺家賃とか払ってないんだよ？

それなのに文句も言わず、追い出しありしない。

気に入られたからかもしけないけど、だからってそこまでする人なんか滅多にいないよ。

居心地いいし。それがここに留まる理由かな。」

「むぐれ・・・。」

「むぐれないむぐれない。」

偽りの無い本音だ。

それに・・・ここで石化解除の薬を作れば助けられるんだ。

アーニャの両親も、ね。

後はたわいの無い話をしてネギ達を待つた。

ネギはとても驚いていた。

パニックになっていたのが面白かつたけど。

その気持はとてもわかる。

俺も現実逃避したくらいだったからね。

アスナとは同属嫌悪とでも言つたのだろうか、とてもそりが合わない
みたいだった。

お願いだから、厄介」とは引き起こさないでくれよ？

そう願わざにはいられない。

ああ、原作はもう既にならないなあ。

俺は独りじかる。

この先の読めない展開に不安を抱えて・・・。

乙女達の戦い・・・。

アーニャは一目見てなんとなく悟った。

アスナのアリアを見る目が恋をしている人のそれだと。

なんとなく嫌だと感じたし、どうも気に入らない。

そしてそれはアスナも思っていたことだつた。

アーニャはアスナの体を見て嫉妬していたのはまた別の話だが。

「ふ、ふんつ。

アリアを誑かそなにて神が許しても姉であるこのアーニャ様が
許さないんだから！」

「誑かすつてあんた・・・。

それにあんたには関係ないでしょ？」

「なによー。」

「そつちこやー。」

「「むづづく・・・・。」」

これはアリアのいない所での一人である。

「ま、まああれね。

私はアリアと一緒に寝たこともあるんだからー。」

「そ、それがどうしたってこののよ。」

私なんかアリアの秘密を知っているんだかー。」

「むづづくう・・・ー。」

これを見たネギは後にこう語る。

二人の間には火花が散つていて近寄りたくなかつた。女人怖い、と。

「まあアリアは私のものだがな。」

「金髪幼女は黙つていなさい！」

「エヴァちゃんはネギで我慢しなさいー！」

「・・・喧嘩売つてゐるのか貴様らっ？」

「「「がるるるるる・・・・・・」」

その上、アリアは悪寒に苛まれていたそつ。

乙女達の戦いはまだ始まつたばかりだ。

「ケケケ、モツトヤレ。」

「彼も罪作りな人だね。」

「面白いからいいけど。」

それを遠くから眺める初代従者コンビ。

彼らには止める気なんてなことをじりに追記していくべ。

アリアの苦悩はまだまだ続くな。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会（後書き）

今回は本当に難産でした。

最近あまりいい内容が思い浮かばなくて困っています。

小説読んだり、漫画読んだりもしばしば。

気分転換と脳に刺激をつて意味ですね。

最近のお気に入り商業誌（店で売っているラノベとか）は「ソードアートオンライン」です。

非常に読みやすく、最近の人向けではありますがあれどね。

主人公が強いファンタジーものなんですが・・・。

漫画は「ピアノの森」っていう、まあ題名で判る通りのピアノの漫画なんですが。

個人的には凄く好きな漫画です。

ピアノなんかもやつっていましたからね。

多趣味な自分って結構浮気性かも・・・。

機会があれば読んでみてください。

無駄話が過ぎましたが、感想が怖いですね。
自分でも凄く中途半端な気がします。

それでも感想はやはり欲しいですが・・・。

些細なものでもいいので、疑問や質問、矛盾点、誤字脱字等もあれば気軽に感想へどうぞ。

時間はかかるても次の更新時までに返します。
皆様のご協力をお待ちしています。

改訂版に活かすぞー、おー。

ではまた次回、早めに投稿できるように努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763m/>

正義の反対はまた別の正義？

2010年10月9日19時39分発行